

〔源平盛衰記〕

七

丹波少將召下、附日本國廣狹竝笠島道祖神事

實方陸奥
笠島道祖
神前ヲ
馬ニテ過
ケ

神罰ヲ受
ケテ横死
ス
墓ハ社ノ
傍ニアリ

○上略長徳ノ年九月二十七日、實方赴任ノコトニカ、ハル、加様ニ名所ヲハ注シテ進セタル共、勅免ハナカリケル、終ニ奥州名取郡笠島ノ道祖神ニ躡殺サレニケリ、實方馬ニ乘ナカラ、彼道祖神ノ前ヲ通ラントシケルニ、人諫テ云ケルハ、此神ハ效驗無雙ノ靈神、賞罰分明也、下馬シテ再拜シテ過給ヘト云フ、實方問テ云、何ナル神ソト、答ヘケルハ、コレハ都ノ賀茂ノ河原ノ西、一條ノ北ノ邊ニオハスル出雲路ノ道祖神ノ女也ケルヲ、イツキカシツキテ、ヨキ夫ニ合セントシケルヲ、商人ニ嫁テ、親ニ勘當セラレテ、此國へ追下サレ給ヘリケルヲ、國人是ヲ崇敬テ、神事再拜ス、上下男女所願アル時ハ、隱相ヲ造テ、神前ニ懸莊リ奉テ、是ヲ祈申ニ、叶スト云事ナシ、我カ御身モ都ノ人ナレハ、サコソ上リ度マシマ斯拉メ、敬神再拜シ祈申テ、故郷ニ還リ上リ給ヘカシト云ケレハ、實方、サテハ此神下品ノ女神ニヤ、我下馬ニ及ハストテ、馬ヲ打テ通リケルニ、神明怒ヲ成テ、馬ヲモ主ヲモ罰シ殺シ給ケリ、其墓彼社ノ傍ニ今ニ是有リトイヘリ、人臣ニ列テ、人ニ禮ヲ致サ、レハ流罪セラレ、神道ヲ欺テ、神ニ拜ヲ成サ、レハ、横死ニアヘリ、實ニ奢ル人ナリケリ、サレ共都ヲ戀ト思ヒケレハ、

雀ト云小鳥ニナリテ、常ニ殿上ノ臺盤ニ居、臺飯ヲ食ヒケルコソ最哀ナレ、

〔西行物語〕

下

○上略、西行、實方ノ墓、そのかみかものりうしのまつりの

實方ニ對
スル女房
達ノ誓言

實方賀茂
橋本社
祀ララル
トノ説

時、みたらし河に影をうつして、我身ともおほえすとありけるそかし、院内の若女房たちは、ちかことには、さね方の中將のにくまれかふらんとたてけるそかし、さるみやこにすくれていみしき人の、この國にくたりつゝ、佛法の名字もさかぬ野中にて、つかはかりしるへにて、あはれさよとおもひて、○歌略ス、

〔徒然草〕

賀茂の岩本橋本は、業平實方なり、人の常にいひまかへ侍れば、一

年参りたりしに、老たる宮司の過しをよひとゝめて、尋ね侍しに、實方は、御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本や猶水の近ければと覺え侍る、○略

〔枕草子〕

てなほ世にめ、少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めてたき

ものにおもひしみけるに、なくなりて、上の御社の、一の橋のもとにあなるをさけは、ゆゝしう、せちに物おもひれしとおもへと、なをこのめてたきことをこそ、更にえおもひすつましけれ、

實方賀茂
ノ水本ノ
社ニテ
ノ軒ル
ノト

長徳四年十二月是月

三〇八

〔兼邦百首歌抄〕葛かつら

其外傳承に、社頭の鯉と云事有、實方の中將、賀茂の水もとの社にして、刀をくわへて、三尺の鯉のあかりけるを、何ときりしやらん、かつらの事さかり苔とて、なかくわらひてのやうにて、青色なる苔あり、是を云といふ説あり、○上略

○實方、圓融天皇ニ奉仕スルコト、永觀二年八月二十七日及ビ正曆二年二月十二日ノ條ニ、小兵衛ノ赤紐ヲ結ブコト、同四年十一月十五日ノ條ニ見ユ、

〔附録〕

〔奥羽觀蹟聞老志〕

名取郡 實方中將墓

有兩地、一則在鹽手村山畔、一則社北七町餘在農家後、曰北野宅、設叢祠、是其墓趾也、或曰、作衛臣者墳趾也、是傳古之佐具叡神社、而郷俗誤其語音者也、然不能質傳來之愆、

〔下野國志〕

神祇鎮座

雀明神 河内郡雀宮驛にあり、祭神藤原實方朝臣

の靈なりと云、○下略

墓ハ兩地ニ在リ

下野雀宮實方朝臣ノ靈ヲ祀ル

是歲、天台座主覺慶ヲシテ、宋杭州奉光寺ノ僧源清ニ、返牒及ビ經論疏義ヲ送ラシム、

〔伏見宮御記錄〕

權利一

七月十三日、罷出之間、於后町廊下、招取藤原時方、至光等

朝臣、相語雜事、○中略

金代、依左大臣宣仰左大史小槻奉親下知國々、就中當國司不辨知、早仰彼國、可令返進返抄、與仁聰同船僧齊隱所持來之大宋僧源清牒二通返牒、可令候之由、仰左大臣、々々仰匡衡朝臣、齊名等、源清所乞經論疏義、合若干卷、入函寫料紙若干卷、入細折櫃此中一卷、僅令書寫宮内史生永國、其遺卷々令召能書者、皆稱病由不參來、仍未書寫了、可入料管事等、出納允政、小舍人貞光所知也、

安置大宰商客曾令文事、

未給返金、至于勘文、仰出納允政令奉仕、藤原信經知案内、又小舍人爲善可知、

〔本朝文粹〕

十二

牒大宋國杭州奉光寺、飛舟傳天台智者教講經論和尚、

江匡衡

右至道元年四月日牒封、故座主權僧正暹賀領掌、未及報陳、溘以卽世矣、○長徳四年是歲

長徳四年是歲

三〇九

大江匡衡等ヲシテ返牒ヲ作ラシム等ノ經論等ノ書寫

宋商曾令文

返牒

暹賀ノ示寂

長德四年是歲

三一〇

年八月一日覺慶偏以年薦猥得領衆繼彼前好寫我短懷雖無傾蓋之呢語自
諳動履之德音梵志之求道十二年師及二十年智者之閱經十五遍師及五十
遍靜言思之匪直也人見贈法華示殊指二卷龍女成佛義一卷十六觀經記二
卷佛國莊嚴論一卷心印銘一章見斯文之彰外知其才之彌中文章六七聊有
注出不敢加雌黃唯是展情素爰見求仁王般若經疏彌勒成佛經疏小彌陀經
疏并決疑金光明經玄義荆溪然禪師所撰華嚴骨目其有則繕寫其无則闕如
目錄在別不更委注便附廻信到宜檢領僧龍之遺法水更挹東流義虎之發智
風盡振上葉投玉簡而增日域之光曜開石函而補天台之闕文中國之遠求有
感哉臨白首而始知恨隔面於鰲波萬里之外仰玄趾而遙契願促膝於龍華三
會之朝珥筆潛然珍重再拜今以狀牒牒到准狀故牒

年月日 日本國天台座主阿闍梨僧正法印大和尚位覺慶

○返牒及ビ經論疏義等送付ノ年詳ナラザレドモ姑ク茲ニ掲グ宋商
會令文ノコト便宜合敘ス源清新書ヲ贈リテ佚書ヲ請フコト長德元
年四月十六日ノ條ニ大江匡衡等ヲシテ返牒ヲ作ラシムルコト同二
年十二月二十六日ノ條ニ慈覺智證兩門ノ碩學ヲシテ新書ヲ議セシ

ムルコト同三年四月是月ノ條ニ見ユ

權僧正觀修ヲ園城寺長吏ニ還補ス

〔園城寺長吏次第〕第十五勸修 長德四年還任

〔僧官補任〕園城寺長吏次第 觀修 長德四重任治十年

〔法家相承次第〕園城寺長吏次第 第十五觀修 長德四年還任

○觀修ヲ園城寺長吏ニ補スルコト長德三年是歲ノ條ニ見ユ

金剛峯寺講堂ヲ再建ス

〔高野山文書〕八 又續寶簡集百二

〔草〕

注進

金剛峯寺燒失修復等事○中

長德四年講堂被造始之紀伊國司略

右大略注進如件

久安五年五月日

行事入寺大法師在判○以下

〔高野興廢記〕高野山二箇度中絕事 一條院並三條院御宇○中去長德四

長德四年是歲

三一

長徳四年是歳

三二二

年、戊戌、以紀伊守景理、令造高野山御願堂、仍寄事於造營進退寺領、宛行非分課役、顛倒諸僧供料、三代國司相續而不改其例之間、常住不退之山僧、忽失堅住之便、觀念坐禪之道人、永闕止住之課、或移住他寺、他山、或經廻洛中、洛外、仍以東三條院御願所、天野神宮寺山王院、僅爲依住之所、粗所令棲息、然而寺家、山籠、常住僧等、九旬安居之夏中、籠行上寺、三冬極寒深雪、止住下院、○中略

〔高野山舊記〕

高一 高野山根本大塔興廢日記

大塔初度爲雷火令燒失之事

同帝御宇、長徳四年、戊戌、金堂造始之、紀伊國司景理奉行、于時當山座主大僧正雅慶、寺家檢校明朝也、但第五代執行也

○講堂及ビ金堂燒失ノコト等、正暦五年七月六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔高野春秋〕

長徳四年 三月日、始經營金堂御再興土木之事業、

自雷燒已來、雖奏請興之、宣旨故、再是紀伊守景理依宣奉行、案景理者、因果不知、奉行宣旨、擬爲、所以者、與之、宣旨、故、再是紀伊守景理依宣奉行、何、蒙、金、堂、造、營、之、奉、行、宣、旨、擬、爲、所、以、者、絶、收、納、寺、領、之、年、稅、巧、不、果、造、立、而、卒、後、次、之、國、司、准、據、前、司、之、所、行、依、之、山、徒、糧、内、依、爲、國、司、不、入、天、野、檢、校、及、山、籠、僧、侶、總、補、法、式、而、已、口、碑、集、云、遠、方、頼、領、竹、房、渡、口、之、道、下、有、純、陀、淵、山、上、裏、南、有、高、野、村、古、伽、藍、跡、昔、年、小、野、宮、實、頼、村、領、野、寺、北、田、中、機、暮、悔、祈、頻、轉、有、怨、爲、靈、今、舉、其、礎、高、野、離、山、僧、徒、草、創、伽、藍、建、立、僧、坊、號、高、野、村、有、二、百、六、十、石

〔紀伊續風土記〕

四 伽藍之部三

金堂

初度炎上并再建、于時當山座主大僧正寬朝、山上別當廷頼、寺家檢校雅真、號和泉講師、第四代執行也、大師御入定以後、一百六十年歟云々、其後しは、伽藍再興を奏請すといへとも、勅許あることなし、漸く長徳四年戊戌春に至りて、金堂御再建の宣旨を賜へり、國司大江景理これを奉行し、三月朔日より土木の業を始む、而も景理其功を果さずして卒す、後國司橘儀懷、源惟能等、相續て大成せり、興廢記、信心集等を按ずるに、國司景理、其性暴戻に、を私納す、故に空しく、歳を経れども、功業ならず、終に泉下の鬼となる、後任の國司、總に金堂を造畢すと、いへとも、前司の風を稟習して、寺領を返すこととなく、偏に國領と號す、是によりて、山徒糧絶て、安住することあたはず、補ふのみ、是を高野第二回の廢絶といふ、

中宮、不斷御讀經ヲ行ヒ給フ、

〔清少納言枕草子〕

中宮 内省圖書寮本

せかほなる物

長徳四年 しきのみさうし

におはします比、にしひさしにて、ふたんの御ときやうあるに、佛などかけたてまつり、そうともものゐたるこそさらなることなれ、二日はかりあり

長徳四年是歳

三二三

老イタル
女法師
前ノ供物
ヲ乞フ

女房達
法師ニ戯
ル

女法師俗
謡ヲ歌フ

て、えんのもとにあやしきものの聲にて、猶かの御ふくおろし侍なんといへは、いかてかまたきにはといふなるを、なにのいふにかあらんとて立出てみるに、なまおひたる女ほうしの、いみしうすゝけたるきぬをきて、さるさまにていふなりけり、かれは何事いふそといへは、こゑひきつくりひて、ほとけの御てしにさふらへは、御ふくのおろしたへと申を、この御はうたちのおしみ給といふは、なやきみやひかなり、かゝるものは、うちうんしたるこそあはれなれ、うたてもはなやきたるかなとて、こと物はくはて、たゝほとけの御おろしをのみくふか、いとたうとき事かなといふけしきをみて、なとかこと物もたへさらむ、それかさふらはねはこそとり申といふ、くた物ひろきもちひなとを、ものに入てとらせたるに、むけに中よく成て、よろつの事かたる、わかき人々いてきておとこやあるこやある、いつくにかすむなと、くちくちとふに、おかしきこと、そへことなとをすれば、うたはうたふや、まひなとはするかとおもひもはてぬに、夜るはたれとかねん、ひたちのすけとねん、ねたるはたよし、これかすゑいとおほかり、又おとこ山の峰の紅葉は、さそなはたつや、かしらをまつはしふる、いみしうにく

中宮衣ヲ
賜フ

常陸の介
ト呼ブ

右近の内
侍ニ常陸
の介ノコ
シメテ給
語ラ

ければ、わらひにくみて、いねくといふにいとをかし、これになにとらせんといふをきかせ給て、いみしうかたはらいたき事はせさせつるそ、えきかて、みみをふたきてそありつる、そのきぬ一とらせて、とくやりてよとおほせらるれば、是給はするそ、きぬすすけためり、しろくてきよとてなけとらせたれば、ふしをかみて、かたにうちおきてはまふものか、まことにくくてみな入りにし、のちならひたるあらん、つねにみえしらかひありく、やかてひたちのすけとつけたり、きぬもしろめす、おなしすすけにてあれば、いつちやりてけんなどにくむ、右近の内侍の参たるに、かゝるものをなむかたらひつけてをきためる、すかしてつねにくる事とて、ありしやうなど、こひやうゑといふ人に、まねはせてきかせ給へは、かれいかてみ侍らん、かならすみせさせ給へ、御とくゑななり、さらによもかたらひとらしなとわらふ、そののちまた、あまなるかたゑの、いとあてやかなるいてきたるを、又よひ出でて物なととふに、是はいとはつかしきに思ひてあはれなれば、れいのきぬひとつ給はせたるを、ふしおかむはされとよし、さてうちなきよるこひていぬるを、はやこのひたちのすけはきあひてみてけり、そののちひ

太皇太后宮亮從四位下藤原爲頼卒ス、

〔千載和歌集〕

哀傷歌

花のさかりに藤原爲頼なとともにて、石藏にまか
れりけるを、中將宣方朝臣なとかかくと侍らさりけん、後のたひには
かならず侍らむときこえけるを、そのとし中將も〇八月是月爲頼も
身まかりにける、又のとしかの花をみて、大納言公任につかはしける、

具平親王
ノ御申歌

中務卿具平のみこ

春くれば散にし花も咲にけりあはれわかれのかゝらましかは

公任ノ御
返歌

前大納言公任

返し

行かへり春や哀と思ふらんちきりし人の又もあはねは納言公
任卿集

〔後拾遺和歌集〕

雜十五

春ころ爲頼長能などあひともに、歌よみ侍けるに、
けふのことをはわするなといひわたりてのち、爲頼朝臣身まかりて、
又の年の春なかつるか許につかはしける、

中務卿具平親王

官歴

いかなれば花の匂もかはらぬを過にし春の戀しかるらん
〔爲頼集〕〇宮内省圖藤原爲頼中納言兼輔孫、刑部少輔雅
月十三日任春宮少進、花山院、天祿元年正月七日敍從五位下、春宮、同年十二
月十六日任安藝權守、天延元年十月十八日任春宮權大進、天元元年二月二
日任左衛門權佐、同三年正月七日敍從五位上、佐功、永觀三年正月廿一日任
丹波守、寛和元年十一月廿日敍正五位下、同二年十月十日敍從四位下、寺石
功、一條院、長徳二年三月十四日兼太皇太后宮
大進、

〔尊卑分脈〕

藤原氏

世系

雅正 刑部大輔、從五下、

爲頼 歌人、從四下、攝津守、丹波守、太皇太后宮亮、

伊祐 從四下、信乃守、阿波守、讚岐守、或一輔、

脩政 正五下、和泉守、

良道 長門守、正五下、

景頼 母、

長徳四年是歳

長徳四年是歳

三一八

爲長從五下陸奥守
母同爲頼
 通經從五上常陸介女
母筑前守忠勢
 公經從五下加賀權守
母
 信經從五下越前守
母
 頼經正五下出雲甲斐等守
母
 爲時

〔爲頼朝臣集〕

子なくなりて、なきねの夢さめて、現と覺えつるとて、前の前

栽をみて、

瞿麥を夢にみて社いつしかとあけて空しき床夏の花

むまこの、をうなにてむまれたるをきして、

ささかかねもし、からすはよきくにのわかき受領の妻かね(なら)かもし

うまこのいた、き餅ひを見せたれば、

年をへて數増るへき細れ石の巖とならむ程をしそ思ふ

はら(爲長)からの、みちのくのかみなくなりてのころ、きたのかたの、なまみ

るをこせたりしに、

去男兒ノ死

生孫女ノ誕

餅孫女ノ戴

ス弟爲長卒

妹

いそにおふる見るめにつけてもしほかまのうらさひしくもおもほゆるかな

ひせ(肥前)にくたるいもうとのもとに、

ふるさとのくさはをまたむ(むす)すふへきはるけきみちはいのちともかな

返し

ふるさとにむすひしくさの契りあればちとせの春はたれもたのまむ

いもうとの、老いたるかもとより、年頃の人なくなりたるを訪ひたる

に、

いけらしと厭ふにしなぬ老の身を惜むに消る露そともかな

〔新古今和歌集〕

八 哀傷歌

すみ侍ける女なくなりけるころ、藤原爲頼朝

臣妻、身まかりにけるにつかはしける、小野宮右大臣(實重)

よそなれとおなし心そかよふへき誰も思ひのひとつならねは

返し

ひとりにもあらぬ思はなき人も旅のそらにやかなしかるらん

〔爲頼朝臣集〕

正月十三日、ひとひまゐり給へりし(昭平親王カ)のち、左兵衛のかみの宮

長徳四年是歳

三一九

爲頼朝
平親王

爲頼ノ妻
卒ス

にまいらせ給、

あかさりしきみかにほひのこひしさにむめのはなをそけさはおりつる

みや、

いまか^(ま)とるそてにうつせるうつりかは君かをりけるにほひなりけり

いゑあるし、

こひしきにはなをおりつゝなくさめはうくひすきむえたものこらし

このころ今上の宮^(御眞親王)春宮などに、人々まいりつかふまつるとききて、

身をよせんかたもおもへ^(て)はなかりけりこひをいとはん人しなれば

さみの御ふくなりけるところの、たてしとみに、さうふのねをかけた

りければ、

いにしへはたもとにかけしあやめくさけふはなかねをなに、よすらん

〔拾遺抄〕

^(雑部下)

三條のおほい^(頼忠)まうち君の家のかへのゑに、旅人の盗人

ぬす人の龍田の山に入にけりおなしかさしの名をやなかさん

〔爲頼朝臣集〕これは三條との、

爲頼朝三
條朝忠

草枕しのふるたひのからころもつゆにたもとそあらはれぬへき

かへりに、

いろふかきたものほとはきてそみるいと、みやこのなかめらるゝに

^(朝成)

三條中納言つ^(朝成)のくに、らうし給ところ、御ともにまて、はまへち

かき所に前裁なとをかしきに、かれたるすゝきの上より見えければ、

はま風になひくをはなはあさほらけまかきによする波かとそ見る

〔爲頼朝臣集〕十一月廿八日前大納言なとして、酒まいりに、

ひとをこそあらましかはとなけきしかわれをはたれかおもひいつへき

とおもひたまへつるに、けふなむすこしたのもしうはへる、

わかれてはまたもあひみんよはいこそなとてなけきしむかしともかな

いとたのもしかりし物をとそ、人しれすおもひたまふる、

おほかたのそらのつゆかはきみかためよろつよかねて^(け)をけるきくをや

たふさにけかるのさま、^本

こと、は、ほとけそとかもきくの花むかしうへてしきくのもと、^本

月のうた、少將にかはりて、

長徳四年是歳

三二二

爲頼朝三
條朝成

爲頼朝前
大納言

爲頼朝少
將

爲頼ト左
大辨

長徳四年是歳

三二二

秋かせによふけぬらんおほ空の月のかつらのなひくかけみゆ外略ス
いまの左大辨の御子のいかに、おほわりこのふたに、いちひめのかた
ちなとかけるところに、
いちひめの神のいかきのいかなれやあきなひものにちよをつむらん

爲頼ト唐
物使

このひとからもつつかひにゆきたるころ、月をみて、
おもふ人あるかたへゆくひさかたの月のかつらにふみやつけまし

(おなしころ)おなし人、くたりしころの(ナシ)

いとしくおいはそふともゆきかへるひからはしはしみしかゝらなん

藏人なるの(ナシ)からものつつかひにくたる殿上人の餞にかはりて、とし

かへりては、かうふりたまはるかへりければなるへし、

(まぢみるもよの常なれや)さかりちるよのつゆなれやなかく(ナシ)としのかへらんことをしそおもふ

しれる人、つくしのかたにくたるほど、本あふきに、ふねのかたかきたる

を、これはうちの(ナシ)きみにとて、とふらふ人のありしかは、

おもふ人かす(か)ふる(か)う(か)ち(か)の(か)き(か)み(か)か(か)た(か)め(か)と(か)み(か)く(か)さ(か)つ(か)め(か)る(か)ふ(か)ね(か)に(か)や(か)は(か)あ(か)ら(か)ぬ(か)

爲頼ト筑
紫下向ノ
人

爲頼ト讃
岐介伊祐

つかさめしにのそむことありけるころ、さぬきのすけ(伊祐)これすけか馬
をかりければ、すけ、つかさ給はらはとらせんとおもふ馬なりとて、か
したりけるを、かへすとて、

心ありてかひけるこまのいはしにあやなくのりてわれもたのもし

〔爲頼朝臣集〕

きよきことせさすとて、文慶君のもとに物し給ふ所、あめも
るとききて、

くもりなき君かみむろのそらはなはれてうろのやとりをいかみらん

返し

うろなれと君かさやけきやとの中に以下

年頃あひそひたる人、なくなりたるころ、(貞平)申務の宮の母の女御(貞子)の御も

とより、

この代にて契りしことを改めてはちすの上の露と結はむ

爲頼ト宣
耀殿女御
子

爲頼ト村
上天皇女
御莊子

爲頼ト石
藏僧文慶

正月ついたち、心ある人の御もとに、(貞子)せんよう殿より、あゆのかたをつ

長徳四年是歳

三二三

爲頼ト宣
耀殿ノ民
部の乳母

くりてありければ、
むしにたにあさむかれしとおもふ身をいかなるあゆのかはるなるらん
またせんねう殿のみふのめのとよりをなしころ、
きみはいかにねさめすらめやおもひやるわれたによをはおもひあかすは
かへし
ねさめとはまとろむほとのあらはこそうきよをゆめとみるはかりなり

爲頼ト道
兼家ノ女
房

右大臣とのの女房、さとへいてんとてくるまかる、かすとて、
またしらぬこひのやまちにまとふかなさとへとさそふ人もあらなん
かへし
はかなくてきえにし露をはちすはにきみしむすはうたかひもなし

わかゝりしをりに、つねに女のもとよりかへされて、
かりのこもすもりはありといふめるをなとてよことにわれかへるらん
はかりてあはさりける女に、

爲頼ト中
川向ノ女

白玉か涙かなにそよひくにはかりあたりの袖にこぼるゝ
しれる人なかくはへたてゝすみけるに、七月七日のよる、
七夕のくもちはしらすなかくはをはやうちわたれかさゝきのはし

稻荷詣

いなりにまうてあひたる女のもとにふみやりけるを、ほかさまにな
れりときゝて、

爲頼ト攝
津長田ノ
森ノ女

わかためはいなりのかみもなかりけりひとのうへとはいのらさりしを
はやうけさうしける女、つのかになかたのもりといふところ、あり
ときゝてやりける、

いのちたになかたのもりのなかりせはたよりにきみかやとをみましや

越前ニ下
ル

越前へくたるに、こうちきのたもとに、

夏ころもうすきたもとをたのむかないのころのかくれなければ

みちのくにのかみのをくりしてかへるに、女車あふさかのせきにゆ
きあひたり、むかし心かけたりける人に、きゝなしてやる、

爲長ノ赴
任ヲ送ル

いにしへはこえかたかりしあふさかをいつちとかへるなみそかなしき
この女、さるやうありて、いせにかよふにそありける、さゝしこともあ
れとも、ひかことにやとてとそ、

ものおもひに、を^遠と^るへは^經へりに^けりかほをか、みのかけに見侍り
て、

なましぬにとまれるかほをけさみれはか、みやつらきなみたとまらす

〔勅撰作者部類〕

自帝王至庶人之部

爲頼四位、太皇太后、宮大進、刑部少輔、藤原雅正、男、至長徳二年

拾遺集秋、

別、一、雜下、

後拾遺集秋上、

千載集雜下、

新古今集哀、

續後撰集賀、

續拾遺集秋上、

圓融院ノ
歌合ニ列
ス

〔爲頼朝臣集〕

故院の歌合に、くさむらのむしをたつぬといふ題を、

おほつかないつれなるらんむしのねをたつねはくさのつゆやみたれん○外二首略ス、

少僧都信慶寂ス、

〔僧綱補任〕

○興福寺本

權律師信慶

永延元年十二月廿七日任、天台宗、

延暦寺、左京人、右近中將男、永祚元年五月七日轉任權小僧都、長徳四年月日

官歴

入滅、

〔僧綱補任〕

○徳川昭武氏本

權律師信慶

天台宗、延暦寺、永延元年十二

月廿七日任、年六十、臘四十三、故延暦寺座主少僧都義海和尚弟子、左近中將

藤助信男、母右中辨平希世女、天慶八年四月廿五日得度受戒、天祿三年十二

月廿八日補内供奉十禪師、天元五年六月十四日依座主正算僧都奏、爲法性

寺阿闍梨、永祚元年十二月廿七日任權少僧都、六十二、長徳四年十二月廿九

日轉少僧都、月日卒、

法性寺阿
闍梨

年末雜載

變異、

〔日本紀略〕院一條 四月八日丙申、中略是日也、左近陣北掖羽蟻出來、

六月二日己丑、辰刻鹿爲狼被追入中院、

神社、

〔神宮雜例集〕政二印事 宮司政印事

長德四年五月廿日、大宮司正六位上大中臣朝臣公忠印笥、以銅改鑄、元雕木也、

〔皇大神宮政印銅笥銘〕

大神宮司正印笥、元雕木也、而大司公忠長德四年五月廿日、鑄改於銅、

〔石清水文書〕

五田中家文書附錄 權別當三人相竝例但寺任

〔菊大路文書〕

八山城別當事 第十六 康年大法師同御字、長德四年五月廿一日官符、從權別當之時、長德三年蒙寺務宣旨、仍別當朝鑿俄辭退、

〔類聚符宣抄〕

補神琴師事

羽蟻
狼鹿ヲ中
院ニ追入
ル

大神宮司
政印
改鑄ノ

石清水八幡宮別當

神琴師補任

鹿島宮司

豐受大神宮禰宜

太政官符 神祇官、外印、

應以正六位上大中臣朝臣良廉補任權神琴師伊岐貞廉死闕替事

右得彼官去四月廿六日解僱、謹檢案内、伴權神琴師貞廉、以去長德四年十月

十六日蒙官符、勤仕職掌、略中

長保五年十一月二日

〔類聚符宣抄〕

一諸神宮司補任事

太政官符 常陸國司

正六位上大中臣朝臣元鑒

右去年十二月十三日補任鹿島宮司畢、國宜承知、一事已上依例令執行、符到

奉行、

左中辨高階朝臣

左大史多米朝臣國平

長保元年二月廿八日

傳符一枚、四剋

〔二宮禰宜補任至要集〕

第五 中絶輩補任事

外宮

一係祭主同 二季光

八代中絶、長德四年十二月十七日任、

〔二宮禰宜補任至要集〕

第二十一 傍官禰宜讓補事

長德四年雜載

外宮 二安兼(長徳) 同四年、讓甥季光、

佛寺

〔法家相承次第〕第十二探題次第

西 實因大僧都、長徳四年六月、

〔伏見宮御記録〕權利一 七月十一日、中 依召參法興院、被仰云、明豪放阿闍

梨解文事、可催左大殿門云々、

八月十五日、詣左府、中 被示僧綱并諸僧等存日辭書、歿後進上、極不便事也、

八月日詣左府、申勅報、相謁僧都、申順朝解文、已有許容、

九月廿五日、參内、中 東寺定額覺緣文、候宿、

〔東寺長者補任〕一 權少僧都雅慶 十月卅日灌頂行之、

〔安樂寺草創日記〕中 法華堂淨土寺 釋迦如來、一 條院御願、長徳四年戊戌、建立、寄

進綾野莊四十町、勾當三昧六人、預一人、

公家

〔伏見宮御記録〕權利一 七月四日、中 亦自藤原時方 問右兵衛佐、更問藤原時方 近江介、次問

民部大輔、參彈正宮、中 詣左府、

探題

明豪阿闍梨解文ヲ

僧綱等ノ辭書

東寺定額僧覺緣

東寺結緣灌頂

淨土寺中法華堂建立

藤原行成同時方等ヲ訪フ

行成ノ参内

牛童ヲ左獄ニ下ス

所充文

藤原行成ノ物忌

藤原時光ノ男元服ス

外宮 二安兼(長徳) 同四年、讓甥季光、

佛寺

〔法家相承次第〕第十二探題次第

西 實因大僧都、長徳四年六月、

〔伏見宮御記録〕權利一 七月十一日、中 依召參法興院、被仰云、明豪放阿闍

梨解文事、可催左大殿門云々、

八月十五日、詣左府、中 被示僧綱并諸僧等存日辭書、歿後進上、極不便事也、

八月日詣左府、申勅報、相謁僧都、申順朝解文、已有許容、

九月廿五日、參内、中 東寺定額覺緣文、候宿、

〔東寺長者補任〕一 權少僧都雅慶 十月卅日灌頂行之、

〔安樂寺草創日記〕中 法華堂淨土寺 釋迦如來、一 條院御願、長徳四年戊戌、建立、寄

進綾野莊四十町、勾當三昧六人、預一人、

公家

〔伏見宮御記録〕權利一 七月四日、中 亦自藤原時方 問右兵衛佐、更問藤原時方 近江介、次問

民部大輔、參彈正宮、中 詣左府、

行成ノ参内

牛童ヲ左獄ニ下ス

所充文

藤原行成ノ物忌

藤原時光ノ男元服ス

諸家

〔伏見宮御記録〕權利一 十一月二日、不出行、

十八日、昨今物忌、

廿七日、物忌、

十二月五日、中 詣大藏卿御許、二人息郎今日元服云々、爲相訪也、

七日、今明物忌也、

疾病、生死、出家、

〔今昔物語〕十七

依地藏助活人造六地藏語第廿三

今昔周防ノ國ノ一ノ宮ニ、玉祖ノ大明神ト申ス神在マス、其ノ社ノ宮司ニテ、玉祖ノ惟高ト云フ者有ケリ、神社司ノ子孫也ト云モ、ト少年ノ時ヨリ、三寶ニ歸依スル志有ケリ、其ノ中ニモ、殊ニ地藏菩薩ニ仕テ、日夜ニ念シ奉テ、起居ニ付テモ、敢テ怠ル事无ケリ、而ル間、長徳四年ト云フ四月ノ比、惟高身ニ病ヲ受テ、日來ニ惱ミ煩フ、六七日ヲ經テ、俄ニ絶入ヌ、惟高忽ニ冥途ニ趣ク、廣キ野ニ出テテ、道ニ迷テ、東西ヲ失ヒテ、涙ヲ流シテ泣キ悲ム間、六人ノ小僧出來レリ、其形チ皆端嚴ナル事无限シ、徐ニ歩ミ來リ向ヘリ、見レハ、一人ハ手ニ香爐ヲ捧タリ、一人ハ掌ヲ合セタリ、一人ハ寶珠ヲ持タリ、一人ハ錫杖ヲ執レリ、一人ハ花筥ヲ持タリ、一人ハ念珠ヲ持タリ、其ノ中ニ香爐ヲ持給ヘル小僧、惟高ニ告テ宣ハク、汝チ我等ヲハ知リヤ否ヤト、惟高答ヘテ云ク、我レ更ニ不知奉スト、小僧ノ宣ハク、我等ヲハ六地藏ト云フ、六道ノ衆生ノ爲メニ、六種ノ形ヲ現セリ、抑々汝チ神官ノ末葉也ト云モ、ト年來我カ誓

周防玉祖
社宮司惟
高蘇生ス

地藏ノ靈
驗ニ依ル

惟高六地
藏堂ヲ建

寂照夢ニ
惟高往生
ルノ相ヲ見

ヲ信シテ、懃ニ憑メリ、汝チ早ク本國ニ返テ、此ノ如ク六軀ノ形ヲ顯ハシ造テ、心ヲ至シテ可恭敬シ、我等ハ此ヨリ南方ニ有リト、如此ク見ルト思フ程ニ、既ニ三ケ日夜ヲ經タリ、其ノ後、惟高自ラ起居テ、親キ族ニ此ノ事ヲ語ル、此ヲ聞ク人、皆涙ヲ流シテ喜ヒ悲ミ、貴フ事无限シ、其ノ後、惟高忽ニ三間四面ノ草堂ヲ造テ、六地藏ノ等身ノ綵色ノ像ヲ造奉テ、其ノ堂ニ安置シテ、法會ヲ設テ、開眼供養シツ、其ノ寺ノ名ヲハ、六地藏堂ト云フ、此六地藏ノ形チ、彼ノ冥途ニ見奉レリヲ寫シ奉レル也、遠ク近ク、道俗男女來集テ、此ノ供養ニ結縁スル事員ヲ不知ス、其ノ後、惟高彌ヨ心ヲ專テ、日夜ニ此ノ地藏菩薩ヲ禮拜恭敬シ奉ケリ、而ルニ惟高齡七十ニ餘テ、鬢髮ヲ剃テ、出家入道シテ、永ク世路ヲ棄テ、偏ニ極樂ヲ願ケリ、遂ニ命終ル時ニ臨テ、口ニ彌陀ノ寶號ヲ唱ヘ、心ニ地藏ノ本誓ヲ念シテ、西ニ向テ端座シテ失リ、ケ此ヲ見聞ク人、皆涙ヲ流シテ貴ヒ悲ケリ、亦其ノ時ニ、參河入道寂照ト云フ人有リ、道心堅固ニシ世ヲ棄ル人也、其人ノ夢ニ、此ノ惟高入道カ往生ノ相ヲ見テ人ニ告ケリ、然レハ疑無キ往生也トソ、人皆云貴ル、ケ實ニ社司ノ身トシ、神物ニ犯ス所多シト云モ、ト地藏ノ悲願ニ依テ、終ニ往生ヲ遂ル也ケリ、然レハ

世ノ人此レヲ聞テ、專ニ地藏菩薩ヲ可念奉ナム、語り傳ルヘタトヤ、薩靈驗記、
元亨釋書同ジ

〔伏見宮御記錄〕

權記一 七月四日、詣內府、訪兵部大輔、禪師君所惱、

七日、○中略式部大丞源國政昨死去、家人□□□□由也、甚足悲、國政者故美濃守正四位下通理朝臣男、實者故從三位源清延卿男也、歷右兵衛尉、兵部丞、遷任當職、身長六尺餘、其力强健、六月中病疫、遂以夭亡、嗚呼悲夫、

〔尊卑分脈〕

源光孝氏

通理

國政母

〔伏見宮御記錄〕

權記一 七月十日、○中略此日前參河守從五位上布瑠以孝朝

臣卒、故大藏大輔從五位上千門宿禰男也、

十一日、○中略土佐守從四位下平朝臣文忠卒、

廿二日、戊寅、兵衛死、此東對北面也、此夕出於彼東宅、

〔外記補任〕

二 大外記正六位上紀朝臣相門 七月死去、

〔尊卑分脈〕

藤原氏南家
眞作卿孫

源國政卒

前三河守布瑠以孝卒

土佐守平文忠卒、
東對北面兵衛卒、
大外記相門卒

藤原方隆卒

藤原共政ノ周忌

石清水俗別當安遠出家
安遠ノ官歴

棟利 東宮少進、從四上、

方隆 冷泉院判官代、從四下、攝津、甲斐、備後等守、
母、長德四七卒、

良資 母、從四下、大和、安藝等守、皇后宮大進、

惟賴 母、從五上、伊勢、若狹守、皇后宮少進、
典侍藤原麗子、

棟方 母、從五上、伊賀、若狹守、織部正、

惟實 母、二條院判官代、從五下、

〔權記〕

長保元年九月三日、早朝參內、依宰相中將消息、奉書法華經外題、是故

共政朝臣周闕法事料云々、

〔石清水祠官系圖〕

良常 俗別當、
第一代

安遠 俗別當、神主、從五位上、被
下宮寺雜務執行之官符、

永延元年十一月八日行幸、敍正五位下、長德元年十月廿一日行幸、敍正五位上、同四年九月、依病出家、天元二年己卯四月十三日、賜宮寺雜務執行官符云々、

異本云、第七神主、第二俗別當、權俗別當、神主、天延四年三月廿日、補神主、永

觀元年六月五日、俗別當官符、蒙宮寺雜務執行官符宣旨、依之改書署所、其以前三四代不書署所、但往古書之云々、永觀元年六月五日、官符從神主從五位上、

兼輔 俗別當、神主、正六位上、

兼任

藤原行成
スノ男兒死

〔伏見宮御記錄〕

權記

十月十八日、未刻去年誕生男兒亡歿、雖在嬰孩、容貌

甚美、漢書注、師古曰、日者煩熱瘡、今日瘡氣少伏、依見無力之賴氣、母氏雍樹以

居愛愍之甚也、幼少之者、氣力無賴、仍爲不觸穢、下立東庭、暫之母氏悲泣、即知

兒亡之刻、此夜宿爲文朝臣宅、又詣左府、

十二月二日、略、○中即參御所、略、○中此間京兆送消息、（源泰清方下同）有產氣色云々、即令奏

事由、又件事等示付右衛門尉、行正、白地退出、先參院爲請大僧都也、僧都被云、

只今可始後夜時、々後可至□□□□左府（此間）鳴申此夜案內、次歸宅、

三日、自左府退出、及曉京兆出被示產事、遂之由男子云々、爲悅不少、即還參之

間、內府被參內、日出右大將被參、有頃左府參給、午刻京兆消息云、雖遂產事、今

一事未遂、邪氣所爲歟、僧都雖來臨、忌觸穢、不著座、早退去云々、仍驚亦詣彼房

行成ノ男
兒生ル

七夜

讀書

藤原行成
宅ノ女病

源通義卒

申案內、同車到三條、僧都乍立加持、一念珠間、平安遂了、邪氣雖成妨、佛力依無

限也、歡喜云々、此間少將成房、訪來、即同車至少將宅休息、

五日、略、○中次到三條、乍立謁京兆、

八日、平產七夜也、左馬頭、相尹、左源中將、經房、藤中將、實成、權左中辨、（藤原）說孝、右中

辨、（藤原）爲任、新少將、成房、右兵衛佐、經通、權佐、公信、阿波權守、濟政、藤式部、泰通、右衛

尉、行正、右衛門尉、則隆、等來、聊羞盃酒、諸大夫廿許人雜役、內藏頭、（藤原）陳政、左馬權

頭、兼資、追來、夕陽了、讀書宣義朝臣、被物褂一重、袴一腰、（皆用）產婦前、（內匠）頭女

房、衝重冊前、（外記）實、（廿前）殿上人料、內藏、（廿前）侍料、飛驒守、遠晴、長食九具、（一宜）茂、（一高）輔、（一廣）

信、（一穀）倉院、

十一日、候內、略、○中子刻從宅告來、女人病惱危急之由、仍罷出、新少將賴貞等相

從、

〔尊卑分脈〕

源字多
氏

雅信 左大臣、贈正一位、

通義 式部丞、正六位上、
母大納言元方女、長德四丁卒、

戶籍

長德四年雜載

〔延喜式裏文書〕

○二公 延喜式卷第十條實氏所藏裏文書

○前文

戶主忍海永置長德四季籍

籍後除

籍後附

口

口

戶主忍海永置季漆拾歲

忍海恒真季肆拾壹

忍海帶丸季肆拾玖

忍海直□年參拾壹

忍海用綿丸季貳拾

忍海吉守季陸拾壹

忍海恆□季肆拾貳

忍海恆員季漆拾

死亡

隱首

不課

課

老丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

戶主忍海永置

籍後除

籍後附

帶丸

童子丸

忍海童子丸季肆拾壹

忍海永安季貳拾陸

忍海綿丸貳拾壹

忍海吉真年肆拾任(伍丸)

忍海吉水季參拾

忍海置員年肆拾伍

忍海春置年陸拾

忍海弟丸季貳拾

忍海綿永年陸拾

忍海半丸季貳拾壹

忍海麻太丸季貳拾壹

忍海恆永季漆拾

忍海直兼季肆拾壹

忍海千燈丸季貳拾

三野藥師丸季貳拾壹

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

正丁

老丁

正丁

正丁

正丁

正丁

藥師丸

千燈丸

麻太丸

目連丸

糸丸

犬丸

庭子丸

戶主賀陽
義宗

三野永光季肆拾伍

正丁

忍海目連丸季肆拾

正丁

忍海糸丸季貳拾壹

正丁

忍海永見季肆拾

正丁

三野恆見季參拾伍

正丁

忍海安富季參拾伍

正丁

忍海犬丸季貳拾

正丁

忍海庭丸季拾捌

中男

忍海庭子丸季拾捌

中男

忍海糸丸季拾捌

中男

犬甘庭子丸季拾捌

中男

參戶主賀陽義宗長德四年

籍後除

死亡

籍後附

今年合定

口 口

戶主賀陽義宗年伍拾歲

不課

酒人三郎丸季肆拾漆

正丁

酒人庭子丸年拾捌

正丁

井上衣丸年拾捌

中男

肆戶主賀陽豐益長德四年

死亡

籍後除

籍後附

今年合定

不課

口 口

戶主賀陽豐益季漆拾捌

老丁

賀陽時道季漆拾伍

老丁

賀陽有道季陸拾壹

正丁

長德四年雜載

庭童子丸

賀陽庭童子丸參拾

正丁

賀陽犬虫丸肆拾

正丁

賀陽真連年參拾壹

正丁

孚太丸

丹治部孚太丸年參拾

正丁

丹治部香丸年貳拾

中男

忍海真則年陸拾壹

正丁

誦子丸

忍海誦子丸年貳拾壹

中男

笠小太郎丸年參拾壹

正丁

笠多師丸年貳拾壹

正丁

監僧丸

忍坂監僧丸年貳拾壹

正丁

忍坂三平丸年貳拾壹

中男

賀陽真依年參拾伍

正丁

忍坂今丸年拾捌

中男

大市今童丸年拾捌

中男

伍戶主額田部常繼長德四年

戶主額田部常繼

縦〇二八二

Handwritten text on a slip of paper pasted onto the left page, containing names and dates in cursive script.

籍後除

籍後附

今年合定

口

口

戶主額田部常繼季漆拾歲

額田部成貞漆拾

額田部分得丸貳拾壹

額田部帶丸季參拾壹

額田部家智年參拾壹

額田部秋見年漆拾

額田部綿繼季貳拾伍

鳥井直正季陸拾壹

鳥井乙足丸季貳拾伍

鳥井小犬丸季貳拾壹

死亡

不課

課

老丁

老丁

正丁

正丁

正丁

老丁

正丁

正丁

正丁

正丁

分得丸

乙足丸

長德四年雜載

戸主忍海
安興

額田部三郎丸季貳拾壹

正丁

額田部小童子丸貳拾壹

正丁

鳥井三郎丸季貳拾

正丁

陸戸主忍海安興長徳四年

籍後除

死亡

籍後附

今季合定

口

不課
闕ク以下

○以下長徳四年ノモノナリヤ否ヤ、詳ナラザレドモ前掲文書ニ連續
セルヲ以テ姑ク左ニ合敘ス、

女凡如女年伍拾伍歲

丁

女凡米女年參拾伍歲

丁

女凡町女年參拾貳

丁

女凡分女年拾伍歲

丁

戸主持常

戸主持常戸

丁

帳後破除

帳後破除

口

死亡

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

口

遺

都合

即持恆年伍拾伍歲

正丁

口物部安常年漆拾歲

耆

口同本平年陸拾歲

老丁

隱首

括出

生益

割來

隱目

括出

黃男

子

生益

割來

割往

口

口

口

口

口

口

口

口

口

都合

即祖永年玖拾玖歲

口佐以秋吉年漆拾貳

口佐以米丸年拾玖歲

口同衣丸年玖拾貳歲

死亡

割往

逃

遺

割

生益

小子

黃男

括出

隱首

者

者

申男

者

布御乙女

女布御乙女年玖拾參歲

女佐以昨女年伍拾伍

女佐以用女年參拾參

女佐以好女年伍拾參歲

女佐以衣女年參拾伍歲

女布御衣女年伍拾伍歲

女服衣女年伍拾伍歲

即豐主年伍拾漆歲

口秦秋吉^(年九)玖拾玖歲

口秦貞吉年漆拾玖歲

口葛木岑丸年漆拾歲

口秦秋女年拾伍歲

女秦冬女年參拾伍

女秦分女年伍拾貳

女秦吉女年參拾歲

者女

丁

丁

丁

丁

丁

正丁

者

者

者

小女

丁

丁

丁

戶主佐伯
富繼

止、女

戶主佐伯富繼戶

女凡衣女年伍拾伍歲 丁
 女凡虫女年參拾歲 丁
 女凡冬女年玖拾玖歲 着
 女凡分女年伍拾歲 丁
 女凡町女年伍拾伍 丁
 女凡小女年參拾歲 丁
 女凡止、女年伍拾貳 丁
 女凡肩女年參拾歲 丁
 女凡松女年參拾歲 丁
 女凡分女年拾伍歲 丁
 女小女 小女
 口 帳後破除
 口 死亡
 口 割往
 口 逃口

東大寺領
諸莊注文

莊園

〔東大寺要錄〕

長德四年雜載

封戶水田章八

諸國諸庄田地

長德四年注文定、

都合

口 遺
 口 割來
 口 生益
 口 小子
 口 黃男
 口 括出
 口 隱首
 即富繼年漆拾伍歲 着
 口佐伯子丸年參拾漆歲 正丁
 口左豐丸年漆拾貳 着
 口伴有成年拾漆歲 中男
 女伴有女年伍拾貳 丁
 〇以下

新開田及
治開田
藥園宮内
田

長德四年雜載

新開發田并治開田

藥園宮内田地十三町四段九十五步 在大和國添下郡

田十町三段九十步

畠三町二百五十六步

凡上田九町五段百廿步

春日庄田二町三段百八十步

尾張國庄田五百八十三町二段百步

陵田治開田三町四段 右平城京左一條二坊佐保里

新發田

西蘭田一町五段

佐保院田四町三段六十步

水成瀬庄田八町七段七十八步 在攝津國嶋上郡

平城田村地二町四段二百四十八步

四條二坊十二坪一町二段百廿四步

五條二坊九坪一町二段百廿四步

大和

同京四條五坊墳穴田一町二段百廿四步

同京八條市庄田一町二段百廿四步

大和國添上郡春日庄田六町二段六十四步

神分田百廿步

同郡櫟本庄田卅町三段八十步

常荒河成四町六段七十二步

山邊郡長屋庄田地三町田二町八段 畠八段

城上郡杜屋庄田五町九段百步

高市郡飛驒庄地三町九段九十步

添下郡清澄庄田廿七町二段

十市郡十市庄田地二町五段十步

水田一町百四十五步 畠一町四段二百廿五步

宇智郡地四町

伴地四町爲□本師料、不收其地子、

攝津國

長德四年雜載

西成郡安曇江庄地六段

河邊郡猪名田八十五町一段三百四十三步

或日記云猪名庄野地百町濱二百五十町云々

山城國

相樂郡出水庄六段

同郡甕原藪地三町四段

綴喜郡玉井庄本地卅六町但六町法花寺被取云々

伊賀國

阿拜郡柏野庄田廿町八段十九步

常荒河成收合十六町七段三百十三步

笠間庄四十二町二百步

薦生庄合四町二百八十步

伊勢國

三重郡田地四百卅町

尾張

尾張國

海部郡十町 中島郡二百九十六町三段

春日部郡五十町 愛智郡七十町

葉栗郡卅六町七段 山田郡卅六町

丹羽郡百八十町八段

近江

近江國

愛智郡大國庄七町一段二百廿步

犬上郡霸流庄田百十三町七段四十六步

神崎郡因芳庄田百廿一町廿六步

坂田郡庄田七十六町二段

同郡杉市庄田四町九段百六步

美濃

美濃國

安八郡大井庄田五十町

私勘二大井庄東西廿四町 南北廿四町 合五百七十六町

越前國 七百卅町八段六十七步

長德四年雜載

丹生郡檜原庄田五十町

足羽郡道守庄田三百廿六町二段五步

同郡鉦庄田百町九段二百八十八步

同郡糞置庄田十五町八段二百六十步

坂井郡富大庄田卅七町七段四十步

同郡國富小庄田卅七町一段百八十步

同郡鯖田庄十七町四段二百九十步

同郡小椿庄田四十七町四段四十步

同郡溝江庄田百町

右件庄々田地以荒廢地子不登

加賀國

幡生庄田二百五十町

越中國

礪波郡埴城庄田百町

同郡石栗庄田百廿町

越後

越後國

同郡榎田庄卅八段百九十二步

同郡廢田卅一町一段卅四步

新河郡大苧庄田百五十町

同郡大部庄田九十町八段百十六步

頸城郡石井庄田六十五町一段七十三步

同郡真沼庄田廿六町八段八十一步

同郡吉田庄田十一町九段百八十步

丹波國

多紀郡後河庄田廿八町三段二百五十六步

氷上郡布佐比庄

播磨國

多河郡栗生庄田廿九町七段百四十四步

因幡國

高庭庄田十二町一段百八十六步

因幡

播磨

丹波

周防

周防國

吉敷郡樫野庄田九十一町六段六十九步

阿波

阿波國

名東郡新嶋庄田地八十四町七段七十五步

水田一町五段百五十步

陸地八十三町二段廿五步

伊豫

伊豫國

新居郡庄田地九十六町六段百步

水田三町六段百步

陸地九十三町

鹽山五百六十町

三百六十町 在播磨國明石郡築水鄉(垂方下向)

二百町 在紀伊國海部郡加太村

雜格中卷云、

太政官符 播磨國守正五位下多治比真人國人等

別功德分莊

紀伊

紀伊國

那賀名草兩郡十二町九段廿步 二月十六日最勝王經料、

那賀郡三毛庄田七町八段二百十六步

常荒河成四町二百十六步

同郡名陵村田三町七段八十步 內豎讀經料、

同郡土崎村田十二町九段十四步

伊賀國

阿拜郡柏野庄田廿町八段八十九步

近江國

長德四年雜載

明石郡築水鄉鹽山地三百六十町 東寒河、西築水河、南海邊路、北太山堺、
右奉十一月廿日勅旨、伴地入東大寺者、國宜承知、准勅施行、以狀下符到奉行、

從五位下守右少辨縣犬養古萬侶 左少史正六位上十二等文忌寸上萬侶

天平廿年十一月廿三日

別功德分莊

越中

坂田郡息長庄田十九町二段三百廿步
同郡田七町五段百五十步 六月十七日靈山悔過料、
犬上郡水^(谷方)□庄田七町八段二百五十三步 十一月十四日千燈會料、

美濃

礪波郡井山庄田四十町
美濃國

加賀

厚見庄田二百七十七町三百步已河成荒廢
今號茜部庄
加賀國

大和

橫江庄田百八十六町六段二百步
大和國

越前

添上郡滿登庄田地十五町三百十九步 五月二日御齋會料、
水田八町^(陸)□地七町三百十九步
山邊郡長屋庄田八町 七月十九日梵網會料、
越前國
坂井郡田宮庄田五十三町七段三百廿六步 五月三日悔過料、

越後

越後國

古志郡土井庄田二百町卅步 十月十九日悔過料、

播磨

播磨國

印南郡水田廿四町七段四十二步 丙豎悔過料
右諸國庄家田地目錄如件、

長保元年己亥

正月大乙卯朔盡

一日乙卯節會

〔日本紀略〕一條

院

正月一日、乙卯、節會、天皇出御南殿、

〔慈眼院關白白馬節會次第〕雜例

雜例

國栖不參例、長德五元日、

五日己未、敍位、

〔日本紀略〕一條

院

正月五日、己未、敍位議、

〔敍位除目執筆抄〕

長保元年正月六日、敍位、執筆、左大臣歟

七日辛酉、白馬節會、內大臣公季ヲ從二位ニ敍ス、

〔日本紀略〕一條

院

正月七日、辛酉、節會、

〔三節會次第〕

白馬節會次第

未著陣人次內辨事、又未著陣人著外辨、先例也

長保元正七、小右、加階上達部歸參、左府兼誠云、今日上達部數少、可歸參者、左府於軒廊相遇云、心神極惱、可退出、節會事可行者、加級之後、撰宜日可著陣、然而被命難背、又今日吉日、仍諾了、此間親族拜也、此間予在左仗、不列女樂拜、召宣命見參目六等、

長保元年正月一日、五日、七日

紫宸殿出御

國栖不參

敍位ノ議

執筆

長保元年正月七日

三六四

〔江次第鈔〕

一 内辨細記

召外記被仰以白紙可令讀之由

長保元年正月七日小右記云予敍正三位滿正敍正五位下頭辨傳仰左大臣即召内記則仰兩人位記事只今非可令請印爲之如何上達部相議曰奏事由以白紙可令讀其由可令仰知式部輔臨時曲宴有如此例子云被書加下名可宜歟左府承諾兩事以頭辨令奏下給下名以藤相公令書入予滿正等以白紙可令讀之由以外記令傳仰式部輔

下名

白紙ノ位
記ヲ讀ム

〔公卿補任〕

六

内大臣正三位藤公季四十左大將正月七從二位大臣勞

中納言從三位藤實資 太皇太后宮、大夫正月七正三位中納言勞超時光

○大鏡裏
書同シ

參議正四位下藤公任 皇后宮權大夫右衛門督使別當備前權守勘長官

正月七從三位十六人中古歌仙三

〔公卿補任〕

六 長保四年

非參議從三位藤兼隆 長保元正七從四下少將昇

殿如元

〔公卿補任〕

七 長和二年

參議正四位下藤公信 長保元正七從五上一品親

繪王

〔公卿補任〕

七 長元二年

參議正四位下藤重尹 長保元年正月日任侍從

〔職事補任〕

一 五位藏人

右少辨從五位下藤爲任 長德五正七從四位下侍從右中辨正五位下

少納言從五位上源道方 同日補

右中辨正五位下藤說孝 同長德五正七從四位下左中辨

左近少將 藤重家 長保元正十補

〔外記補任〕

二

大外記能登守成 正月七日敍外從五位下

〔清少納言枕草子〕

○宮内省圖書寮所藏 物のあはれしらせかほなる物

傍註

略ス、本文

七日中納言實資卿敍正三位拜賀參式御曹司已無人令啓直罷出外人猶

存御式御曹司之故歟

傍註

はるかなるもの 略ス、本文

〔源方弘〕

五年正月敍

〔朝野群載〕

祭三 文筆下

熱田宮祈請男舉周明春侍中所望狀

長保元年正月七日

三六五

大江匡衡
熱田宮
神子
熱田宮
周子

ノ藏人ニ
任ゼラレ
ンコトヲ
祈ル

長保元年正月七日

三六六

右匡衡賜鶴板於顔巷、促熊軾於尾州、昔泥雪窓之幽明、今仰熱田之冥助、去年神拜之次、依代々之例、已奉臨時祭、近日京上以前致懇々誠、又奉臨時祭、是則中心有所願、秀才藏人之濫觴、起自江家、始自延喜、々々則曾祖父伊豫權守千古朝臣爲侍讀之間、男秀才維時爲藏人、天曆卽祖父中納言維時卿爲侍讀之間、男秀才齊光爲藏人、圓融御宇、叔父左大辨齊光爲侍讀之間、男秀才定基爲藏人、今當時匡衡爲侍讀之間、男舉周爲秀才、四代相傳家風不衰、天之福江家不亦悅乎、又維時卿辭式部大輔、以男秀才齊光任式部丞、齊光預榮爵之日、維時還任式部權大輔、爰舉周明春受可任式部丞之運、依有父子同官忌、明春可辭所帶式部權大輔爲維祖父之風跡、欲舉愛子於天官、幸蒙神恩、事適成就者、明年之內、令舉周奉臨時祭、又如風聞者、近日自東自西萬民子來云々、是尤神恩之深也、明年農業豐饒、作田及四五千町、蠶養如意、細絹及一二萬匹、兼無旱魃洪水、飢饉疾癘、失火盜賊、口舌訴訟之難者、所奉書大般若、擇龍象之輩、法橋靜照（龜）爲講師、解說佛母之奧理、續展風月之筵、翰林以言爲序者、讚揚神明之深德、然則瑩鷺池如意之珠、代孟嘗合浦之珠、織風花文章之錦、爲買臣會稽之錦、匡衡始祖左衛門督音人卿、在昔淪落當州、勤奉神宮、今匡衡不慮爲刺史、亦舉

參拜者東
西ヨリ子
來ス

周相從到此、可謂江家之儒者有緣於尾張國、在契於熱田宮、中丹所思、此而不祈者、又可祈何處乎、念々不疑、一々相答、匡衡自手讚祭文、俯地恐々拜白、長德四年十二月九日

八日、壬戌御齋會、後七日御修法、

〔日本紀略〕院一條 正月八日、壬戌、御齋會始、

御齋會竟
ル

十四日、戊辰御齋會竟、

〔東寺長者補任〕一 長者權少僧都雅慶、法務後七日法行之、

〔東寶記〕法寶上 服暇人灌頂會大阿闍梨勤否事、付後七日法務

長德四年六月十二日、寬朝大僧正入滅、灌頂弟子雅慶僧都、于時一翌年長保元年正月、真言院御修法勤仕之了、○釋家初例抄、三僧記類聚、諸例並諸作法故實雜記、東寺長者雜自記同シ、

十三日、卯長保ト改元シ、大赦ヲ行フ、

〔日本紀略〕院一條 正月十三日、丁卯、詔、改長德五年爲長保元年、大赦天下、大

辟以下咸赦除、常赦所不免者不赦、依天變炎旱災也、權少外記慶滋爲政作詔書、

天變炎旱
ニ依ル

長保元年正月八日 十三日

三六七

長保元年正月十三日

三六八

〔改元部類記〕

○自承平至嘉保

權

長德五年正月十三日丁卯自左府有召即

參門外被示曰改元事今月可行之由舊年所承也此事雖非必可擇最吉猶可

避惡日也今日并來月廿二日之外忽可無吉日而今日延引若及來月可無便

宜今日依有所慎不能申行早奏案內召仰他上卿可行此事則參入奏事由仰

云早可召遣左大臣左大臣被參殿上即奏其由仰云改元詔可令候可用匡衡

朝臣所擇申長保之字又可赦大辟以下也常赦所不免者不免次大臣著出陣

有申文頃之大臣召余仰云大內記齊名無召之前罷登山寺云爲之如何申云

匡衡朝臣候殿上外記爲政付腋陣左大辨雖上達部依爲儒者可草詔非無先

例今所祇候有兩三人以大內記不參不可空過吉日大臣即召爲政被仰子刻

草成奏之仰云依草次奏清書次給中務少輔孝明事了退出

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲百二十五改元勘文部類一 改元事

長德五年正月十三日改元長保依災異水旱也

勘申 年號事 延世

大江匡衡撰進ノ字ヲ用フ

申文

菅原輔正ノ年號勘文

尙書曰罰弗及嗣賞延千世注云延及也父子及其賞道德之故也

咸寧

尙書曰賜天遺賢萬邦咸寧注云賢才在德天下安也周易曰乾道各正性

命首出庶物萬國咸寧注云國所以寧者以有君也

恆久

周易曰天地之道恒久而不已利有所往得其道也

休和

左傳曰一人利善百姓休和

右依宣旨勘申如件

長德四年二月廿日

參議從三位行式部大輔兼大和權守菅原朝臣輔正

此外猶有勘文等歟匡衡勘進云々

權記正月十三日丁卯奏右大臣參入之由仰云改元詔可令作可用匡衡朝

臣所擇申長保字

〔元祕別錄〕

一 勘文部

元祕抄第五

進年號勘文人數多少例弘仁十五年已後

長德四年又不見

長保元年正月十三日

三六九

赤斑瘡ノ
疫ニ依ル

保ノ字濁
リテ讀ム

長保元年正月十六日 十七日 十九日

三七〇

〔扶桑略記〕

一 二七 長保元
長德五年正月十三日、改爲長保元年、依赤斑瘡疫也、

〔實隆公記〕

六 三十 永正三年十一月二日、丁丑、朝間雨濺、天陰、覺城法師來、
略 雜談云、○ 中長保、○ 中何モ下ノ字、濁事に傳之由、同稱之、勿論也、

〔中家實錄〕

二 年號之名義

長保 長坊、保之
字 吳音、

○ 掌中歷、行類抄、歷代編年集成、皇年代略記、皇代記、元亨釋書等、異事ナ
キヲ以テ略ス、大江匡衡ヲシテ、年號ヲ撰進セシムルコト、長德三年二
月十四日ノ條ニ、年號勘文ヲ定ムルコト、同四年六月十四日ノ條ニ見
ユ、

十六日、庚午、踏歌節會、

〔日本紀略〕

院 一條 正月十六日、庚午、女踏歌、

女踏歌

十七日、辛未、射禮、

〔日本紀略〕

院 一條 正月十七日、辛未、射禮、

十九日、癸酉、左大臣道長、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕

院 一條 正月十九日、癸酉、左大臣家大饗、(公季)內大臣以下行向、

公季等行
向フ

〔台記〕

十 仁平二年正月廿六日、壬戌、天晴風和、今日於東三條、再行大饗、
略、仍勸先例、長保元年、左大臣御堂立南階、東頭
拜了、渡立西頭、(藤原)成巳同攝政關白儀、○ 下略

二十五日、己卯、內大臣公季、大饗ヲ行フ、

〔日本紀略〕

院 一條 正月廿五日、己卯、(公季)內大臣家大饗、大納言以下行向、

〔台記〕

十 仁平二年正月廿六日、壬戌、天晴風和、今日於東三條、再行大饗、
略、長保元年、內大臣大饗、右少辨(藤原)道方遲參、使爲(宗臣)成朝臣、觸非
參議大辨、行成、而朝隆朝臣未參、仍觸四位少納言歟、○ 下略

二十七日、辛巳、大膳進藤原仲遠、白雉ヲ獻ズ、尋テ、之ヲ放タシム、

〔日本紀略〕

院 一條 正月廿七日、辛巳、(仲遠)東三條院侍大膳進藤原仲遠、獻白雉、

三月八日、辛酉、(仲遠)此日大膳進藤原□□去正月廿七日所獻白雉、被放之由
云々、

東三條院
侍

三十日、甲申、縣召除目、

〔公卿補任〕

六 中納言從三位平惟仲 正月卅日中宮大夫、

參 議 藤懷平 正月卅日播磨權守、

〔公卿補任〕

六 長保三年 參議正四位下藤行成、(三十)長保元正廿九(卅)備後守、
辨

長保元年正月二十五日 二十七日 三十日

三七一

長保元年正月三十日

三七二

官補任
同シ

〔公卿補任〕

寬弘五年

參議正四位下藤實成三、長保元正冊美作權守

〔公卿補任〕

寬弘六年

參議正四位下源賴定三、長保元正冊備前守

〔公卿補任〕

寬仁四年

參議正四位上藤廣業四、同五長保元正冊式部少丞

〔柳原家記錄〕

辨官補任一

左少辨從五位上藤朝經

正月卅日轉〇公卿補任同シ

右少辨

源致書 正月卅日任、左少辨國光朝臣男

〔日本紀略〕

院一條

正月廿八日、壬午、除目始

卅日、甲申、入眼

〔本朝世紀〕

三月八日、辛酉〇中、移著左仗座、午後參議菅原輔正卿參著同座

陣有覽內印事、政了、上卿以下退出了、

廿八日、辛巳、午後天陰、少雨降、大納言源時中卿參議藤原忠輔朝臣參著左仗

座、被行受領任符請印事了退出、

○多米國定以下補任ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔敘位除目執筆抄〕

長保元年正月廿八日縣召卅日、入眼、執筆道長、左大臣、

執筆道長、左大臣、

除目始

入眼

内印ヲ覽ル

受領任符請印

執筆

〔外記補任〕

正二曆五年

大外記多米國定 長保元年正月任安木守

〔外記補任〕

二

大外 記宗岳爲成 正月轉任、

權少外記清科保重 正月任、元主殿允、獻者、

〔柳原家記錄〕

辨官補任一

右中辨正五位下藤爲任 月日任歟、

〔魚魯愚抄〕

受領舉事

尻付例

紀伊守景理二ケ年、延任、

長保元正、執筆道長、御堂、

〔魚魯愚抄〕

兼國勸文

文章博士重兼國例

藤原弘道 秩滿後三年

長保元年正月任文章博士〇下、

左右衛門佐兼國例

令宗允亮 歷七年〇中、

長保元年正月兼備中權介、

兼國自解

從五位下行造酒正源朝臣重誠惶誠恐謹言、

長保元年正月三十日

三七三

藤原弘道
文章博士
ト爲ル

長保元年正月三十日

請殊蒙天恩准先例被兼任備中前備後等國權介闕狀、
諸司長官兼國例略○中

藤原遠理○中同五年二月兼尾張權介歷一年○中

治安二年正月廿二日

從五位下造酒正源朝臣賴重

〔魚魯愚別錄〕

任院宮已下諸當年給事

內給在此內

執筆自給尻付事

道長臨時給長保元年

〔除目大成抄〕

諸寺申外國二名替

長保元

出雲介正六位上各務宿禰棟雄長停

〔除目大成抄〕

當年給外國一名替

任介例

長保元上野權介一人、
掾一人、目二人、

〔除目大成抄〕

名替春外國二

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

停朱雀院天元四年
御給國義長改任

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

稱御給例

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

已上皆名替等也於未給者不稱內給無任人故歟

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

故者春外國二

不加前字例

長保元春、
所、

冷泉院御給

〔除目大成抄〕

五重春外國二

長保元

美濃介從五位上十市宿禰明理冷停

〔除目大成抄〕

泉院天曆六年臨時御給
下野權介忍海高晴改任

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

天曆六年以小槻滋兼任下野權介長德二秋以大春日遠晴改任同三

秋日下部惟遠改同四春以高晴改

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

臨時給春外國一名替

雖五位依為人給有尻付例

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

長保元尾張介長名是真御停冷泉院安和二年臨時

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

冷泉院長德三年御給

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

未給春外國一名替

長德五

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

行、中宮長保二年給

有官親王不書官例

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

故者春外國二

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

利親王永親王略

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

已上無注前字之例必加故字為不混前官也

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

親王春外國一名替

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

宿禰能長為平式部卿親王當

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

〔除目大成抄〕

長保元年正月三十日

長保元

出雲權掾正六位上藤原朝臣有忠

為平式部卿親王當
年別御給

中宮定子
御給

長保元年正月三十日

三七六

一品資子
內親王當
年御給

〔除目大成抄〕

當年給外國一准后

雖非當代親王一品不書名例

長保元年

同(資子內親王當年給)

〔除目大成抄〕

臨時給外國一納言

雖五位依爲人給有尻付例

長保元

美乃大掾宮道正盛

(資子) 一品內親王當年給

〔除目大成抄〕

轉任以外國二以目替掾二合

長保元春

備中權掾正六位上藤原

朝臣善理

停故太政大臣坂上岡真二合所任

轉任二合尻付事

今案

故太政大臣天元三年給以件善理任權大目而二合所任

同人轉同國掾之時如此可有歟

若轉他國掾者可注本國名其目也

今案

其人其年給以件某任大目而去年依獻五節舞姬二合所任依五節轉任

之時如此可有歟

〔除目大成抄〕

公卿春外國一當年給

長保元

攝津權少目正六位上島

田朝臣種忠

左大臣當年給

正六位上島田朝臣種忠

左大臣道
長當年給

內大臣公
季給

望山城、美濃等國目、攝津權少目、

右當年給以件種忠所請如件、

長保元年正月二十八日

左大臣正二位藤原朝臣道一

〔除目大成抄〕

二重春外國二

長保元

土佐掾正六位上民連吉景

元年給二合大石福光改任

可勘合不、件大臣長德元年給二合、同三年正月

正六位上民連吉景

望土佐掾、

右去長德元年給二合同三年正月以大石福光申任件國掾而福光依煩身

病不給任符仍以吉景可被改任之狀所請如件、

長保元年正月廿八日 內大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣作名

長保元

外美濃權介秦輔光

臨時大臣

〔除目大成抄〕

二合春外國二合

當年給

長保元

讚岐掾正六位上秦忌寸

邦成、內大臣當年給依

〔除目大成抄〕

二秩滿春外國二

長保元

讚岐大目正六位上佐伯宿禰扶尙

長保元年正月三十日

三七七

五節二合

長保元年正月三十日

三七八

元停大納言源朝臣長德
年給禰宜利遠改任

可勘合不、件遠任讚岐權大目、而任符未出、禰宜

正六位上佐伯宿禰扶尙

望讚岐權大目、

右長德元年給、同年正月除目以禰宜利遠申任讚岐權大目、而稱有身病、不給籤符、從以秩滿、因茲以件扶尙、可被任件國之狀、所請如件、

長保元年正月廿五日 大納言正三位兼行陸奥出羽按察使源朝臣作名

〔除目大成抄〕二重 春外國二 長保元 近江大目正六位上大江宿禰高扶

停民部卿藤原朝臣長德二年給日任吉明改任、

長德二年春當年給、以刑部信正任之、同四年春以吉明改任、

〔除目大成抄〕公卿 春外國一 當年給 同官同姓人尻付事、各注名、片字名

者不論上下字、以不混字書之、上字同者兩人共書下字、無書兼國之例、

長保元 大和權大目從七位上清原真人清方

右衛門督藤原朝臣當年給、

從七位上清原真人清方

望大和、攝津等國大目闕、

右衛門督藤原公任當年給

右當年給二分、以件清方所請如件、

長保元年正月廿七日

參議從二位行皇后宮大夫兼勘解由長官右衛門督備前權守藤原朝臣公任

不書官例

長保元 齊信朝臣 俊賢朝臣

〔除目大成抄〕二故者 春外國二 不書官例官名共書流

長保元春、故延光卿、故朝光卿、

〔除目大成抄〕三春外國三 三人例

〔除目大成抄〕四所籍外國三 內豎、前春宮坊籍、

長保元 內豎頭 內豎、前春宮坊籍

長保元 校書殿承平籍 校書殿安和籍

長保元 大舍人前春宮籍 大舍人本籍

長保元 大舍人前春宮籍 但秋任之、

〔除目大成抄〕三春外國三 二人例

長保元 進物所執事 進物所膳部

長保元年正月三十日

三七九

校書殿

大舍人

進物所

長保元年正月三十日

三八〇

〔除目大成抄〕

請四 春外國四

長保元 飛驒權掾正六位上粟田朝臣興國

〔除目大成抄〕

受領五 春外國五

公卿任受領例

〔除目大成抄〕

請六 春京官一

依有本官無尻付例

〔除目大成抄〕

長保元 中宮大屬麻田眞明兼

依有本官無尻付例

〔除目大成抄〕

三七 春京官二

依有本官無尻付例

〔除目大成抄〕

長保元 刑部少錄正六位上佐伯宿禰爲珍太政官抄

依有本官無尻付例

〔除目大成抄〕

同 大舍人少屬正六位上勝宿禰有統左史抄

依有本官無尻付例

〔除目大成抄〕

同 宮内少錄正六位上酒部員眞信右抄府

依有本官無尻付例

〔除目大成抄〕

諸道舉 七 春京官一度二人任例

長保元 明法、道舉例

〔除目大成抄〕

長保元 春木工算師

長保元 雅樂屬木算師

〔除目大成抄〕

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

〔除目大成抄〕

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

〔除目大成抄〕

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

〔除目大成抄〕

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

〔除目大成抄〕

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

本七 春京官二

本七 春京官二

長保元 雅樂屬木算師

後院預

〔清少納言枕草子〕

〇下 宮内省圖書寮所藏

たのもしき物

略

〔除目大成抄〕

名二 春外國二

攝津權少掾正六位上守部連忠兼、御義女

〔除目大成抄〕

子長保元年給二合任、淡路權掾三宅文頼改任、

女御給年々

〔除目大成抄〕

元子 長保元、掾

女御給年々

〔除目大成抄〕

名二 春外國二

長保元 上總權大掾正六位上刑部宿禰

〔除目大成抄〕

賴孝、停侍藤原傳説、改任、女御一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

〔除目大成抄〕

當一年 春外國一侍

尚侍給年々

長保元年正月三十日

三八一

本司奏

諸道舉

三局史生

源成信ニ
禁色ヲ聽
ス
女御義子
給

女御元子
給

尚侍綾子
給

〔除目大成抄〕

課八 試及第京官三

獻策者直任式部丞例

〔除目大成抄〕

同 廣業、長德四年正月任之、〇上册、下略

〔除目大成抄〕

長保元、式部丞藤原廣業

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元 木工少允正六位上藤原朝臣爲職

〔除目大成抄〕

後八 院 春京官三

長保元年正月三十日

尙侍 妮子

妮子 長保元、日

〔類聚符宣抄〕

七補 史生使部事

補抄符廳直文殿等史生使部事、

左史生磯部爲松

參議左大辨藤原大夫宣、左抄符預史生勝有統遷任大舍人少屬之替、以伴爲

松宜補之者、

長保元年二月五日

左大史多米朝臣國平 奉

左抄符預
史生ヲ補
ス

二月 乙酉 朔

三日、丁亥、釋奠、

〔日本紀略〕

院一條

二月三日、丁亥、釋奠、

四日、戊子、祈年祭、

〔日本紀略〕

院一條

二月四日、戊子、祈年祭、

七日、辛卯、大原野祭、

〔日本紀略〕

院一條

二月七日、辛卯、大原野祭、

〔本朝世紀〕 二月七日、辛卯、今日大原野祭也、

八日、壬辰、武藏立野、秩父等ノ御牧、御馬ヲ貢ス、

〔本朝世紀〕

二月八日、壬辰、是日甲斐國貢上立野、秩父御牧御馬、被仍大納言

藤原道綱卿參議同齊信朝臣、著左仗座、是行入道退出、

藤原道綱卿參議同齊信朝臣、著左仗座、是行入道退出、

九日、癸巳、外記政、

〔本朝世紀〕

二月九日、癸巳、中納言平惟仲卿參議藤原忠輔朝臣著廳座聽政

畢、南所移著事訖後著左仗座、

○六日及七十一日以後、外記政ノコト、便宜左ニ合敘ス、

長保元年二月三日 四日 七日 八日 九日

道綱等左
仗座ニ著
ス

〔本朝世紀〕二月六日庚寅休也、

十一日乙未、略中巳刻大納言藤原懷忠卿、中納言同時光卿、平惟仲卿、參議藤原誠信卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、著彼廳座聽政、各退出、

十二日丙申、休也、

十九日癸卯、中納言平惟仲卿、參議藤原誠信卿、同公任卿、著廳座聽政、無申文、
廿二日丙午、中納言平惟仲卿、參議藤原齊信朝臣、著廳座聽政、無申文、有內文、請印之事、午後關ク以下

廿四日戊申、休也、

廿七日辛亥、參議左大辨藤原忠輔朝臣、著結政座、然而上卿遲參、仍無政、略中
午後右大臣顯光參議藤原公任卿、著左仗座、酉刻退出、

廿九日癸丑、休也、

三月六日己未、休也、

七日庚申、參議左大辨藤原忠輔卿、兼殿結政所座、然而著座上卿不參、仍無尋常政、
八日辛酉、略中中納言藤原時光卿、著左衛門陣座、參議不參、仍無政、
十二日乙丑、休也、

政ナシ

申文ナシ
内文請印

十六日己巳、略東三條院ニ行幸アル仍無尋常政、
十八日辛未、休也、

廿日癸酉、略臨時仁王會仍無尋常政、

廿二日乙亥、天晴、是日上卿遲參、仍無政、午後參議藤原誠信卿、同公任卿、源俊賢朝臣、參入、著左仗座、酉刻各退出、

廿三日丙子、天晴、正卿遲參、仍無政、

廿四日丁丑、天晴、是日休也、

廿五日戊寅、天晴、上卿遲參、仍無政、午後右大臣參議藤原誠信卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、著左仗座、申刻各退出、

廿六日己卯、天晴、上卿遲參、仍無政、

閏三月六日己丑、休也、

十日癸巳、略中略、季御讀經仍無尋常政、

十二日乙未、休也、

十八日辛丑、休也、

廿四日丁未、今日休也、

長保元年二月九日

三八六

廿六日、乙酉、（公考）午後内大臣、中納言藤原實資卿、參議同懷平卿、同誠信卿、同齊信朝臣、源俊資朝臣著左仗座、

左大臣道長ノ女彰子著裳、尋テ、從三位ニ敍ス、

〔日本紀略〕院一條 二月九日、癸巳、左大臣女子著裳、上卿以下率外記、史參彼第、

〔御堂關白記〕一 二月九日、癸巳、比女御著裳、子時許早雨下、而即晴了、從東

三條院給裝束二具、從太皇太后宮給末額、從中宮給香壺筥一雙、從東宮給御

東河ニ出
春日
奉幣ノ神
馬ヲ立ツ

馬一疋、使者□給白重褂一重袴、申時許諸卿來間、右府、内府著給、（顯光）
十一日、乙未、右大辨爲勅使來仰云、敍從三位者、賜女裝束、即時出東河、立春日奉幣神馬等、參大内、於弓場殿奏慶賀由、

〔本朝世紀〕 二月九日、癸巳、略 此日左大臣御女始著御裳、仍上卿以下、率外記、史等、參著彼里第、午刻天陰、

〔玉藻〕 建曆元年三月四日、丙辰、天晴、閑窓燈下、聊拾小右記之處、上東門院御

行成ニ屏
風ノ色形
ヲ書セシ

著裳日儀見付之、其儀神也、妙也、爲後聊篇目記、其狀載左、一人大娘著裳儀、長保元年二月九日、早旦裝束寢殿、母屋廂調度立之、以行成卿令書屏風色形云々、申

ム
絲竹ノ興

公卿和歌
ヲ道長ニ
贈ル

刻許右大臣、内大臣已下諸卿來左府亭、其座在寢殿西、又廂及渡殿、主客居膳之後、盃酒數巡、殿上四位并勸之、有竹絲興、先大夫等置管絃、具地下樂人等應召候階下、給勸盃、次居衝重、酒盃兩巡、大納言勸之、更歌吹不止、此間供著裳前物、陪膳人經渡殿、自寢殿西面初著上達進之、次□公卿獻和歌於左大臣、大臣和之行成卿書序題、然之後有贈物、丞相各馬一疋、女裝束一襲、加褂、自餘有差、祿及雲上侍臣也、又上達部脫衣給管絃人及近衛府官人、主人脫衣被右近中將實成、未知其由、又被近衛府官人及管絃人、予依主人命、脫衣給内記信義、右衛門督公任脫衣又給、廷尉者無如此事、然而依難脫歟、内丞相同脫衣也、

〔榮華物語〕六 かゝやくふちつほ おほとのひめこきみ、十二にならせ給へは、としのうち、に御もさありて、やかてうちに參らせ給はんとおほし

そかせ給

〔中右記〕 天永三年十二月十日、癸巳、○中略、忠實ノ母金子ヲ、從一條殿年來

未有御位也、而執柄之母堂無位例不聞也、仍有議、今夜令從三位給也、但初度三位例、是上東門院例也、長保元年二月十一日、著裳之後、三箇日有饗饌之次、以藏人頭右大辨行成、初敍三位之由被仰下也、給女裝束、是今日例也、上東門院入内

長保元年二月九日

三八七

初度三位
ノ例

長保元年二月十一日 十二日 十七日

三八八

○以前也
下略

〔玉葉〕文治五年十一月十五日辛未晴終日風烈此日女子敝三位又定入內
雜事○中長保元年上東門院敝從三位之日御堂參內拜賀退出之次參東三
條院給

○一代要記女院記等異事ナキヲ以テ略ス彰子入内ノコト十一月一
日ノ條ニ見ユ

十一日未乙列見

〔日本紀略〕院一條二月十一日乙未列見

〔本朝世紀〕二月十一日乙未今日列見例日也仍少納言源伊賴朝臣權少外
記慶滋爲政令持司人御印著辨官曹座

十二日申丙春日祭

〔春日祭歷名部類〕春日祭長保元年二月十二日丙申祭

十七日辛丑園韓神祭廢務

〔日本紀略〕院一條二月十七日辛丑園韓神祭

〔本朝世紀〕二月十七日辛丑今日韓神祭也仍權大納言兼民部卿藤原懷忠

少納言以
下辨官曹
座ニ著

卿著宮内省行之諸司廢務也

二十日辰甲祈年穀奉幣

八省院行
幸

〔日本紀略〕院一條二月廿日甲辰發遣伊勢以下幣使天皇幸八省院

〔本朝世紀〕二月十九日癸卯略○中午後中納言藤原實資卿參議同齊信朝臣
著左仗座仰召大外記滋野朝臣善言仰云明日依有諸社奉幣可有八省院御
座云々早任例可仰此由諸衛者仍善言朝臣奉仰著局座召仰諸衛了又依可
有宣命之事令催召內記之處申各故障不參仍權少外記慶滋爲政令奉仕內
記代官之者令覽草

廿日甲辰今日廿餘社奉幣仍有八省院御座之事左大臣大納言藤原道綱卿
中納言同時光卿平惟仲卿參議藤原懷平卿同忠輔朝臣同齊信朝臣參內裏
儀式如恆例

宣命

天皇加詔旨止掛畏支祇蘭廣前仁恐美恐美毛申賜止申久今年春漸中仁
天農事欲始祈年穀古止是恆例事奈利故是以吉日良辰遠擇定天差使禮
代御幣遠令捧持天奉出賜布束作之日興利秋後之時仁至爾末天雨澤隨時水
早不至之天五穀豐饒爾萬民樂爾惠幸賜天又天皇朝廷遠寶位無動久常

長保元年二月二十日

三八九

天變怪異
妖言疾疫
=依ル

道長夢想
不參
=依リテ

京中ノ貴
賤見物ス

木津ニ宿
ル

佐保殿ニ
著ス
神樂

競馬
權別當明
久ヲ權律
師ニ任ズ

京ニ還ル

長保元年二月二十七日

三九〇

磐堅磐爾夜守日守爾護幸賜邊□助給邊止恐美恐美毛申賜止者久申
辭別仁申賜波久近日天變怪異屢見妖言疾疫間聞如此支不祥遠早仁可攘
却毛止就中天疫癘之災波連年不止之天去年末天有其憂リ最所畏念奈利
皇太神此狀遠平久聞食天天下無事海內平安爾守幸賜倍止申

長保元年二月廿日

〔御堂關白記〕

一 二月廿日甲辰天晴有諸社奉幣事而依夢想不□不參

二十七日亥辛左大臣道長春日社ニ詣ツ

〔日本紀略〕

一條 二月廿七日辛亥左大臣參春日社

〔本朝世紀〕

二月廿七日辛亥略中以今日辰刻左大臣參春日社京中上下人

人見物以明日奉幣竝東遊競馬云々

〔御堂關白記〕

一 二月廿日甲辰天晴略中此日土御門新馬初馳馬上達部

多來是依參春日競馬事也

廿五日己酉天晴競馬裝束新調令著乘尻等馳馬次競馬上達部多來

廿六日庚戌競馬乘尻馬前立令宿木津

廿七日辛亥卯時有雨氣是從夜部有氣也同時參日女車同道上達部民部卿

中宮大夫藤宰相右衛門督宰相中將修理大夫等舞人陪從等如常戌時許著
佐保殿沐浴此間女車等著社頭而參著通夜神樂自餘如常六位神主賜從五
位下是先日宣旨也給位袍笏等於宇治朝饗

廿八日壬子卯時許著馬場例假屋東又作假屋為女方住所自餘事如常還城
樂間從頭辨許持來書狀開見□別當明久任權律師宣旨也此由示僧正明久
立座著僧綱座次競馬次勝負樂次入夜著佐保殿

廿九日癸丑早朝立著宇治皆還祿上達部皆引出物入夜著京亥時許丑時許
許深雨下此間上達部多來問只太皇太后宮大夫一人不問來

三月二日乙卯民部卿依有病不著宇治仍以中尹送馬

〔僧綱補任〕

〇三興福寺本 權律師明久 長保元年二月廿五日任左大臣被

參詣春日社日依為寺家權別當被奏任法相宗興福寺空晴僧都入室

〔行幸并長者御下向引付〕 長者春日詣

御堂殿 長保元年二月廿五日

別○寂圓院真善 權○明久

〔台記別記〕

七 仁平三年十一月廿九日癸丑略中又春日競馬惣六度長保

長保元年二月二十七日

三九一

長保元年二月二十八日

三九二

元年、長元七年、承曆四年、寛治二年、天永二年、仁平三年、略

二十八日、壬子陣定ヲ行ヒ、仁王會及ビ春季御讀經ノコトヲ議ス、

〔本朝世紀〕二月廿八日、壬子午後右大臣、參議左大辨藤原忠輔朝臣著左仗

座、被定仁王會御讀經事、

○仁王會ヲ行フコト、三月二十日ノ條ニ、春季御讀經ヲ行フコト、閏三

月七日ノ條ニ見ユ、

三月大寅朔

三日、丙辰御燈、廢務、

〔日本紀略〕院一條三月三日、丙辰御燈、

〔本朝世紀〕三月三日、丙辰今日御燈、廢務也、

七日、庚申駿河富士山火ク、是日、神祇官及ビ陰陽寮ヲシテ、之ヲ占ハシム、

〔本朝世紀〕三月七日、庚申、中午後左大臣、公季内大臣著左仗座、召神祇官并陰

陽寮、仰云、駿河國言上解文云、日者不字御山燒由、何祟者、即卜申云、若怪所有

兵革疾疫事歟者、

兵革疾疫ノ兆

大宰府進上ノ雨米及ビ涌出油ノコトヲ奏ス、尋テ、文章博士中原致明、

同藤原弘道ヲシテ、之ヲ勘申セシム、

〔日本紀略〕院一條三月七日、庚申、大宰府進豐前國雨米一裹、又申八幡宮甕

油事、

八日、辛酉、召博士中原致明、文章博士藤原弘道、仰云、大宰府所進雨米、涌出油

勘文可進者、

〔本朝世紀〕三月七日、庚申、中午後左大臣、公季内大臣著左仗座、中此間大宰

長保元年三月三日 七日

三九三

長保元年三月七日

三九四

府貢上雨米一裹、涌出油一瓶等奏聞、即上卿覽了、下給辨官文殿已了、其解文云、

大宰府解

申請官裁事

言上異瑞□狀

□管豐前國京都郡雨米事

副進

彼國解文一枚 同國京都郡解文一枚 彌勒寺講師長祐牒狀一枚

豐前國解

雨米一裹

右得彼國去年十二月廿八日解狀、傳府政所、今月廿五日下午、同廿六日亥刻到來、傳安樂寺別當住算大法師令申云、今月上旬、豐前國郡內有雨米之瑞、是則彌勒寺講師長祐法師之所申也者、怪異之事、不辨善惡、在地官司須早言上、而不申國解廳及府衙管隸之吏、豈所爾乎、仍所仰如件、國宜下知在地、副其日記、早速言上、以其解文、將備言上者、同時牒送長祐法師、爰同廿七日返牒、今日到來、傳、今月廿六日衙牒、今日到來、抑此雨米事、以十一月廿一日、於宇原床前葛野庄、檢校俗名早部信理、法名寂性申云、京都郡高來鄉平井寺乾方居住、法

長祐返牒

宇原床前
葛野莊
京都郡高
來鄉平井
寺仁感ノ

住房ニ米
雨ル
京都郡解

初ハ小豆
ノ如シ

灰ノ如ク
消失ス

國郡郷名
祥瑞ニ合
フ

師私宅、以去九月晦夜雨米、夜中驚見、白米已多、明旦出見、頗以減少、但宅主法師他行、園守女稱申如此者、依實錄狀、牒送如件者、下知在地京都郡之處、得彼郡今日解狀、傳被今月廿八日國府、同日午時到來、傳、依府政所、今月廿五日下午、文牒送彌勒寺講師長祐之處、雨米之瑞、在京都郡者、所仰如件、郡宜承知、且以時日記言上、且可進件雨米者、今依國府旨、檢案內、以彼日夜、賀田鄉所在平井寺住僧仁感住房門前所雨白米、初如小豆、日闌之後、頗以減少、似破米、一村下人或取食、爰仁感他行之間、彼園守女奇異、僅所拾採二三合計也、仍十月十一日相分郡司良親、同時僧寂性等所、加之寺檀越、揀不知山長松令見之次、分給小々、而問公事、忽々之間、于今所念忘也、令驚國府旨、相尋其雨米之處、至于日記、彼日不立置、良親、寂性等所得米、如灰消失了、揀長松所得米、纔以是、仍副郡解進上、如件者、件雨米、揀不知山長松付封、進國守光輔、披見、更封光輔名字、付使揀、蝮部爲範進上、抑國內徵程事發之時、載郡解觸國宰、隨即言上大府、是例也、而隱私不告、國何得知、今及府仰、言上此瑞、將被免遲緩之責、國名豐前、郡號京都、鄉稱賀田、寺且平井寺、可謂祥瑞、仍相副郡解等、言上如件者、非管天地吉祥之異瑞、兼得州郡村邑之嘉名、祥瑞之事、不可不申、

長保元年三月七日

三九五

〔太宰管内志〕

肥前之二 三根郡

千栗八幡社

略○上神祇拾遺に筑前國大分宮肥

前國千栗宮、肥後國藤崎宮、薩摩國新田宮、大隅國正八幡宮、件五座在外國、不

千栗ノ訓
千栗ノ由
來

千栗八幡
宮ノ來歴

便參詣也、仍後柏原院大永年中、奉移山城國小山庄、なと見えたり、大永の比に移し玉
へる社は、京都極の北田野の中にあり、天正六年、筑紫、次、千栗は知久利と
鎮恒か書ける神文に、當國鎮守千栗八幡大菩薩とあり、訓へし、和名鈔に、三根郡名義は千栗宮、社記に、元正天皇の御時、肥前國養父
郡司壬生春成か夢に、神告云、一夜の内にして、栗千本生出たらむ所に、我宮
造るへしと告給へりしに、やかて神告の如くなりしかは、其栗の生たりし
處を千栗と號くとあり、さて和漢三才圖會に、肥前國千栗神社在千栗、自筑後久
留米一里、其、孝徳、天皇、天平年中、鎮座、與筑前箱崎同、八幡本紀に、千栗宮は、肥
間有筑後川、前國神崎郡千栗山にありなと見えたり、

所充、

〔御堂關白記〕

三月七日、庚申、參内、申所充文、

〔本朝世紀〕

二月十三日、丁酉、今日所充例日也、而相當春日祭、參候彼社頭、權
少外記清科保重、應直史生漢部遠榮上日、此日件所充延引、

九日、戊、壬陣定ヲ行ヒ、春季御讀經ノコト、大宰府及ビ諸國申請ノコト等

例日春日
祭ニ相當
スルニ依
リ延引

ヲ議ス、

〔御堂關白記〕

三月九日、壬戌、著左文座、定御讀經事、并大宰諸國申請事、
候宿所○中御讀經來月七日、

〔本朝世紀〕

三月九日、壬戌、午後、(道長)左大臣、(顯光)右大臣、大納言源時中卿、藤原道綱卿、
中納言□時光卿、平惟仲卿、參議藤原公任卿、源俊賢朝臣、著左仗座、

十日、亥、癸東三條院御惱、

〔御堂關白記〕

三月十日、癸亥、從內參院、(參子)午上雨降、院御惱尙有氣、退出、
十六日、巳、己東三條院ニ行幸アラセラル、是日、(道長)左大臣道長ニ隨身兵仗ヲ賜

道長參院
ス

〔日本紀略〕

三月十六日、己巳、行幸東三條院、(參子)勅賜左大臣隨身如故、
〔本朝世紀〕三月十六日、己巳、是日有行幸東三條院、(公孝)○中巳一刻、左大臣、(公孝)内大

公卿參内

臣、大納言源時中卿、藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、中納言同實資卿、平惟仲
卿、參議菅原輔正卿、藤原誠信卿、同公任卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、源俊賢朝
臣、參入内裏、于時大外記滋野朝臣善言、宗岳爲成、少外記菅野重忠、權少外記
慶滋爲政、清科保重、左大史多米國平、小槻宿禰奉親、右大史文守永、美麻那延

長保元年三月十六日

四〇〇

政、左少史和氣元倫、惟宗貴重等、率官掌、著左近陣、腋行事、此間供奉諸司、并諸衛儀式如常、但監物、鎰申故障不參、仍以內豎安倍吉春、用鎰代、留守參議菅原輔正卿、權少外記清科保重、右少史卜部爲親等、巳二點南殿前庭中、左右大臣、左右大將、并納言以下、參議以上、列立、西北上、但右大將東面、其後左右近衛陣立定後、寄御輿、于時天皇御立、左右近中將候于御輿之右外掖、乘輿出從日華門、至于建春門外、此間諸卿并諸衛督佐乘馬、御出自陽明門、于時諸衛官人以下、并左右馬寮官人等乘馬、大宮大路北折、行力張陣、行幸大路東西邊見物車并男女雜人等、其數居多也、巳三刻御於院、其儀式并御儲甚神仙也、件院西門外、立七間幄爲左衛門陣、々內南腋立五間幄爲陰陽寮、備時刻、其側去一許丈立三丈幄爲御輿宿陣、內方左右以幔引隔如屏、西中門南腋廊北妻三間敷座爲官行事所、其座二列也、一列外記之座、北上對座、一列同居南端二間隔、有侍從座、當其妻南立三丈幄爲右近衛陣、其後有右兵衛陣、御殿西臺南端有諸卿座、內藏寮進饗饌、其西方庇第二間隔遣戶爲殿上人座、穀倉院進饌、西有七間檜皮屋、南三間爲藏人所雜色、以下心舍人已上座也、一列所乘座、南上對穀倉院座、其後小舍人座、同以進饌、東門外有五間幄、右衛門陣也、東廊南妻有僧房、件僧房西砌透々垣

拜觀ノ雜人

著御

御輿宿陣

饗饌

諸卿ヲ召シ給フ

御遊

敍位

祿

院判官代ニ榮晉ヲ賜フ

下候僧等、御前方見物、同廊南方立六間幄、爲左近并右兵衛陣、未四刻右大將藤原道綱卿有所勞退出、申刻左近中將□同成信朝臣、□源賴定朝臣、四位少將藤原兼隆朝臣、起座進殿上、卷上御簾、于時天皇御南面召諸卿于時殿上人六人、各取圓座敷諸卿座、次左右大臣、內大臣以下起座進殿、上人次第列著、此間中納言藤原實資卿起座進御前、酉刻召堪溢著、能者力于時右馬助平朝臣安義、下總助藤原朝臣惟親、雅樂助藤原朝臣遠理、主水正藤原朝臣保命參入、此間掃部屬大春日正忠、取膝突敷殿砌下、召入著之定後、各唱妙曲、戊刻主殿寮庭中秉燎、事畢有敍位之事、兼是左大臣被免給御隨身左右近衛府生各一人、近衛各四人、□刻、敍位事畢、御著本宮訖、諸卿以下各退出、

〔御堂關白記〕

一 三月五日、戊午、以左衛門有仰、

九日、壬戌、略、中十六日、可有行幸由、應仰道方朝臣、善言朝臣等、

十日、癸亥、中略、東三條院御後、以則忠朝臣、進行幸上達部祿大樹料絹卅疋、

十六日、己巳、有一條院行幸、午一刻御出、從昨夜有咳病氣、然而依無殊事、不御

座、御出著院、以齊信朝臣被申事由、後於中門、從御輿下給、御西對後渡御、申時召公卿等、於御前有御遊、樂所者兩三候、事了後諸卿退立、後召御前院判官代

長保元年三月十六日

四〇一

道長慶ヲ
申ス

葱華輦ヲ
用フ

鳳輦ヲ用
フベシト
ノ論

長保元年三月十六日

四〇二

等賜榮爵、四人、女一人、(道長)下官又如本賜隨身、即申慶、亥時還御、從內出、後參院、爲
出此曉參、比也、其後又參內候宿、

〔台記〕久壽元年十二月廿五日、癸卯、○中略、左大臣賴長ニ隨身、カ、ル、勘長保元年
三月十六日行成記、天皇行幸東三條院、還御之間、右大臣承仰左大臣如元賜
隨身之由、仰外記、左大臣奏慶之、還御、

〔小野宮年中行事〕正三日月
同日行幸事長保元年三月十六日、幸一條院、供葱華輦、
上達部曰、可供鳳輦、而後日問主殿寮、元三日內供鳳輦、其外供葱華輦、五月五
日節會日、供鳳輦、六日供葱華輦、節會及元三行幸供鳳輦、自餘不供、尙供葱花、
案醍醐御日記、如所司申、將後追記、

〔御遊抄〕二朝觀行幸

長保元年三月十六日、幸一條院、小右記、
上達部又召地下管絃人於欄下、上下竹肉相應、右大臣以下侍臣等給祿、
無御遊、

〔公卿補任〕六

(朱書)内覽左大臣正二位藤道長、卅四、三月十六日重給隨身、左右近衛等如元、府生各一

人、近衛各六人、

右大臣從二位藤顯光、外記日記云、三月十六日行幸東三條院、右大臣給隨身、

左右近衛府生各一人、近衛六人云々、而不見不審、可
勘、

十七日、庚午桓武天皇國忌、廢務、

〔本朝世紀〕三月十七日、(桓武)庚午、是日西寺國忌也、仍廢務也、

東三條院院司ヲ定ム、

〔御堂關白記〕一三月十七日、(隆子)庚午、夕後、從內參院判官代、藏人等定申了、

二十日、癸酉御惱、御物忌、仁王會、

〔日本紀略〕一條三月廿日、(顯光)癸酉、仁王會、

〔本朝世紀〕三月十九日、(公季)壬申、午後參議藤原忠輔朝臣參入內裏、被行明日仁
王會大祓事、酉刻退出、

廿日、(顯光)癸酉、天晴、今日臨時仁王會也、○中略、巳刻右大臣、內大臣、中納言藤原實資
卿、平惟仲卿參議、菅原輔正卿、藤原誠信卿、同公任卿、同齊信朝臣、內裏參入行
之、

長保元年三月十七日 二十日

四〇三

判官代
藏人

大祓

參會ノ公
卿

道長伺候
御物忌ニ
衣リテ公
卿伺候セ
ズ

道長以下
宿留ス

長保元年三月二十一日

四〇四

〔御堂關白記〕

一 三月廿日、癸酉、候仁王會、依御物忌、他公卿不候外宿、上達部候南殿、行事近右大將依有障、(平惟也)中宮大夫行之事了退出、有御前如常、但內大臣前立、出陽明門下留立、仍先揖大臣、次揖上達部等、戌時許有御書、有內御惱氣者、即馳參、殊事不御、々咳病耳、日ノ本月十六條參看、

○仁王會定ノコト、二月二十八日ノ條ニ見ユ、二十七日以後、御物忌ノコト、便宜左ニ合致ス、

〔本朝世紀〕

三月廿六日、己卯、天晴、○中略、石清水臨時祭ノコトニカ、ル、使伊豫守源明日內御物忌、宿留左大臣并大納言

□懷忠卿參議源俊賢朝臣、自餘上卿各退出、

廿九日、壬午、○中略、石清水臨時祭ノコトニカ、ル、使伊豫守源仍自昨日內裏御物忌籠候、祭ノコトニカ、ル、使伊豫守源

朝臣兼資、率舞人、同御物忌籠候、

〔御堂關白記〕

一 三月廿七日、庚辰、○中略、石清水臨時祭ノコトニカ、ル、使伊豫守源依御物忌、舞人陪從宿候、

二十一日、戊、甲仁明天皇國忌、廢務、

〔本朝世紀〕 三月廿一日、甲戌、天晴、是日東寺國忌也、仍廢務也、

高野山檢校雅真寂ス、

〔高野山勸發信心集〕

一 地形等事件地尤宜修禪、下 裏書云、○中略

淳祐內供ノ弟子

第四檢校雅真、號和泉、講師、亦云、天野檢校、此雅真公者、石山普賢院淳祐內供之弟子、醍醐延命院元杲僧都之同門也、遂大師跡、攀高野山、是則天曆七季之比歟、其所由者、與院廟塔修理供養之後、經廿許年、爲雷火燒失云々、計其年記當廿

與院ノ廟塔ヲ修理ス

年、爰彼雅真云、始來政所、終向住人、相尋大師御入定廟窟、住人等答云、自修理廟塔以降、敢無往還之人間、林木滋山、頭道路失人跡、更知案內、(不曉力)爭可示廟

下、加之與院廟塔雷火燒失云々、旁暗子細、何明聖窟、雖然懇語見、(知力)山路人

忽企登山、遂臨廟所、即掃廟塔燒亡灰爐、俄起廟塔、建立之願念、忽過抽匪石

之誠、甫營土木之功、天德之砌、廟堂造畢、念之今之廟、此其是也、抑聞雅真公

者、依爲無緣之賓客、申請和泉之講師、以其依怙企此造營云々、亦雨僧正者

泉州人也、天曆六季、壬子出母胎、天德四、庚申入師室、于時幼稚九歲、來天野檢校

之坊、遙離二親、參和泉講師之室、爰知仁海未到來以前、和泉講師雅真公殊

凝大信、專勵微力、爲報恩謝德善根、令造營建立之廟堂而已、

一天野花蘭社前、大師最初建立曼荼羅院、伴院顛倒中絕之後、無籠僧、故雅真

長保元年三月二十一日

四〇五

曼荼羅院ヲ改造ス

仁海來リテ師事ス

山王院下

和泉講師
天野檢校

東三條院
ノ御願

檢校下ナ
治山四十
餘年

長保元年三月二十一日

改造伽藍號山王院云々、

一長保元年三月廿一日檢校雅真入滅墓所在

〔高野山文書〕高野山又續寶簡集九十四

第四檢校雅真、號和泉講師、又云天野檢校云、

此雅真公者、石山普賢院淳祐內供弟子也、醍醐延命院元杲僧都同門也、遂
大師跡、攀高野山、是則天曆七年比歟、其故與院廟塔修理供養後、經二十年、
爲雷火燒失云々、所謂承平三年癸巳、迄天曆六年壬子、計其年記當廿年、爰彼
雅真公始登山、此時相尋大師入定廟所、俄起廟堂、建立願念、甫營土木功、天
德初、廟堂造畢、今廟堂是也、

天野山王院建立、寄六ヶ郷、東三條院御願成、國司大江景理奉行、

一雅真檢校者、寬空僧都時補之云々、

一永觀元年、雅真公補任檢校職、是寬空僧正代也云々、雅真治山四十餘年云
云、

長保元年三月廿一日、南谷院之內西室雅真入滅、墓所澁田在之、

〔真言傳法灌頂師資相承血脈〕○上山城

法系

〔朱書〕淳祐弟子
大法師雅真賴

雅真

〔朱書〕真賴弟子
大法師雅真

曆海

〔密宗聲明系譜〕

定觀高野第三執
行、中院別當

雅真第四檢校、
天野

仁海小野曼茶
羅寺開祖

〔傳燈廣錄〕

續編 小野方上
傳法嗣祖流分之三

真傳

高野山第九座主天野檢校和泉講師雅

和歌總講
師雅真、
式部

講師名雅真、不記姓、國學業優贍善達、和歌、詔爲和泉國講師、又曰和歌總講師、
天曆年中、從淳祐之付法真賴、稟祕密傳法、頂禮退在石山寺、肆肆力宮女紫式部、時
詣于石山、祈觀音而聞法要、永延二年入山、對湖水成月輪觀、心開意解、徹阿字
大空、便撰女書五十四帖、一夜書大般若經裏、名曰源氏、現今流布、真公斯辰得

長保元年三月二十一日

四〇七

四〇六

長保元年三月二十一日

四〇八

彼和歌傳歟、○中長保元年三月二十一日逝、領山務凡四十餘年、遍日、石山寺阿梨園

傳統

傳法

曆海重受

修仁石山

增運石山青龍院

芳源安養坊阿闍梨

慧什

相實廣澤下詳

寂本ノ讚

〔野峯名德傳〕

上 雅真○傳文略ス

贊曰、真公之才德、擬講師與我、檢校至若其燕居新寺、而不居山中者、身計而非道計焉、終百世傳異號、真公而然也、宜矣、今之人無道德、而專爲身計、老死而不悔焉、

墓所

〔參考〕

〔高野春秋〕

四

三月廿一日、天野檢校雅真師入寂、

墓所在東澁田村、中、案、社、役、祭、禮、等、之、時、村、人、死、則、借、鄉、外、之、地、而、葬、之、今、雅、真、公、入、寂、之、日、相、當、臨、時、社、役、之、節、歟、治、山、四、十、七、年、山、籠、明、唐、閣、梨、替、補、焉、治、山、十、六、年、

〔紀伊續風土記〕

四十七 莊 伊都郡六

東志富田村雅真僧都墓

村中にある、弘法大師の法孫なり、○下略

二十三日、丙子大中臣千枝ヲ大神宮大宮司ニ補ス、

〔二所太神宮例文〕

第九大宮司次第

第六十四 千枝

茂生孫安賴男也、長保元年三月廿三日任、公忠讓也、在任三年、僧綱ヲ任ズ、

〔日本紀略〕

院一條

三月廿三日、丙子、任僧綱、

〔本朝世紀〕

院一條

三月廿三日、丙子、天晴、○中午後、中納言

實資卿、平惟仲卿、參議菅原輔正卿、藤原誠信卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、源俊賢朝臣、著左仗座、被

宣命

行僧綱召事、仍參議藤原齊信朝臣、少納言源朝臣伊賴宣命文、參著西寺番所、

此間式部、治部、玄蕃等祇候、宣命畢、各退出、

〔東大寺別當次第〕

權律師深覺

長德四年十二月十六日官符、○中寺務半

年、長保元年、任中補律師、

二十六日、己未位祿目錄ヲ奏ス、是日、明法博士令宗允正ヲシテ、前下野守

平維衡、散位同致賴ノ罪名ヲ勘申セシム、

〔日本紀略〕

院一條

三月廿六日、己卯、召明法博士令宗允正、令勘申前下野守

平維衡、散位同致賴合戰之罪名、

長保元年三月二十三日 二十六日

四〇九

尋覺ヲ律師ニ任ズ

維衛致
檢非致
使聽ス
訊問ニ
致頼過
上頼過
ヲ上ラ
致頼過
ラ過ス
ズ

長保元年三月二十九日

四一〇

〔本朝世紀〕三月廿六日、己卯、天晴、略中早旦、左大臣里第、召大外記滋野朝臣善言、被仰云、下野前司平朝臣維衛散位同致頼等、於伊勢國成合戰、仍召上其身、下檢非違使應許問、維衛朝臣進過狀了、致頼朝臣遁避不進過狀者、使廳日記并維衛朝臣過狀文相副、下給外記、々々給之局參、召明法博士惟宗允政擬勘申各罪名、午後左大臣、內大臣、權大納言藤原懷忠卿、參議藤原忠輔朝臣、同齊信朝臣、源俊賢朝臣著左仗座、被奏位祿目錄之事、

○維衛致頼、伊勢ニ於テ鬪亂スルコト、長德四年十二月二十六日ノ條ニ、罪名定ノコト、本年五月五日及ビ七月二十二日、十二月十五日ノ條ニ見ユ、

東宮御弓、修子內親王御著袴

〔御堂關白記〕一 三月廿六日、己卯、春宮有弓事、女修子一宮御著袴、給左右口、

二十九日、壬午、石清水臨時祭

〔日本紀略〕院一條 三月廿九日、壬午、石清水臨時祭、

〔本朝世紀〕三月廿九日、壬午、今日石清水臨時祭也、○中略、御物忌ノコトニカ、ル、二十日ノ條ニ收

ム、左大臣、大納言藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、參議同公任卿、同忠輔卿同

道長以下
祭事ヲ行

使

齊信朝臣、源俊賢朝臣被行伴祭事、使伊豫守源朝臣兼資、率舞人同御物忌籠候、酉刻參入彼八幡宮、

〔御堂關白記〕一 三月廿六日、己卯、略中依臨時祭、御馬不候、加馬二疋進、

廿七日、庚辰、試樂舞人、少納言伊頼朝臣申障不參、依御物忌、舞人陪從宿候、

廿八日、辛巳、御馬御覽云々、從家先後奉御馬、合八疋入、

廿九日、壬午、巳一刻事初、時々雨下、大道渡間、雨下見物、

卅日、癸未、天晴、見物、

〔小右記目錄〕四臨時祭事 石清水 長保元年三月廿六日、臨時祭試樂事、

〔石清水文書〕五田中家文書附錄 宮寺緣事抄 臨時祭下

同二條 長保元年三月廿九日、壬午、石清水宮臨時祭也、

使伊豫守源兼資朝臣

舞人

(藤原)成房 (藤原)公信

抑

〔石清水臨時祭部類〕石清水八幡宮 臨時祭部類 長保元年三月廿九日、壬午、使伊豫守

長保元年三月二十九日

四一一

試樂ノ舞
人不參
道長馬八
四ヲ獻ズ
道長見物

舞人

大ノ月ニ
ハ二十九日
行フ

長保元年三月二十九日

源兼資朝臣大之月時以廿九日被行例

〔年中行事秘抄〕

三月 同祭臨○時石祭掃 永

依當國忌用他午日事

今按若當十七日國忌可用廿九日下午若當小月者以五日被行之若又當廿

一日國忌者用九日上午歟大月時以廿九日被行例長保元年○下略師遠年

同事抄

檢非違使別當藤原公任大和國司ノ申請ニ依リテ右大臣家ノ使ト稱ス
ル犯人淡海兼正等ヲ勘問セシム

〔北山抄裏文書〕

公輝氏所藏

別當參議從三位行皇后宮大夫兼勘解由長官右衛門四督備前權守藤原朝臣
公任傳宣典侍從五位上藤原朝臣灌子宣奉勅大和國司解狀併爲右六臣家
使內藏秋茂紀光延前司橘俊齊朝臣等淡海兼正不知姓永正等打開添下郡
司常世澄明私宅搜取內財雜物并殺害清口秋則子者宜任所進調度文書勘
問兼正等方決犯狀者

長保元年三月廿九日

右衛門少尉兼信奉

少納言藤原統理出家ス

別當宣
大和國司
解常世澄明
ノ宅ニ亂
入ス

檢非違使別當宣

北山抄紙背
公卿三條公輝氏所藏

原寸
〇〇〇

別當參議從三位行皇后宮大夫兼勘解
普籙前權守藤原朝臣云任傳宣典侍
朝臣瀆子宣奉
勅大和國司解
臣家使內藏秋茂紀光延前刑司橋
等淡海兼正不知姓水正等打
常在澄明私宅搜取內財雜物
秋則子者宜任所遣調度文書
決犯狀者

長保元年三月廿九日

別當宣
大和國司
解世澄明
常宅亂
入ノ宅ニ

ル犯人淡海兼正等ヲ勘問セシム
〔北山抄裏文書〕公卿三條
輝氏所藏
別當參議從三位行皇后宮大夫兼
公任傳宣典侍從五位上藤原朝臣
使內藏秋茂紀光延前刑司橋俊齊朝
司常世澄明私宅搜取內財雜物并
問兼正〔等ノ〕決犯狀者

長保元年三月廿九日

少納言藤原統理出家ス、

別當宣
大和國司
解世澄明
常宅亂
入

〔北山抄裏文書〕
公輝氏所藏

別當參議從三位行皇后宮大夫兼勘解由長官右衛門督備前權守藤原朝臣
公任傳宣典侍從五位上藤原朝臣灌子宣奉勅大和國司解狀傳為右臣家
使內藏秋茂紀光延前司橘俊齊朝臣等淡海兼正不知姓永正等打開添下郡
司常世澄明私宅搜取內財雜物并殺害清秋則子者宜任所進調度文書勘
問兼正決犯狀者

長保元年三月廿九日

右衛門少尉伴兼信奉

少納言藤原統理出家ス

行皇后宮大夫兼勘解由長官右衛門
藤原朝臣公任傳宣典侍從五位上

勅大和國司解狀傳為右

秋茂紀光延前司橘俊齊朝臣

不知姓永正等打開添下郡

宅搜取內財雜物并殺害清

其任所進調度文書勘問兼正

長保元年三月廿九日右衛門少尉伴兼信奉

檢非違使別當宣

北山抄紙背
公卿三條公輝氏所藏

原寸 縱〇三〇九

別當恭議從三位行皇后宮大夫兼勅解
兼前權守藤原朝臣公任傳宣典侍
朝臣漢子宣奉
勅大和國司知
臣家使內藏秋茂紀光延前司樣
等淡海兼正不知姓水正等打
常在澄明私宅搜取內射雜物
秋則子者宜任所進調度文書
決犯狀者

長保元年三月廿九日右衛門少尉

位行皇后宮大夫兼勘解由長官在衛

藤原朝臣公任傳宣典侍從五位藤

二奉 勅大和國司解狀簿為右

殿秋茂紀光延前司橋後音朝宗

正不知姓水正等打開添下部

松宅搜取內射雜物并致官清

軍任所進調度文書勘問兼正

長保元年三月廿九日右衛門少尉 兼

長官右衛門督備前權守藤原朝臣
奉勅大和國司解狀簿為右臣家
兼正不知姓水正等打開添下部
松宅搜取內射雜物并致官清

右衛門少尉兼

多武峯
入ル

道長念珠
ヲ贈ル

前夜髪ヲ
洗フ

道長ヲ訪
フ

増賀ノ門
ニ入ル

〔日本紀略〕

院一條

三月廿九日、壬午、略。中今日少納言藤原統理出家。

〔本朝世紀〕

三月廿九日、壬午、略。中

但是日少納言藤原朝臣統理出家入道、爲

大和國多武峯云々、

〔御堂關白記〕

一 三月廿四日、丁丑、少納言來云、廿七日上多武峯可出家、是

本意云々、召前賜木蓮子念數、

〔今鏡〕

九まことむかのみちかたり

又少納言統理ときこえし人、年ころも世をそ

むく心やありけむ、月のくまなく侍けるに、心をすまして、山深くたつねい
らん心さしのせちに催しければ、まつ家にゆするまうけよ出てんといひ
て、かしら洗ひて、けつりほしなとしけるを、めなりける女も心えて、さめさ
めとなきおりけれど、かたみにとかくいふことはなくて、あくる日うるは
しきよそひして、道長一の人の御もとにまうて、山里にまかりこもるへきよ
しのいとま申けれど、人も申つかさりけるをしひ申ければ、きよ給て、少納
言こなたへとて、出あひ給て、御すゝたひて、後の世は頼むそなと侍りけれ
は、すゝをはおさめて、拜したてまつりて、増賀ひしりのむろにいたりて、か
しらおろしたりけれど、勤め行ふこともなくて、もの思ひたる姿なりけれ

長保元年三月二十九日

四一三

長保元年三月二十九日

四一四

は、ひしりさる心にて、はしたなく侍りければ、うみ侍るへき月にあたりたる女の侍ること、思ひ捨て侍れと、いふせく思ひたまへてなといふを、ひしり都にいそき出て、その家におはしたりければ、えうみやらて、なやみけるを、ひしり祈り給て、うませなとして、人にまめなるものなとこひ給て、車につみて、うふやしなひまでし給けり、その統理に、三條院より、歌の御かへし給はりける、

増賀統理ノ子ヲ産養ス
東宮ト和歌ヲ贈答ス

忘られす思ひ出つゝやま人をしか戀しくそわれもなかむる遺和拾歌

と侍りけるに、涙のこひはへりければ、(東宮)東宮より歌たまはりたらんは、佛にやはなるへきと、ひしりはちしめ給けるとかや、たてまつりたる歌も、あはれにきこえ侍りき、

さみに人なれなゝらひそ奥山にいりての後もわひしかりける遺和拾歌
集、四句、五句ヲいりての後
は戀しかりけるニ作ル、後
とそよみたてまつりける、

〔尊卑分脈〕藤原氏

世系

祐之正五下、伊勢守

統理中務少輔

統理ト藤原公任

〔前大納言公任卿集〕(統理)少納言むねまさか、法師になりて志賀にあるに、

漣や志賀の濱風いかはかり心のうちは涼しかるらむ

同じ人のもとに、久しう音もし給はさりければ、

奥山の木下蔭にすむ人は月さへとはぬ物にそ有ける

かへし

奥山の木下水の清からはもりても月の通はさらめや

三十日、癸未太皇太后御惱

〔小右記目録〕二十御惱事后宮 長保元年三月卅日大宮御惱事、

○御惱ニ依リテ、不動調伏法ヲ修スルコト、閏三月七日ノ條ニ、長日御讀經ヲ行フコト、八月二十八日ノ條ニ見ユ、

長保元年三月三十日

四一五

長保元年閏三月二日 四日

閏三月甲申朔

二日乙酉左大臣道長、春季讀經及ビ修善ヲ行フ、

〔御堂關白記〕一 閏三月二日、乙酉、季續經并修善初、權僧正爲闍梨、

道長ノ修善始

五日、戊子、雨下、讀經結願、上達部多來、

四日丁亥直物、小除日、

〔公卿補任〕六

參 議從三位菅輔正 閏三月五日太皇太后宮權大夫、

非參議正三位藤有國 大宰大貳、閏三月五日彈正大弼、

〔公卿補任〕六 長保三年 非參議從三位平親信 長保元閏三五修理大夫、同年月日昇殿、

〔日本紀略〕一

〔日本紀略〕一 閏三月四日、丁亥、直物、

〔本朝世紀〕 閏三月四日、丁亥、中納言藤原時光（卿力）參議同齊信朝臣著廳座聽

政、無申文、畢移著南所座、事畢著左仗座、依可被行今日直物事、夜部（謀）參候右大臣（公季）內裏、午後內大臣、大納言藤原懷忠卿、中納言（同）實資卿、參議同公任卿、同忠輔卿、源俊賢朝臣參入被行直物、事畢亥刻退出、

内文ヲ覽ル位記請印ナシ

十九日、壬寅、中納言藤原時光卿、參議同懷平卿著廳座、于時令覽内文、聽尋常（讀カ）印了之後、著南所事了、移著左仗座、又内文無位記有印之事、

〔御堂關白記〕一 閏三月四日、丁亥、直物、召御前有小除書、

〔小右記目錄〕五 京官除目事 長保元年閏三月四日、直物小除目事、

五日戊子爲尊親王、賭弓ノ負態ヲ行ヒ給フ、

〔御堂關白記〕一 閏三月五日、戊子、雨下、（略）彈正宮被奉仕弓負事、有御前

物、殿上所儲、依深雨無弓射、懸物奉宮給從、宮以大夫被奉宮、大夫給御衣、依彈正宮御消息、參東院、同車參宮、公卿等同候、入夜退出、

七日庚寅、春季御讀經、御物忌、

〔日本紀略〕一 院 一條 閏三月七日、庚寅、季御讀經始、

十日、癸巳、結願、

〔本朝世紀〕 閏三月七日、庚寅、是日春季御讀經初也、仍無結政、但内裏御物忌

也、因之自夕部籠宿左大臣、大納言藤原懷忠卿、中納言同實資卿、參議同誠信卿、同公任卿行之、午後參著中納言平惟仲卿、參議藤原懷平卿、源俊賢朝臣、事了各退出、

長保元年閏三月五日 七日

道長以下公卿内裏ニ籠ル

結願

定

十日、癸巳、今日春季御讀經結願也、○中午刻内大臣、大納言藤原道綱卿、中納言同時光卿、平惟仲卿、參議藤原誠信卿、源俊賢朝臣、著左仗座行之事、了各退出、

〔御堂關白記〕

一 閏三月七日、庚寅、御讀經發願、依御物忌、籠候公卿余民部

卿、同實卷太皇太后宮大夫、系惟也中宮大夫、宰相中將、源宰相等也、

九日、壬辰、明日依御物忌參内、右大將、宰相中將、源宰相同道參入、

十日、癸巳、御讀經結願、籠候上達部余、内府、右大將、左兵衛督、左大辨、宰相中將、源宰相、

○九日、御物忌ノコト、便宜合致ス、御讀經定ノコト、二月二十八日及ビ

三月九日ノ條ニ見ユ、

太皇太后ノ御惱ニ依リテ、不動調伏法ヲ修ス、

〔小右記目錄〕

一 閏三月七日、依大宮御惱、限五十箇日、被修不動調伏法事、

九日、壬辰東宮賭弓、尋デ、左大臣道長、負態ヲ行フ、

〔御堂關白記〕 一 閏三月九日、壬辰、○中春宮有弓事、

五十日ヲ限ル

御懸物

十日、癸巳、陣申文、

〔御堂關白記〕

一 閏三月十日、癸巳、○中略、ル、本月七日ノ條ニ收ム、カ陣申文如常事了、○下略

〔水黃記抄〕

次史捧書杖跪小庭、○下略

西宮記云、裏書云、陣申文目錄云、長保元年二月卅日陣申文、上卿大納言道長、藤原頼、右少辨爲任、

伊豆國前司藤原理明、任不與解由狀事下諸國、

○二月三十日、陣申文ノコト、便宜合致ス、

十七日、庚子、大神宮以下諸社ニ奉幣ス、

〔日本紀略〕

一 閏三月十七日、庚子、奉幣伊勢以下諸社、天皇行幸八省院、

〔本朝世紀〕

一 閏三月十七日、庚子、今日被立臨時奉幣使日也、仍八省院有御出之事、即供奉、道長左大臣、公季内大臣、中納言藤原實資卿、同時光卿、參議同懷平卿、菅原

輔正卿、藤原誠信卿、同公任卿、源俊賢朝臣、諸司諸衛等供奉如常事了、酉刻大

長保元年閏三月十日 十七日

陣申文目錄

幸八省院行

道長以下供奉ス

臣以下各退出

二十二日、乙權律師清範寂ス、

〔日本紀略〕

院一條

閏三月廿二日、乙巳權律師清範卒、年卅八

〔僧綱補任〕

三興福寺本

講師清範、法相宗、興福寺、正曆三年十月十七日

宣旨、長德四年十月廿四日、任權律師、卅一講勞、卅七播磨國人、大和氏、守朝已講

弟子、長保元年閏三月廿二日、入滅、卅八

〔僧綱補任〕

乾德川昭武氏本

權律師清範、長保元年閏三月廿二日卒、卅八

八、號清水律師

〔諸嗣宗脈紀〕

上

直興

子島小僧都

清範

清水清冷院、文殊化身

真範

一乘院大僧正、平生昌子

〔大鏡〕

下太政大臣道長

又清範律師の、いぬのために法事しける人の講師

に請せられていくを、清照法橋同ほどの說法者なれば、いかゝするときく

に、かしらつゝみて誰ともなくて聽聞しければ、唯今や、過去聖靈は蓮臺の

警句ヲ吐
ヲ喜ハス

能説ノ人

上にて、ひよとほえ給らんと、の給ければ、されはよ、こと人かく思ひよりな
ましや、猶かやうの魂ある事は、すぐれたる御房そかしたこそほめ給けれ、
實にうけ給はりしに、おかしうこそさふらひしか、是は又聽聞衆とも、さゝ
とわらひてまかりにさ、いと輕々なる往生人なりや、又無下のよしなしこ
とに侍と、人のかとくしく魂あることのけふ有て、優に覺え侍りしかは
なり、

〔續本朝往生傳〕

一條天、皇者、圓融院之子也、中時之得人也、於斯爲盛、中

能説之師則清範、靜昭、院源覺緣、中皆是天下之一物也、

〔二中歷〕

十三名人歷

說經

清範 律師

〔拾珠抄〕

一 同筆、御高倉院御結座

宸筆妙經者、中夫說法道也、雖往哲古賢多、是當座之巧辯也、雖清範、永昭、雖

院源、靜昭、皆絕當時之佳譽、不及後日之記錄、後代不聞其妙詞、末世不知其麗

句、中

安元三年七月十日 延曆寺權大僧都法眼和尚位澄憲 注進

假名法華
經供養ノ
導師

文殊ノ化
身ト云ハ
道長清範
ヲ試ム

清水寺ノ
上綱
著書

長保元年閏三月二十二日

四二二

〔河海抄〕

梅枝 江談云、○中

（證子）

但大后自筆假名法華經供養之時、被行御八講

之講師、南北英才相遞爲導師、高名清範、慶祚等之輩、各振富樓那之辨才、

〔古事談〕

僧三

清範律師ハ、播磨國人、興福寺法相宗、空清僧都孫弟子、守朝

已講之弟子ナリ、於諸法無雙、文殊化身トソイハレケル、不思議不可勝計也、

御堂入道殿爲被知食實否、修佛事被請百僧之時、次座ニハ、皆被儲半帖ヲ、一

ノ半帖ニ文殊ト書タル札ヲ、緣中ニ隱テ押テ、被敷交タリケルニ、此律師、吾

座ハ候トテ、搔分テ此半帖ニ被坐ケリ、其後ソ決定文殊ノ化身トハ被知食

ケル、卅八ニテ遷化、清水寺ノ上綱ト申ケリ、（東齋隨筆同ジ）

〔東域傳燈目錄〕

般若部 經錄一

金剛般若經釋 清範律師

〔注進法相宗章疏〕

般若經注一卷 清範

〔佛典疏鈔〕

（因明入正理論疏目錄）

義記 清水清範述

〔諸寺緣起集〕

寺所藏

義林章一本 校刻序、末書目錄、中、五心義私記（清水清範）

〔今昔物語〕

十七 律師清範知文殊化身語第卅八

今昔、律師清範ト云フ學生有ケリ、山階寺ノ僧也、清水ノ別當ソニテ有ケル、心

寂照ト親

寂照清範
所持ノ念
珠ヲ持テ
宋ニ入ル
宋ノ皇子
ハ清範ノ
再生

ニ智リ深クシ人ヲ哀フ事佛ノ如シ、其ノ中ニ、說經ナム並ヒ無ケル、然レハ、

諸ノ所ニ行テ、法ヲ說テ人ニ令聞テ、道心ヲ令發ム、而ルニ、其ノ時ニ入道寂

照ト云フ人有リ、俗ハニテ大江ノ定基ト云リ、ケ身ノ才、止事無ク、シ公ケニ仕

ケル程ニ、道心ヲ發シテ出家セル也、而ルニ此ノ入道寂照、彼ノ清範律師ト、

俗ノ時ヨリ、得意トシ互ニ隔ツル心無クシ過ニ、清範律師ノ持ケル念珠

ヲ、入道寂照ニ與ケリ、其ノ後、清範律師死テ四五年ヲ經ケル間ニ、入道寂照

ハ震旦ニ渡リ、ケ彼ノ清範律師ノ與リシ念珠ヲ持テ、寂照、震旦ノ天皇ノ御

許ニ參ケルタリ、四五歳許ノ皇子走リ出タリ、寂照ヲ打見テ宣ハク、其ノ念珠

ハ、未ダ不失シテ持リナト、此ノ國ノ言ニテ有リ、寂照此レヲ聞テ、奇異也ト

思テ、答テ云ク、此レハ何ニ仰セ給フ事ソト、御子ノ宣ハク、有テ其ノ持タル

念珠ハ、自ラカ奉リシ念珠シト、其ノ時ニ寂照カ思ハク、我カ此ク持タル念

珠ハ、清範律師ノ令得シタリ念珠シ、カ此ノ御子ハ、然ハ其ノ律師ノ生レ給フ

心得テ、此レハ何ニ此ハクテ御マシト問レハ、御子ノ宣ハク、此ノ國ニテ可利

益キ者共ノ有レハ、此ク詣來タル也ト許答テ、走リ返リ入給ケリ、其ノ時ニ

寂照思ハク、彼ノ律師ヲハ、皆人文殊ノ化身ニ在スト云ヒシ、說經ヲ微妙シニ

長保元年閏三月二十二日

四二三

長保元年閏三月二十二日

四二四

テ、人ニ道心ヲ令發レハ、云フナメ思ヒシ然ハ實ノ文殊ノ化身ソニコ在ケマシ
ト思フニ、哀レニ悲クテ、涙ヲ流シテ、御子ノ入給ルヒヌ方ニ向テソ禮ル、ケ實
ニ此ソレコ聞クニ、貴ク悲シキ事有レ、此レハ、彼ノ律師ノ共ニ震旦ニ行タル
人返テ語ルヲ聞キ繼テ、語リ傳ルヘタトヤ、

〔今昔物語〕

十三 女子死受蛇身聞說法花得脫語第四十三

今昔西ノ京ニ住ム人有ケリ、品不賤ヌ人也、一人ノ女子有リ、其ノ女子形貌
端正ニシ、心性柔和也然レハ、父母此レヲ愛シテ傳ク事無限シ、年十□歲許
ニ成ルニ、手ヲ書ク事、人ニ勝テ、和歌ヲ讀ム事並ヒ無シ、亦管絃ノ方ニ心ヲ
得テ、箏ヲ彈スル事極メテ達レリ、而ルニ其ノ家廣クシ、檜皮葺ノ屋共數有
リ、其ノ□^(作)様々ニシ、尤モ興有リ、遣水ナト可咲クテ、春秋ノ花葉ナト面白
シ、而ル間、父母此ノ女子ヲ愛シテ過ニク、女子花ニ目出葉ヲ興ヨリ外ノ事
無シ、其ノ中ニモ、何ニ思ニエケル有ケム、櫻ノ花ノ霞ノ間ヨリ綻ヒテ見ユ、青
柳ノ糸ノ風ニ亂タル不弊ラス、秋ノ葉ノ錦ノ裁チ重タル様モナル見所有リ、
小萩カ原ノ露ニ霑チ、籬ノ菊ノ色々ニ移タル皆様々ニ可咲キラ、只紅梅ニ
心ヲ染テ、此レヲ翫リ、ケ東ノ臺ノ前ヘ近ク、紅梅ヲ植エテ、花ノ時ニハ、早旦

長保元年閏三月二十二日

四二五

ニ簀子ヲ上ケテ、只獨リ此レヲ見ツ、他ノ心無ク此レヲ愛リ、ケ夜ニ至ル
テ、媚キ句ヲ目出テ、内ニ入ル事ヲセ、木ノ邊ニハ、草ヲモ不生サス、鳥ヲモ
不居テ、シ花散ル時ニ成ハ、木ノ下ニ落タル花ヲ拾ヒ集テ、塗タル物ノ蓋
ニ入テ、程ト過テ、句ヲ愛ス、風吹ク日ハ、木ノ下ニ疊ヲ敷テ、花ヲ外ニ不散
テ、シ取リ集メテ置ク、切ナル思ヒニ、花枯ハ、取集テ、薰ニ交セテ、句ヲ取リ、
其ノ中ニモ、小キ木ヲ殖テ、此レカ花榮ヲ見テ、他ノ事無ク興リ、ケ而ル間、
此ノ女子何モト無ク惱マシ氣ニテ、態ハトニ無トケレ、日來煩リ、ケ日員積リテ
病ヒ重ク成ハ、レ父母此レヲ無限ク歎クト云モ、ト墓無クシ失リ、ケ父母無
限ク泣キ悲ムテ惜ムト云モ、ト事限リ有レハ、葬送シテ後、人々別ケレニ、其ノ
後、此ノ紅梅ノ木ノ下ヲ見ルニ付モ、テ惜ミ悲ム事無限シ、而ル間、此ノ木ノ
下ニ小サキ蛇ノ一尺許ナル有リ、只有ル蛇リトメ人思フ程ニ、明ル年ノ春、此
ノ木ノ下ニ去年ノ蛇出來ヌ、木ヲ纏テ不去シテ、花榮テ散ル時ニ、蛇口ヲ以
テ花ヲ食ヒ集テ、一所ニ置ケル、父母見テ、此ノ蛇ハ、早ウ昔ノ人ノ成リタル
有ケレ、哀レニ悲シキ事トカナ思モ、ト姿替テ有ルカ疎キ事ト歎キ悲テ、清範、
嚴久ナト云フ止事無キ智者共ヲ請シテ、此ノ木ノ下ニシ法花經ヲ講シテ、

長保元年閏三月二十二日

四二六

八講ヲ行ヒケ而ルニ此ノ蛇木ノ下ヲ不去テ、シ初メノ日ヨリ講ヲ聞ク、五
卷ノ日清範其ノ講師トシ龍女カ成佛ノ由ヲ説ルキニ、實ニ聞ク人モ涙ヲ流
シテ、哀レ也ト聞ケル其ノ蛇木ノ下ニ有テ、其ノ座テニシ死リ、ケ父母ヨリ始
テ、諸ノ人ノ此レヲ見テ、涙ヲ流シテ哀フ事無限シ、其ノ後父ノ夢ニ有リシ
女子極テ穢ク汗タル衣ヲ著テ、心ニ思ヒ歎ル氣色ニテ有ル程ニ、貴キ僧
來テ、其ノ衣ヲ令脱レメタ、膚ハ金ノ色ニシ透キ通ニ、微妙ノ衣及ヒ袈裟ヲ
令服メテ、僧自ラ女ヲ引キ立テ、紫ノ雲ニ乗セテ去ヌト見テ夢覺ヌ、誠ニ
此レ偏ニ法花ノ力也、蛇ノ身也ト云モ、ト法花經ヲ説ク座ニ有テ死ハ、疑
ヒ無ク法花聽聞ノ功德ニ依テ、蛇身ヲ棄テ、淨土ニ生セル也ト、皆人云ヒ
貴リ、ケ何ニ況ヤ五卷ノ日龍女成佛ノ由ヲ説ク時死ヌル事ノ聞クニ哀レ
悲シキ也トナ語リ傳ルヘタトヤ、

〔眞俗雜記〕

○十八彰考館本

二十五清範源心持經夏

惠心僧都爲習因明被參興福寺清範僧都許ケレハ、清範先問云、貴邊何經爲
持經給、惠心各云華嚴經普賢十願大般若理趣分讀候也答ラレケレハ、清範
我ニ經ヲ持經讀候也、被御二人意樂同實貴珠勝也、夢中老翁見參、起信論誰人

譯候ソト問、答云、正在義譯也、我再治、依之世人云眞諦譯也云云、

〔實曉記〕

一聞見雜記十三條

光尊權僧正被申云、天文廿二癸巳、九月廿四日、

東院地藏講之砌也、昔惠心僧都子島上綱眞興、清水寺清範、三人參會之時、面
々ニ意ニカナウ事ヲ御語アリ、惠心僧都云、西向ニ本尊ヲ懸、其御前ニ香ヲ
燒之時、風モ不吹シテ香ノ煙スクニアカルヲ見テ、念佛ヲ申程、意澄テ面白
ハナキ由被申云々、子島上綱眞興云、佛教ノ煩シキ義ヲ伺ニ、諸教ニ不見ヲ、
聖教ヲ拜見スルニ、其義ニ尋當リ、彼聖教ヲ觀シ見程面白事ハ無之云々、清
水寺清範云、春ハ花、秋ハ紅葉、其時々ノ興ニ向ヒ、朝ヨリ兒若衆ヲアツメ、酒
宴セシムル程ハ、面白儀ハ無之云々、其折節洛中ニ出之而勝劣ヲ沙汰スル
ニ、清範之儀勝云々、子島惠心之儀ハ趣カサリテ聞也、清範ハ下地ハミヒラ
キテ、然モ凡夫迷謬ノアリテ習殊勝々々云々、

○清範、藤原濟時ノ白川第法華八講ニ導師ヲ勤ムルコト、寛和二年六
月十八日ノ條ニ、故關白道隆ノ佛事ニ講師ト爲ルコト、長徳元年九月
十日ノ條ニ見ユ、

二十六日、外記政、東宮御讀經、

長保元年閏三月二十六日

四二七

申文
公季以下
參著

〔本朝世紀〕閏三月廿六日、乙酉、權大納言藤原懷忠卿、中納言平惟仲卿、著廳座聽政、參議藤原忠輔朝臣、著結政座、次上卿著南所座、申文了、移著左仗座、○略、今日東宮御讀經也、仍內大臣以下參著、戌刻退出、
○四月六日以後、外記政ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔本朝世紀〕四月六日、戊午、休也、
十二日、甲子、休也、
十八日、庚午、休也、
廿四日、丙子、休也、○下
廿九日、辛巳、休也、○下

二十九日、壬子、京官除目、

〔公卿補任〕

參議正四位下藤公任 閏三月廿九日、辭長官、
從四位上藤齊信 左中將、閏三月廿九日、勘長官、月日正四下、

源俊賢

修理大夫、伊豫權守、閏三月廿九日、辭大夫、

〔公卿補任〕

長保三年

參議正四位下藤行成

〔長保元年閏三月廿九日、大和權守、補任同〕

〔公卿補任〕

寬弘八年

參議從四位下藤通任 長保元年閏三月日兼右馬頭

〔類聚符宣抄〕

諸長上等事

太政官符 式部省

應補木工長上弓削清茂死闕替事、
工長從七位上秦忌寸正平

右得宮內省解僱、木工寮解僱、伴正平、從去天祿三年以來、不懈恪勤、無倦造作、况乎亦才能尤足、爲長上職也、望請省裁、早被言上於官、補任清茂死闕所、將知勞績不朽、彌致忠節者、中納言從三位兼行中宮大夫平朝臣惟仲宣、依請者、省宜承知、依宣行之符到奉行、
左中辨高階朝臣
右大史美麻那宿禰

長保元年閏三月廿一日

〔御堂關白記〕

一 閏三月廿九日、壬子、○中午後參內、有除目、任右馬頭、

〔小右記目錄〕

五 京官除目事 同廿九日、除目事、

○藤原公信等補任ノコト、便宜左ニ合敘ス、

長保元年閏三月二十九日

四二九

木工寮ノ
長上ヲ補
ス

右馬頭ヲ
任ス

長保元年閏三月二十九日

四三〇

〔公卿補任〕

長和二年

參議正四位下藤公信

〔長保元年〕閏三月日任少納言

〔公卿補任〕

長元二年

參議正四位下藤重尹

〔長保元年〕同年閏三月日任右兵衛佐

紫宸殿ニ
出御

音樂
立奏ナシ

左右兩將
番奏列次
ニツキ相
論ス

四月癸丑朔盡
一日癸丑旬儀

〔日本紀略〕

院一條

四月一日、癸丑、旬也、天皇出御南殿、

〔本朝世紀〕

四月一日、癸丑、今日旬也、仍在御出紫宸殿、中納言藤原實資卿、平

惟仲卿、參議菅原輔正卿、藤原誠信卿、同公任卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、源俊賢朝臣、參入、著左仗座、次遷著紫宸殿之座、左右有音樂事、但無立奏、

○左右近衛兩將、旬日ノ番奏警固ノ列次ニツキテ相論スルコト及ビ令宗允亮ノ非執政非參議ニ關スル質疑ニ答フルコト、便宜左ニ合敘ス、

〔北山抄〕

羽林要抄

旬日番奏警固召仰之時、左將五品、右將四品行立之間、兩將相論、或依官列上、或依位列上、余之所按、可依位歟、件論及卿相臨事、嗷々、近則右衛門督公任番奏時、尙可依官者、仍退問右衛門權佐、令宗允亮、注送式部式文、爲斷後疑、載以在右

延喜式第十八 式部上、

長保元年四月一日

四三一

令宗允亮
右ノ質疑
ニ答フ

五位ノ左
將ハ四位
ノ右將位
下ノ列ス
ベシ

長保元年四月一日

四三二

凡諸節會行列次第親王及參議已上并諸官三位已上在左諸王左右行列在諸臣上其申政之時以官秩次但五位已上位色不同雖是下官猶先高色按此式文稱下官是見所帶之官稱位色亦則所帶之位也所謂左將五品右將四位先高色之文猶須四位右將立上五位左將列下歟番奏警固之事共以申政之儀也太政官式文非可准據式部文可謂

長保元年四月廿五日

左衛門權佐令宗允亮略中

件日記合愚按及式文

長保元年八月十四日右衛門督參會法性寺清談次云尋見承平日記左將猶可列右將下左五品右四品事也者先日執論還可嘲哢偶愚按

〔小右記〕八月十四日甲子中略法性寺ニ於テ御八右金吾先日執論近衛次將次第事今日已以承諾左將五位右將四位列立間之論示之事趣在先日記

〔政事要略〕六十九糺彈雜事九致敬拜禮下馬事

又云非執政二位者列中納言之下三位參議之上三位者四位參議之上

此條不見弘仁式初載貞觀式今件非執政可謂非參議大略注左

令宗允亮
非執政
參議ニ關
スル質疑
ニ答フ

參議執政
同義ナリ

唐會要ノ
記事

國史ノ記
事

參議ノ濫
觴

左傳注ノ
記事

天長十年十一月十八日宣旨云大輔從四位上朝野宿禰鹿取傳宣右大臣宣奉勅非參議二位之人宜列中納言之下三位參議之上其諸節祿法亦准三位參議以爲恆例

式文所稱之非執政者宣旨所注之非參議也何者天長宣旨初立此法撰貞觀式之日已入件文綴延喜式之時續無相改即知參議執政文異義同矣但偷檢漢家本朝之成文別注于左粗敘其意

會要云宰相部貞觀元年九月御史大夫杜淹參議朝政三年二月魏徵除祕書監

參議朝政四年二月蕭瑀除御史大夫與宰相參議朝政唐朝參議見此文也太宗代始興其號歟

國史云文武天皇大寶二年五月丁亥勅從二位大伴宿禰安麻呂正四位下粟

田朝臣真人從四位上高向朝臣麻呂從四位下下毛野朝臣吉麻呂小野朝臣

毛野令參議朝政或記云文武官五人參預朝政本官如故本朝參議之起自此始焉

已上兩朝參議之號濫觴如此

左傳云鄭之執政侈難將至矣政必及子々爲政悼以禮注云侈謂伯有正義云伯有次子展之下此季子展卒故伯有執政也論語云王孫賈問曰與其媚於奧寧媚於竈何謂也注云王孫賈衛大夫奧內奧以喻近臣也竈以喻執政者也疏

長保元年四月一日

四三三

長保元年四月一日

四三四

云、賈仕衛執政、爲于國之要、史記云、武本天下治亂、在朕一人、唯二三執政、猶吾股肱也、

會要云、宰相永涼二年七月、中書令裴炎、以中書令執政事、又云、崇將開元十年八月、有上書者、以爲國之執政、同其休戚、若不稍加崇寵、何責其盡心、

國史云、藤原朝臣豐成、天平勝寶元年、拜右大臣時、其弟大納言仲麻呂、執政專權勢、國史、或稱仲麻呂執政

已上執政文、兩朝相並載之、

右就上件文案之、當朝制法、多擬漢家、爰會要宰相部、皆稱參議、又書籍之中、執政之者、各帶本官之人、只執時政之輩也、必謂參議、雖無評說、會要以裴炎執政事、特入宰相部也、蓋取此義、即改參議、更稱執政、注載式條歟、因循如此、疑慮可決、

長保元年閏三月廿七日

彈定件事（正判力）允亮（令字）

衛門府月奏、

〔北山抄裏文書〕

○公爵三條公輝氏所藏

去閏三月、上下番番長以下、府掌已上上日、

番長
大糧使

權番長

督ノ隨身

厨家

案主

番 長伴 清光

越前國當年大糧使

權番 長日置興吉

加賀國當年大糧使

番 長秦 則忠

美作國當年大糧使結解勘定未署了、

飯高連茂

上日廿九 督御隨身、

矢集延明

上日十四

夜三

三野夏景

上日廿九 厨家

住吉世忠

安藝國去長德元年大糧使預物未究進、

番長兼案主三毛是秀

播磨國當年大糧使結解、

番 長豐島眞平

上日十四

夜三

丈部兼平

土佐國當年大糧使

番長兼案主笠 守親

備前國去年大糧使預物未究進、

秦 保平

備中國去年大糧預物未究進、（使脱力）

番 長秦 兼則

上日廿九

夜十

凡河内保規

備前國當年大糧使

清内永明

上日廿九 督御隨身、

長保元年四月一日

四三五

長保元年四月一日

四三六

淀御贄所

額田行光
竹林正共

周防國去年大糧使預物未究進、
上日十五 淀御贄所、

番長兼案主若湯坐望如

上日五

大糧所

垂水爲通

近江國當年大糧使結解勘出未究濟、

番 長尾張眞忠

美作國去年大糧使結解勘出未究濟、

權案 主笠 良信

上日廿九 大糧所、

養所

常澄利信

上日七

案 主茨田秀俊

上日十五 養所、

造府所

坂上爲親

備後國當年大糧使

府掌

垂水行平

上日廿九 造府所、

凡河内利致

伊豫國當年大糧使結解勘定未署了、

(此間開文アラン)

上日

府掌 秦 茂正

上日十五

鴨宮 眞

上日廿九

紀 綾眞

讃岐國去年大糧使結解勘出未究濟、

辟秦吉茂

上日廿九

夜十

大春日助安

未到 督御隨身、

笠 友秀

丹波國當年大糧使結解勘出未究濟、

和久吉成

讃岐國當年大糧使結解勘出未究濟、

飯高吉成

未到、

曾禰時延

美濃國當年大糧使結解勘出未究進、

丈部光平

周防國當年大糧使

右去閏三月上下番番以下府掌已上上日并夜如件、

長保元年四月一日

府生凡河内(自署下同シ)保年

大志縣犬養爲政

大尉藤原藤原

三日、卯乙廢務

〔本朝世紀〕四月三日、乙卯、今日廢務也、

五日、丁檢非違使ヲシテ、拘禁セル僧康壽等ニ暇ヲ給シ、療治ヲ加ヘシム、

長保元年四月三日 五日

四三七

長保元年四月八日 九日 十一日

四三八

〔北山抄裏文書〕○公輝氏所藏

案

別當宣稱僧康壽三宅本高物部秀信依有可辨申事召禁者也而各受重辛苦者宜給身假令加療治者

長保元年四月五日

左衛門權少尉安倍信行奉

八日庚申平野祭

〔日本紀略〕院一條 四月八日庚申平野祭

〔本朝世紀〕四月八日庚申終日雨降今日平野祭也

九日辛酉梅宮祭

〔日本紀略〕院一條 四月九日辛酉梅宮祭

〔本朝世紀〕四月九日辛酉今日梅宮祭也

十一日癸亥左京大夫從三位源泰清薨

〔日本紀略〕院一條 四月十一日癸亥從三位左京大夫源朝臣泰清薨年六十一

代要記

〔公卿補任〕六

非參議從三位源泰清

醍醐天皇御孫(四男)時子有明親王三男母同忠清卿

永延

官歴

豐樂院ヲ造ル

世系

二年正月廿九日彼爲讚岐守之時造豐樂院賞同日任左京大夫長德五年薨歟年月日不知云々可勘

〔本朝皇胤紹運錄〕

有明親王 三品兵部卿

源泰清 從三、大藏卿、左京大夫、母同、臣仲時、平公左女

〔尊卑分脈〕源醍醐氏

有明親王 二品兵部卿

泰清 左京大夫、彈正大弼、從三、大藏卿、母同、仲左大臣

賴節 玄蕃頭、從五下、母惟村、材女

賴貞 武藏守、從五下、母同、武藏守

〔權記〕長保二年三月廿五日壬寅故左京大夫法事也亦參内候宿

十三日乙丑位記請印延引

〔本朝世紀〕四月十三日乙丑今日位記請印之例日也而上卿遲參並式部丞

各申故障不參仍無位記請印之政

○成選ノ位記ヲ授クルコト五月十一日ノ條ニ見ユ

長保元年四月十三日

四三九

一周忌法事

上卿ノ遲參ニ依ル

長保元年四月二十一日

四四〇

警固

二十一日、西賀茂祭、

〔日本紀略〕院一條 四月十九日、辛未、警固、

解陣

廿一日、癸酉、賀茂祭、

廿二日、甲戌、解陣、

〔本朝世紀〕院一條 四月十九日、辛酉、中午後左大臣、參議藤原公任卿參入內裏、彼賀

警固召仰

義御所事、退出、

十九日、辛未、午後中納言平惟仲卿參入、著左仗座、被召仰賀茂祭間、諸陣警固之事、仍召諸衛官人等、而右衛門並右兵衛府官人等不參、申故障者、隨候召仰左衛門權少尉、左近衛權少將監尾張兼時、事訖各退出、未刻、

廿一日、癸酉、是日賀茂祭也、

廿二日、甲戌、午後中納言藤原實資卿、平惟仲卿、參議藤原懷平卿、著左仗座、被行警固解陣事、退出、

〔政事要略〕六十九 致敬拜禮、糺彈雜事九 長保元年四月廿二日、賀茂祭警固解陣、

將五位右中
左少將五位
上列ノス

仰上卿太皇太后宮
大夫藤原實資卿、右中將源賴定、四位、左少將藤成房、五位、依四位右中將列上、日、下、略、本、月、一、條、收、ム、

二十四日、丙吉田祭、

〔日本紀略〕院一條 四月廿四日、丙子、吉田祭、

〔本朝世紀〕院一條 四月廿四日、丙子、中但是日吉田社祭也、仍外記宗岡爲成、率史

生酒人宗行、著社頭、子細在別日記、

二十八日、庚官奏、是日、東三條院、參內シ給フ、

〔御堂關白記〕院一條 四月廿八日、庚辰、官奏、初奉仕、今夜院參內給、

二十九日、辛贈太皇太后安子國忌、

〔本朝世紀〕院一條 四月廿九日、辛巳、中今日皇后國忌也、仍參東寺、參議〇以下

東寺ニ於
テ行フ

長保元年四月二十四日 二十八日 二十九日

四四一

五月壬午朔盡

五日、陣定ヲ行ヒ、前下野守平維衡、散位同致賴ノ罪名及ビ左右馬寮、諸國申請ノ雜事等ヲ議ス、是日、外記政アリ、

罪名定
播磨家島
御牧ノコ
諸國ノ色
代免除ノ
コト

〔本朝世紀〕五月五日、丙戌、權大納言藤原懷忠卿、中納言同時光卿、參議同誠信卿、同齊信朝臣、源俊賢朝臣、著廳座聽政、但依雨降、不移著侍從所座、午後左大臣、右大臣、中納言藤原實資卿、參議藤原公任卿、著座左仗座、於伊勢國散位平朝臣維衡、與同致賴朝臣成合戰、任法家勘文、（申上）○三月二十六條參看、罪被定行、相次左右馬寮申請、家島御牧駟調御馬、可附國家宰事、及丹波因幡讚岐三ヶ國申請、給復色代等事、臨深更各退出、

〔御堂關白記〕

一 五月五日、丙戌、深雨、著陣定、維衡、致賴等事、并諸國申請事、（公任）○維衡、致賴ノ罪科ヲ議スルコト、七月二十二日ノ條ニ見ユ、十二日以（藤原實資）後外記政ノコト、便宜左ニ合彼ス、

〔本朝世紀〕

五月十二日、癸巳、休也、
十八日、己亥、休也、
廿三日、甲辰、參議左大辨藤原忠輔朝臣、著結政座、

結政座ニ著ス

廿四日、乙巳、休也、

卅日、辛亥、休也、

六日、丁亥、左大臣道長ノ第二於テ、作文アリ、

〔御堂關白記〕

一 五月六日、丁亥、於東對召作文人々作文、中納言、右衛門督、（公任）宰相中將等、可然殿上人等來、

七日、戊子、早朝講文、題水樹多佳趣、（公任）齊名朝臣所出也、韻深字以言朝臣、序匡衡朝臣、此後掩韻、

〔江吏部集〕

七言、夏日陪左相府書閣、同賦水樹多佳趣、應教一首、（公任）以深韻、

序、并、地部

洛陽城中有一勝境、本是丞相之甲第、重閨東閣之榮名、或為母儀之仙居、屢迴天輿之臨幸、爰我相府、感其形槩之靈奇、增以水樹之佳趣、石瀨巖灣、風調彈箏峽之曲、春花秋葉、雨染錦繡谷之文、至如彼千秋之岸、鑿以無私、萬年之枝、攀以有節、向蘋藻兮觀魚、猶垂渭陽之釣、栽梧桐兮待鳳、載轄博陸之車者也、夫偏事啓沃者、玄元養生之方難求、偏賞煙霞者、緣綬補袞之道易闕、懿矣相府之居此地、朝出則紫宮不遠、暮歸亦青山在傍、鑿翠池而泛舟、是象岳之

長保元年五月六日

藤原公任
等來會ス

文ヲ講ズ
題

掩韻

大江匡衡
ノ詩及ビ
序

長保元年五月九日

四四四

不忘濟川也、締金埒而閑馬、是文事之不捨武備也、氣韻之美、不光古乎、于時
蕤賓暇日、艾人後朝、卿相四五輩、風月數十人、酌道德而爲酒、豈只越王鳥之
飛頻、味禮樂而爲肴、豈只吳江魚之細切、匡衡蓬壺踏雲、葵心向日、雖才非一
驥、心慙賢相之廻顧、而官有二、龜首載聖代之重恩、幸屬盛遊、何不記錄云爾、
園池佳趣、一相尋、樹影重々、水色深、照藻月瑩方見鏡、入松風、撫自聽琴、削成曲
洛城中石、養得翹材、館下林、動靜飛沈、皆計會、好憑軒檻、快放吟、

〔本朝麗藻〕

夏上 水樹多佳趣

右金吾

水樹清涼景氣深、自多佳趣助登臨、一千年鶴鑿流思、五大夫松傾蓋心、翡翠成
行烟暗色、瑠璃繞地浪清音、歡遊已隔囂塵境、莫語此時漫醉吟、

同前

源道濟

幽奇水樹足登臨、佳趣太多興味深、沙石縱侵何得汗、枝條方茂好成陰、流清自
備聖人鑒、松古唯諳君子心、無限風烟蓮府裏、不思象外遠相尋、

九日、庚寅、陸奧臨時交易ノ御馬御覽、

〔日本紀略〕

院一條

五月九日、庚寅、奏陸奧交易御馬廿匹解文、天皇出御御覽

之、

藤原公任
ノ詩

源道濟ノ
詩

解文ヲ奏
ス

御馬交易
使

出御

御馬ヲ前
庭ニ牽ク

左右近衛
中將御馬
十疋ヲ擇
取テ

南門ヨリ
牽入ル

〔本朝世紀〕

五月九日、庚寅、午後左大臣、(皇孫)內大臣、大納言藤原道綱卿、權大納言

懷忠卿、參議同懷平卿、參議左大辨、同忠輔朝臣等參入、著左仗座、然間陸奧臨
時交易御馬廿疋、使右馬權少允橘公憲、隨身解文參局、然而附于官、仰可進之
由返却、其後左大臣召大外記滋野朝臣善言、仰云、自左兵衛陣、被仰可牽御馬
之由、即召仰府生登美益光又了、于時南殿西第三間立屏風并大床子、御天皇
次左大臣進殿上、召御馬於前庭、仍左近衛等各取御馬牽廻三度、一夕騎之、三
度打廻、即下向、北面並立、相次左近衛中將源經房朝臣、左馬頭藤原相尹朝臣、
入自日華門、南殿南階下東間柱許、向西北上並立、次右近衛中將藤原實成朝
臣、右馬助平朝臣孝義等、入自月華門、同階西間柱許、向東北上並立、各進寄御
馬許、擇取左十疋、右十疋、然後退出、於門外置鞍駒、且出會於庭前、即勝於月華
門外馳庭、於日華門各退出、臨時不見其體、然後天皇御本殿、但左大臣候宿、自
餘上卿及秉燭被退出、

〔御堂關白記〕

一

五月八日、己丑、於馬場見陸奧交易御馬、是參內、次從南門

引入也、

九日、庚寅、參內、著陣座、道方朝臣下交易御馬解文、可出御南殿者、御裝束了御

長保元年五月九日

四四五

長保元年五月十一日

四四六

出引馬後召左近中將經房朝臣馬頭相尹朝臣右近中將實成朝臣馬助孝義
令取御馬(撰カ)無取後左右各置鞍馳入夜入御々馬廿匹

入御
御馬交易
使ノ申文
ヲ奏ス

六月三日甲寅略○中依夢想不宜不他行以道方朝臣令奏御馬交易使右馬允
公憲申(文脱カ)

〔樗囊抄〕年中 陸奥交易

長保元五九廿正 出御

十一日壬辰成選ノ位記ヲ授ク

〔本朝世紀〕五月十一日壬辰此日於官廳有授成選位記事須四月十五日被

引今日行之仍延所司裝束用雨儀東廳西廂壇上立床子十脚北五脚式部省料

一脚輔料四脚丞錄各南五脚兵部省料一脚輔料四脚丞兩省丞錄各立床子

四入料並西面南上一脚爲置位記管料前一日大外記滋野朝臣善言召仰式部省掌漢部永見兵

部省掌丸部有枝等云可被行授成選位記事輔以下錄以上宜令候誠者于時

式部大丞藤原泰通同師信少丞同廣業少錄伴季隨石城文信兵部權少輔藤

原朝臣兼親大丞藤原孝理少錄宇治守信豐原爲時等參式部輔少丞源濟賴

少錄弓削清言阿刀佐友兵部大丞源永光少丞藤原國卿(朝臣)源齊大錄佐伯佐實

不參ノ人
輔以下錄
以上

宣旨書ノ
回覽

少納言等
結政所ニ
著ス

少錄直是氏等申故障不參于時少外記慶滋爲政爲代官宣旨書以使部令廻
以典藥頭丹波宿禰重雅爲式部輔代以大藏大丞紀孝親爲丞代以圖書大屬
秦茂富大炊少屬飯高舉用等爲錄代以內藏少允藤原延慶主計大允御船昌
光織部佐掃守親扶等爲兵部丞代以陰陽少屬秦文隆大膳少屬大友忠節等
爲錄代當日已刻少納言藤原朝臣(朝臣)典大外記滋野朝臣善言宗岳爲成少外記
慶滋爲政等率史生等令覽御印著辨官結政所中納言藤原時光參議同公任
卿參議左大辨同忠輔朝臣同齊信朝臣源俊賢朝臣參入就東廊外床子座于
時上卿召少外記爲政仰諸司具否之由即爲政申云式部大丞藤原泰通同師
信少丞同廣業少錄伴季隨石城文信兵部權少輔藤原朝臣兼親大丞藤原孝
理少錄宇治守信豐原爲時等參式部少丞源濟賴少錄弓削清言阿刀佐友兵
部大丞藤原永光少丞同國卿源齊大錄佐伯佐實少錄直是氏等申故障不參
者其代誰人誠也(誠カ)式部輔代典藥頭重雅宿禰丞代大藏大丞紀孝親錄代圖書
大屬秦茂富大炊少屬飯高泰用兵部丞代內藏少允藤原延慶主計大允御船
昌光織部佐掃守親扶錄代陰陽少屬秦文隆大膳少屬大友忠節宜令奉仕者
奉之退返次上卿起座經北屏外(屏カ)西廊於邊著靴著廳于時少納言藤原朝臣朝

上卿座ヲ
起ツ

長保元年五月十一日

四四七

申文ナシ
請印

宣命使

選人等ヲ
召ス

典、少外記爲政、史生佐伯諸高等著靴結政壇立、少納言暫今日史故障不參、仍無申文、進應請印如常、內記各故障不參、仍以少外記宗岳爲成爲內記代、挿宣命書文於剗、入自廳西第一戶、經參議後奉上卿出、次外記爲政捧式管、入自門奉於上卿、取式便入宣命於管、外記受之退出、授宣命使少納言源朝臣伊賴、次上卿喚召使二聲、召四人於正廳乾角壇上列立、東面南上、同音稱唯、即一人經西廳後南壇、上自東廂壇、上進立北第四間東面、上宣如式、召使稱退、唯此出南門召之、式部輔代重雅宿禰、大丞藤原泰通、同師信、少丞同廣業、丞代大藏大丞紀孝親、少錄伴季隨、石城文信、錄代圖書大屬秦茂富、大炊少屬飯高舉、兵部權少輔藤原兼親、大丞同孝理、丞代內藏少允同延慶、主計大允御船昌光、織部佐掃守親扶、少錄宇治守信豐、原爲信、錄代陰陽少屬秦文隆、大膳少屬大友忠節等、入自南屏、昇自東廳南壇、入東西戶、式部入自北戶、兵部入自南戶、各列立床子後、兩輔立、丞錄各一人相交、次二省々掌率選人等、各在省官後、于時宣命使少納言伊賴、入自西廳中間、進到東廂角砌上揖、北折經西廊、登到正廳坤角砌上揖、南折進到第四間而立、此上卿以宣制一段、選人等再拜、又宣制舞蹈了、宣命使退出、如入儀、次二省輔以下著床子、但二省各丞一人、相交替、次兩省史生捧位記管、到錄後置床子、退還戶外、次

宣制

位記ヲ讀ム

二省錄共跪、捧笏開管、取位記立遞讀申、省掌稱唯、選使稱唯跪受之、錄相跪授之、并居床子了、錄各覆管、史生各入進、共取管退出、次輔丞錄以下退出、次上卿出自後戶、各著雨具、依及晚景、不著侍從所、自待賢門退出、依雨儀不奉仕御前、即少納言一人外記率史生等、令覽御印、歸局如恆、

○位記請印延引ノコト、四月十三日ノ條ニ見ユ、

二十日、辛丑、官奏、是日、左大臣道長病ム、

〔御堂關白記〕一 五月廿日、辛丑、奉仕官奏、此間心神不宜退出、前後不覺惱、

廿五日、丙午、心地宜出西方、

二十三日、辰甲、陣定ヲ行ヒ、賑給使及ビ臨時仁王會ノコトヲ議ス、

〔本朝世紀〕五月廿三日、辰甲、略、○午後右大臣、中納言藤原實資卿、參議同齊

信朝臣、源俊賢朝臣、內裏參入、著左仗座、被定賑給使并臨時仁王會等事、戌刻各退出、

○臨時仁王會ヲ行フコト、七月二十二日ノ條ニ見ユ、

左大臣道長、修善ヲ行フ、

〔御堂關白記〕一 五月廿三日、辰甲、從今夜初修善權僧正、番僧十口、

長保元年五月二十日、二十三日

番僧十口

長保元年五月二十九日

四五〇

卅日、辛亥、今日修善結願也、而今七箇日延、夕方大雨降、

二十九日、庚戌、内文請印、

〔本朝世紀〕五月廿九日、庚戌、中納言藤原時光卿、參議同公任卿、左大辨同忠輔朝臣著廳座、先令覽内文、次聽尋常政印之後、著南移著左仗座、又内文有請印之事、無他事、酉刻退出、

六月壬子朔

一日、壬子、春日社及比興福寺、祈禱ノ卷數ヲ左大臣道長ニ贈ル、

〔御堂關白記〕一 六月一日、壬子、雨下、山科寺并春日祈卷數持來、

三日、甲寅、明法博士兼左衛門權佐令宗允亮、私第二於テ、令ヲ講ズ、

〔日本紀略〕院一條 六月某日、左衛門權佐宗允亮講令賦詩、

〔本朝麗藻〕法下部 七言、夏日於左監門宗次將宗允亮文亭、聽講令詩一首并序、

江以言

詩ヲ賦ス
大江以言
ノ詩序

本邦法令
ノ由來

近世講令
ノコト廢ル

夫法令之興、其義遠矣、五祇含而裁成、萬靈稟而鎔範、順之者安、逆之者危、秦皇帝之慘虐、繁文酷秋、茶之霜、漢高祖之寬仁、三章垂春竹之露、誠乃政教之門戶、理亂之樞機者也、我國家上自推古之聖朝、下迄養老之寶曆、上下三四代之間、增損屢悛、章條數十篇之裏、修撰甫就、以安四海之波瀾、以定一天之防禦、是以或聖主降勅、促披講於宸位之前、或賢臣專精、受奧義於南面之下、近世以降、編竹不開、童蒙之煙漸暗、帶草欲朽、師說之風無傳、次將累一家之風葉、宣五代之雲英、才德掩古、正軌躅於左車之塵、敏思照今、馭銜勒於右馬之水、於是欲令之必行、傷學之不講、掃幕下而開大座、飭座上而競分陰、遂命御史藤少丞、講誦斯

長保元年六月一日 三日

四五一

參會者多

長保元年六月九日

四五二

文焉、如鐘鼓之在懸、叩而有音、似刀劍之出剗、割而無滯、當于斯時、生徒發問之者、朱紫提耳之倫、飛軒高蓋、風吹于公之門、義實文華、水淡君子之席、於戲不登泰山者、不知天之高、不臨深谷者、不知地之厚、若今日不預此座者、豈知令典之爲大矣、于時長保元年六月三日、○三日、本朝文、禮部侍郎以言、披三尺而初學、推一寸而愁記云爾、

講席偶牽儒學中、數篇法令聽于公、撫民基趾、開東閣、體國權輿、出上宮、三尺竹疎隆、漢露萬方、草動有虞風、猶歡結契、弟兄義、得使多年深意通、

九日、庚申、作文、管絃ノ御遊アリ、

〔日本紀略〕院一條 六月九日、庚申、有守三尸之御遊、

道長以下
參入

〔本朝世紀〕道長 六月九日、庚申、午後左大臣、參議藤原忠輔朝臣、同齊信朝臣參入、有御庚申事、依候終夜、

〔御堂關白記〕一 六月九日、庚申、內有御庚申、有作文管絃、女方入菓子紙等、

大江匡衡
ノ詩序

〔本朝文粹〕八 序 甲 時 節 夏夜守庚申侍清涼殿、同賦避暑對水石應製、

江匡衡

夫人情者聖王之田也、世治則學稼自茂、樂曲者明時之玩也、政調則德音遍聞、

延喜ノ舊
儀ヲ傳フ

我后莅民以來、學官逢時、樂署得所、日慎一日、盡傳延喜之舊儀、風罷三風、已開長保之寶曆、於是守庚申而不廢、延齡之術、賞佳辰而不忘、樂善之心、繞日夢月之家、冠青雲以從事、左龍右貂之輩、履丹霞而承恩、方今避林鍾之炎暑、對殿庭之水石、班婕妤團雪之扇、代岸風以長忘、燕昭王招涼之珠、當沙月而自得、至夫池蓮張蓋、砌苔展茵、誰問月燈閣之亭々、昇降目眩、亦嫌風穴山之遠々、往返蹤慵者也、于時夜燭頻報、晨光欲明、酌黃軒之酒泉、獻千歲於我后、開紫庭之詩席、快一日於群臣、昔鄧禹若不謁光武、徒爲南陽之掾吏、今匡衡若不逢好文、豈爲北闕之侍臣、謬記勝事、謂時人何云爾、謹序、

十日、辛酉、御體御卜、

〔日本紀略〕院一條 六月十日、辛酉、御體御卜、

〔本朝世紀〕院一條 六月十日、辛酉、○中有御體御卜事、而依上卿不參、仍付內侍、

十一日、壬戌、月次祭、神今食、

〔日本紀略〕院一條 六月十一日、壬戌、月次、神今食、

〔本朝世紀〕院一條 六月十日、辛酉、○中今日月次祭、神今食、

十一日、壬戌、今日月次、神今食、祭也、而無御出、仍被付諸司行之、子細在別日記、

長保元年六月十日 十一日

四五三

出御ナシ

上卿不參

陰陽寮日ヲ擇ブ

十二日、癸亥、大祓、

〔本朝世紀〕六月十二日、癸亥、略中而陰陽寮擇申進大祓事可行日時、仍行之、

子細在別日記、

十四日、丑、內裏燒亡ス、仍リテ、太政官廳ニ遷御アラセラル、東宮、亦同所ニ移リ給フ、

修理職ヨリ發火ス

〔日本紀略〕

院一條

六月十四日、乙丑、亥刻、內裏燒亡、件火、事出自修理職也、天皇駕腰輿、行幸大極殿、暫御小安殿、即渡御太政官、東宮同移御此所、

〔本朝世紀〕

六月十四日、乙丑、

○中略、祇園天神祭、此間今夜亥刻許、從修理職

職御曹司ニ行幸

內造木屋發火災、內裏悉以燒亡、子後天皇乘腰輿、指左兵衛陣御出、經左衛門陣頭、著職御曹司、幸間、（兼左）左大臣乍騎馬、自陽明門馳入天皇御所、馳對下馬、被奏云、職御曹司者是火末、御座有事恐歟、八省大極殿之間、可被行幸由奏了、仍返

小安殿ニ御少憩

向八省行大極殿之間、可被行幸由奏了、仍返向八省、行幸、暫逗留小安殿間、諸卿或者心神不宜參入、或者不知爲方遲參、于時左大臣、左大史多米朝臣國平

太政官ノ裝束

被仰云、可御天皇太政官、早令奉仕御裝束者、隨國平朝臣、官掌等召仰云、依有事急速、（付）仰掃部寮、早官掌等走向太政官、須內奉仕御裝束、隨官掌等太政官

武官ノ警衛

女官等ノ狼狽

外記局ノ出文書ノ運

御印鈴鑑ニ移ス

走向、奉仕御裝束、官掌等還向、申御裝束、由、爰大外記滋野朝臣善言、召主殿寮官人等、須臾寄御輿奏此由、于時天皇乘輿、八省院從東廊南行幸著太政官北門、寄御輿朝所、次開所々雜舍等、候諸卿并殿上人、于時右大將藤原道綱卿、奉尋求春宮坊御所、此間御縫殿寮、子刻許移渡太政官、于時天皇御在所以東舍爲春宮御所了、此間伴官東門左右掖立五丈幄二字、爲左衛門、左兵衛陣、西門外北南掖立二丈幄、爲右衛門、右兵衛等陣朝所、西門左右各立一丈幄、張左右近衛陣、候中少將以下終夜、而間本宮右近衛陣外中院內之間、上下女官等、不知爲方、立躁動如雲、爰件火末、付左衛門陣屋前局廳并雜舍等、上登使部、且運出雜文等、東釜殿邊、又外記車等引向局門、積文書引出櫛司小道許、然俄東風出來、吹返火末、仍不付局、可謂之靈所、

十五日、丙寅、天晴、略○中御天皇太政官朝所、因之諸卿候終夜、辰一刻、召大外記滋野朝臣善言、宗岳爲成等、令局引勘件年々日記、且差按算進庭上、此間右大辨藤原行成朝臣召外記、于時大外記宗岳爲成進陣頭、行成朝臣仰云、召監物主鈴鑑等、臨御印之イ所加實檢、可令運納外記局者、外記爲成奉此由、還局、以司人召鈴鑑等、但外記爲成者、依有所勞退出、仍□一刻、權少外記清科保重、相替

長保元年六月十四日

四五六

行成等燒跡ヲ見ル

中宮入内ニ依リ燒亡ストノ

新羅明神ノ崇トノ

臨御印之所加實檢諸司與共令運納局訖各退出、

〔權記〕八月六日丙辰、源中將、經（經房）、藤中將、實（實成）來臨、同車向紫野馬場、權中將（成得）、同

來、次向桃園、次入宮中、見燒處、歸宅、又參内宿侍、

十八日戊辰、（天行基）江學士來語次云、白馬寺尼入宮、唐杣（唐杣）已之由、思皇后入内、々

火之事、引舊事歟、

〔東寺長者補任〕一 長保元年（已）六月十四日、内裏燒亡、經十八年、

〔新羅明神記〕中 一條院御宇、（中）長保元年六月、大内燒失、（中）陰陽博士

勘文云、園城寺新羅明神御祟云々、

○百練抄、扶桑略記、歷代編年集成、迎陽記等、異事ナキヲ以テ略ス、一條

大宮院ニ遷御アラセラル、コト及ビ東宮修理職ニ移御シ給フコト、

本月十六日ノ條ニ、内裏燒亡ニ依リテ、御トヲ行ハシムルコト、同二十

七日ノ條ニ、造内裏定ノコト、七月十一日ノ條ニ見ユ、

祇園御靈會、外記政、是日、檢非違使ヲシテ、御靈會ノ雜藝法師ヲ追捕セシム、

〔本朝世紀〕六月十四日、乙丑、中納言平惟仲卿、參議藤原忠輔朝臣著廳座聽

申文ナシ

無骨法師

大嘗會ノ

標ニ似タ

ルモノヲ

造リテ社

頭ヲ渡ス

天神忿怒

官政及ビ

廳政ナシ

廢務

政、無申文、畢移著侍從所座、事訖著左仗座、（中）但今日祇園天神會也、而自去

年京中有雜藝者、是則法師形也、□世謂無骨實名者、（賴信、世間）等者、伴法師等、

爲令京中之人見物、造材擬渡彼社頭、而如云々者、伴材作法、宛如引大嘗會之

標、仍令聞食左大臣此由、驚被下停止之宣旨、隨召仰檢非違使、奉此由、檢非違

使馳向彼無骨所、擬追捕之間、伴無骨法師等、在前間云々、逃去已了、爰檢非違

使空以還向、且令申彼社頭無骨材停止之由、于時天神大忿怒、自禮盤祝師僧

躑躅、即付邊下人作託宣云々、

〔清解眼抄〕凶事 内裡燒亡後忽不行政事、

長保元年六月十四日夜、内裡燒亡、仍無官政并廳政、

○十二日及ビ十八日以後、外記政ノコト、便宜左ニ合敘ス、

〔本朝世紀〕六月十二日、癸亥、今日休也、

十五日、丙寅、天晴、依去夜内裏燒亡、無尋常政、

十六日、丁卯、天晴、内裏燒亡、仍無尋常政、

十七日、戊辰、天晴、依内裏燒亡、無尋常政、即廢務、

十八日、己巳、天晴、休日也、而依不始政、

長保元年六月十四日

四五七

十九日、庚午、天晴、無政、
廿九日、庚辰、天晴、休也、

十六日、丁卯、太政官廳ヨリ、一條大宮院ニ遷御アラセラル、東宮、亦同所ヨリ修理職ニ移御シ給フ、

〔日本紀略〕院一條 六月十六日、丁卯、今日天皇渡御一條大宮院、○宮内省圖書寮本清少

納言枕草子旁註、百練抄同ジ、

〔本朝世紀〕（顯光） 六月十六日、丁卯、天晴、○中 天皇從官司、御一條女院諸司供奉如

常、午後左大臣、右大臣、內大臣、大納言源時中卿、藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、中納言同實資卿、同時光卿、平惟仲卿、參議菅原輔正卿、藤原公任卿、同忠輔朝臣、源俊賢朝臣等也、殿上大辨官、皆悉供奉、西四刻寄御輿奉乘幸、出從官東門北、從陽明門御出、從大宮大路北、當左右陣張、彼院西御門入給、寢殿南御橋寄御輿、于時諸卿侍從、御前列立、北面東上、天皇入給之後、諸卿始著右近陣座、行幸之後、御印鈴鎰等、從局令持左右衛士十人、運置彼院西中門內北掖、少納言藤原朝臣朝典、權少外記清科保重、大監物橋輔兼朝臣鈴奏、（小槻）奉親鎰奏、□安近衛府生一人等具監送、左大臣宿候、自餘卿退出、亥刻、東宮從官司、御修理大

御印鈴鎰ヲ移ス

供奉ノ人々

院内ノ修造

權僧正觀修之ヲ勤ム

宣旨

夫曹司、即供奉左兵衛佐藤原雅道朝臣、尉橋斯忠、志佐太能近、府生槻本勝枝、番長以下兵衛廿人、率左右陣列前行、大夫以下供奉如常、右兵衛佐藤重尹朝臣、少尉藤考蕃、大志坂田兼平、府生凡得平、番長以下兵衛廿人、率從陣行、十九日、庚午、天晴、○中 彼院內造修理職、木工寮、內匠寮以下、唯行作事、

〔參考〕

〔拾芥抄〕中末百官部 修理職、令外大宮東、陽明門大路南

○太政官廳ニ遷御アラセラレ、東宮、亦同所ニ移リ給フコト、本月十四日ノ條ニ、內裏北對ニ遷御アラセラレ、東宮、東三條院ニ移御アラセラ

ル、コト、七月八日ノ條ニ見ユ、

職曹司ニ於テ、御修法ヲ行フ、

〔本朝世紀〕六月十六日、丁卯、天晴、○中 此日始被修山僧正於職司御修法、

十八日、巳、相撲ヲ停ム、

〔日本紀略〕院一條 六月十八日、己巳、仰相撲可停止之由、

〔本朝世紀〕六月十八日、己巳、天晴、○中略、公卿陣座ニ著スルコトニ於里第、大外記滋野朝臣善言召、被仰可停止相撲之由宣旨、即陣參、召仰左近將曹身

入部仲重等、上卿西刻各退出、

二十五日、丙子陣定ヲ行ヒ、奉幣使及ビ大祓ノコトヲ議ス、

〔本朝世紀〕六月廿五日、丙子朝間天晴、午後天陰、間々雨降、右大臣、大納言藤

原道綱卿、參議同公任卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、源俊賢朝臣、參入内裏、著右
仗座、被定今月廿八日可立奉幣使事、并大祓被行、在別日記、

○十日以後、公卿陣座ニ著スルコト、便宜左ニ合致ス、

〔本朝世紀〕六月十日、辛酉、參議藤原齊信朝臣、著左衛門陣座、而上卿不參、仍
無政、

十四日、乙丑、中納言平惟仲卿、參議藤原忠輔朝臣、○中略、外記政ノカ、ル、著左仗座、
午後右大臣參入、著同座、然而無殊事退出、

十七日、戊辰、午後權大納言藤原懷忠卿、中納言藤原實資卿、參議同誠信卿、同
公任卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、源俊賢朝臣、參入内裏、無事退出、

十八日、己巳、天晴、○中略、午後右大臣、（公季）内大臣、中納言平惟仲卿參入、著右仗座、

十九日、庚午、天晴、○中略、午後參議菅原輔正卿、藤原忠輔卿、源俊賢朝臣、内裏參
入、著右仗座、無事各退出、

上卿不參

廿日、辛未、天晴、午後内大臣、參議藤原誠信卿、同忠輔朝臣、同齊信朝臣、參入内
裏、著右仗座、酉刻各退出、

廿一日、壬申、天晴、午後右大臣、大納言藤原道綱卿、權大納言同懷忠卿、中納言
同時光卿、參議同忠輔朝臣參入、著右仗座、次殿上侍給、無事各退出、

廿二日、癸酉、天陰、間々雨降、午後中納言藤原實資卿、參議藤原誠信卿、同公任
卿、源俊賢朝臣參入内裏、著右仗座、次殿上參、各退出、

廿三日、甲戌、朝間天陰、間々雨降、午後右大臣、權大納言藤原懷忠卿、參議同齊
信朝臣、源俊賢朝臣參入内裏、著右仗座、次殿上、各退出、

二十七日、寅、戊内裏燒亡ニ依リテ、御トヲ行ハシム、尋テ、大神宮以下九社ニ
奉幣ス、

〔日本紀略〕院一條六月廿七日、戊寅、御ト、依内裏燒亡也、

廿八日、己卯、被發遣伊勢以下九社奉幣使、依内裏燒亡御ト成祟也、

〔本朝世紀〕六月廿七日、戊寅、天晴、（顯光）右大臣於里第、大外記滋野朝臣善言召被

仰、右馬寮警固使、以內膳正忠幹王、明日伊勢奉幣使、令勤仕、警固付本寮、令勤
者、大外記參局、左馬（兼）醫師調吉、近召仰、依左大臣宣、寮警固使、以忠幹王、明日

伊勢奉幣
使ノ警固

崇ニ依ル

長保元年六月二十七日

四六二

官寮ノ官
人ヲ召ス
勘申
崇ヲ爲ス
諸社

慶滋爲政
宣命ヲ作
ル

儀式常ノ
宣命ヲ賜
如シ

伊勢幣使差遣、至于警固、可勤仕本寮、午後右大臣（公季）、中納言藤原實資卿、參議同公任卿、同忠輔朝臣、內裏參入、著右仗座、權少外記清科保重、召被仰神、祇官人、陰陽官人等、召可御占申仰者、遣召彼司々官人等、即陣參、于時申參由、上卿內裏燒亡何祟、曾止占申被仰、仍勘申、辰午未方大神祟也、上卿其由進殿、上令奏御、仰給彼方々大神著勘申、上卿還著陣仰、此由、隨又勘申、大原野、春日、住吉、祇園社等也、依先日被定奉幣使、可被立社五所也、而依今日占、可被加立、今四所、其社大原野、春日、住吉、祇園者、諸卿酉四刻退出、中納言藤原實資卿、明日奉幣使依被行、陣留給、夜仍召主殿官人、令進御火、其後召內記、申故障不參、外記慶滋爲政、召明日奉幣使宣命、作由被仰、承其由宣命、作、令覽上卿、覽了、令持外記、上卿進殿、上奏、還著陣、被請料紙、可書儲、及子刻退出、

廿八日、己卯、天晴、中納言藤原實資卿、參議菅原輔正卿、藤原忠輔朝臣、同齊信朝臣、先參內裏、移著於八省、依內裏燒亡、爲慎給被立奉幣使、其社九所、伊勢、石茂、松尾、平野、大原、春日、住吉、祇園、諸司裝束如常被行、上中納言藤原實資卿、右中辨源道方朝臣、大外記善言朝臣、少外記爲政、權少外記保重、右少史久政、史生官掌召使等共參、儀式如常、次第使々召宣命給、退出、各參了、內記不參、仍以少外記爲政、令

内記不參

勤内記役、申四刻退出、

○内裏燒亡ノコト、本月十四日ノ條ニ見ユ、

二十九日、庚辰、大祓、

〔日本紀略〕院一條 六月廿九日、庚辰、大祓、

〔本朝世紀〕六月廿九日、庚辰、天晴、○中有大祓云々、

長保元年六月二十九日

四六三

長保元年七月一日 二日

七月 辛巳朔 盡

四六四

一日、辛巳東三條院、左大臣道長ノ土御門第二遷御アラセラル、

〔權記〕七月一日、略中丑刻院遷御左大臣土御門第、

二日、早朝與大藏卿同車參院、正光次參左府、登子略中次亦參院、

二日、壬午内膳司ノ御竈神ヲ一條院ニ渡シ奉ル、

〔日本紀略〕院一條七月二日、壬午、奉渡御竈神於一條院、

〔小右記〕七月一日、辛巳、内豎來、仰可早參由、即藏人辨道方朝臣仰者、彼辨注

書狀云、明日内膳御竈神奉移事可行、今日有障不可參者、且奉給旨之由、令申

了、召大外記善言朝臣、仰明日供奉人々、及六衛府陣事等、史宮主事示遣藏人

辨、

二日、壬午、略中日入間參内、以藏人辨令奏事由、仰云、今日可奉移御竈神、其事

可行者、召外記善言朝臣、問六衛府候不、申云、悉參入者、余問云、佐若候乎、申云、

見年々日記、供奉判官以下者、此間戊一點、相率辨、少納言、外記史等、入自上東

門、經朔平門向内膳司、諸衛祇候、先以宮主令奉仕御被、成二其後奉迎御竈神、

至三所、忌火、庭火、平野、天元三年日記云、六衛府左右陣列其中央、奉荷御竈神、宮

供奉ノ人
御經路

院ノ乾舎
ルニ移シ奉

主奉膳典膳相從、上卿以下候後列、入自院西門、奉移院乾舎、今日新了以宮主

又令御被、上卿以下於兩所不著座、只六便所、御被了退出、

○御竈神平野ノ社殿ヲ造立セシムルコト、長德三年三月二十一日ノ

條ニ、内裏燒亡ノコト、六月十四日ノ條ニ見ユ、

法興院ニ於テ、故關白兼家ノ法會ヲ行フ、

〔小右記〕七月二日、壬午、參法興院故入道殿御忌日、候也民部卿藤中納言、時光式部大

輔、兼家左右衛門督、中輔左大辨宰相、兼家中將、源宰相同參、講說之後有行香、左衛門督宰相

中將卷纓、右衛門督不卷纓、此間不同、警固之間、非參議人卷纓向所々、示有兩

說、上達部向他所之時不卷纓、以右金吾爲是、實意余行香了即出、

〔權記〕七月二日、略中未刻許、詣法興院、

○兼家ノ薨ズルコト、正曆元年七月二日ノ條ニ見ユ、

三日、癸未檢非違使ヲシテ、藏人所小舍人安重姓調ト、内藏寮下部トノ鬪争ノ

コトヲ勘糺セシム、

〔權記〕七月三日、略中内藏寮下部、自去夕爲下給獄所、令召問右衛門陣云々、

尋問其由、賴貞所、賴貞云、御湯殿衾料手作布、日者雖令召内藏寮、々官人申左

長保元年七月三日

四六五

參會ノ人
講說
行香

寮ノ官人
御湯殿衾
料手作布

ヲ進メズ
寮屬利成
召ニ應ゼ
寮ノ下部
拔刀ス

長保元年七月三日

四六六

右之由、于今不進之間、去夕有指仰、遣召屬利成、而使小舍人清武歸來申云、利成只陳有所勞之由、不詳申參不之由、仍妻女爲令承案内、差寮下部令參、即賴貞慥仰含事由、差加清武、安重等遣之間、清武走歸申云、安重與寮下部小論、下部拔刀、仍爲令申此由、直歸參也者、登時亦安重參來申、下部爲罷逃、成放言拔劔之間、安重抱下部、々々立劔、其劔即從者取去者、（道長）件事去夕内難決云々、仰云、寮下部拔刀事、尤可誠、但二人小舍人所申各不同、加之拔刀事實否、慥難決、須奏事由、又申（道長）左府相共下給獄所、令勘糺其真僞歟、偏以小舍人所申、不可爲實誠、又暗夜拔刀之事、甚非常、（道長）相定之間、可給檢非違使也、晚景左府參給、即申件事、命云、小舍人所申雖不可疑、諸司下部無由不可拔刀、若依小舍人致苛法、中途譴責爲遁其事所爲歟、若無所責、只拔刀歟、若無所責、只拔者、下部可有其罪、若小舍人以無實事申、々々者亦可誠、小舍人惣共令勘糺、可知實僞也、近日如此殊加優恕、能誠仰事由、可免給者、即仰賴貞、

修理大夫平親信及ビ權左中辨藤原說孝ニ昇殿ヲ聽ス、

評實資ノ批

〔小右記〕七月四日、甲申、昨、修理大夫親信、權左中辨、說孝、被聽昇殿云々、數外、〔權記〕七月三日、（道長）申刻依召候御前、仰云、修理大夫親信朝臣、權左中辨、說

道長ノ意見

孝朝臣可聽昇殿、即仰出納如時、

四日、（道長）廣瀨、龍田祭、

〔日本紀略〕（道長）院一條 七月四日、甲申、廣瀨、龍田祭、

五日、（道長）東三條院御讀經結願、

〔小右記〕七月五日、乙酉、參女院、々人云、今日御讀經結願、式部大夫輔（正殿）同參、見

氣色似不可早也、仍式部大輔相共參内、左衛門督、源相公同參、少選歸參院、右

大將、式部大輔、左衛門督、左大辨、源宰相祇候、行香後、左府被參、晚頭各々退出、

○御讀經初ノ日、詳ナラズ、

七日、（道長）乞巧奠、北斗供結願、

〔權記〕七月七日、（道長）今夕乞巧祭、於南殿北對、仰行事、藏人廣業、覺緣於般若

寺奉仕、夏季北斗供結願也、仍行事、則隆赴彼寺、

○北斗供始ノ日、詳ナラズ、

八日、（道長）大殿祭、御讀經、御物忌、是日、内裏北對ニ遷御アラセラル、

〔日本紀略〕（道長）院一條 七月八日、戊子、御讀經結願、今夜渡御北對、

〔小右記〕七月七日、丁亥、（道長）内豎來云、明日御讀經發願、可參籠御物忌者、同

長保元年七月四日 五日 七日 八日

四六七

結願

覺緣般若
寺ニテ乞
巧奠ヲ奉
仕ス

結願

解陣

令申有所勞由、
八日、戊子、今日於北殿有御讀經、早旦發願、晚頭結願、申刻依可渡御北殿云々、
有方忌者、夜令違給云々、今日御物忌云々、御物忌間、令移他殿如何、
十一日、辛卯、略今夜解陣、後日同右大臣行之三府參例、召仰三府不具、仍外
記仰之、三府不具時、召仰例殊不聞、

〔權記〕七月一日、參內、明日可遷北對之事、延引來八日、候宿、

二十一
寺ヲシテ
御誦ヲテ
奉仕セシ
ム

六日、罷出詣左府命云、今日於陣、定申明後日可渡御北對以前、御讀經僧名等
了、廿口、自明日三箇日間、御誦經可令奉仕、廿一寺事、仰廣業、亦明後日御裝束
事、同仰了、彼日大殿祭事、可仰權左中辨者、翌日又詣藤相公御許、
參

御方違
西對北庇
ヲ女御ノ
御曹ト
ス

七日、爲御方違、可御東對、其御裝束事仰泰通、略西對北庇可爲女御達御曹
司之事、奉仰事、略此夜移御東對、御達方也、

朝夕二座

八日、已刻於北對有御讀經事、僧綱四口、凡僧十六口、槌鐘後近衛出居、卿相參
上、僧侶次之、朝夕二座共有行香、修理已了、欲遷御也、御帳、御厨子等事泰通、御
裝束、鋪設御座等事、兼宣御簾事、廣業、御障子等事、實房、御讀經事、則隆、御裝束

渡御

祿ヲ給ス

饗

吉書始

名對面

所衆等奉仕、仰廣業令奉仕、廿一箇寺御誦、賴貞依重服不令行、此間之事、廣業
畫鬼問薄白詔王形、略中神祇官供御殿祭、申二刻渡御、自去夕御東對道經南殿
乾角戶、右中將實成候御劔、少將兼隆候御篔、晴明上反閉了給祿、疋絹、左大
臣、內大臣、宰相中將、源宰相被祇候、左大辨御讀經之後退出了、自去日至于明
日、御物忌也、殿上饗內藏寮、女房衝重卅前穀倉院、今日依吉日、移御後、
美濃國率分次下左大臣、々々下給權辨、々々昇殿之後、何吉書次供朝
膳、余陪膳、宿待名對面燒亡以後、今日初有此事也、
廿一日、早朝參內、略仰云、女御二人曹司以西對北西庇、可給之、
廿五日、早朝參內、略依有方忌、不籠御物忌、罷出、

〔字槐記抄〕上 久安三年六月十七日、略藏人頭ヲ補、不付殿上簡事

藏人所別當、可付殿上簡之由、見寬平遺誠、而勘小一條大臣、師尹、康保四年十二月、御堂、
長保元年、京極殿、治曆四年六月、此三日、日記、不記付簡之由、
年七月、京極殿、人皆藏人所別當、

○御誦誦ノコト及ビ二十五日御物忌ノコト、便宜合敘ス、一條大宮院
ニ遷御アラセラル、コト、六月十六日ノ條ニ見ユ、

皇后、修理職ヨリ、東三條院ニ移御アラセラル、

〔日本紀略〕院一條 七月八日、戊子、中今日皇后宮從修理職、渡御東三條院、

東宮、東三條院ニ移御アラセラル、

〔小右記〕 七月七日、丁亥、春宮屬良久正云、明日可移御東三條、可扈從行啓者、

令申有所勞不可候之由、

八日、戊子、中自青宮被廻仰云、馬一疋酉刻以前可奉者、同奉令旨了、但可加

調鞍之由、重有仰事、

九日、己丑、源相公云、昨日行啓、大夫藤中納言、宰相中將等扈從、大夫將、大不帶

弓箭、初度帶之、自太政官、田行、似違一定、相公又談云、左金吾、誠信、著螺鈿釵、人

人嘲哂云々、

○東宮修理職ニ移御ノコト、六月十六日ノ條ニ見ユ、

中納言平惟仲、病ニ依リテ、中宮大夫ヲ辭ス、

〔公卿補任〕六 中納言從三位平惟仲 七月八日、辭大夫、

〔小右記〕 七月二日、壬午、中中宮大夫惟仲依病上辭中宮大夫之表云々、

〔權記〕 七月二日、中參内、外記爲政持來平中納言辭中宮大夫狀、即奏、候宿、

三日、候御前、被仰平朝臣辭中宮大夫狀、

恩許アリ

停任ノ宣旨

藤原成房病ム

別當藤原公任ニ命ジ給フ

内膳司ノ愁

藤原爲元詔使ニ對捍ス

八日、中右少辨致書傳平納言消息云、先日所獻中宮大夫辭狀、有恩許之由、

所傳承也、被停任宣旨之間、本宮文書等持來、然而獻辭狀、不可加

署、況承恩許之由、加之沈痾不能與奪職務、早奏案内可下停任宣旨、即申左府、

又奏事由、依勅仰内大臣、

九日、己花山法皇、右近衛少將藤原成房ノ第二御幸アラセラル、

〔權記〕 七月九日、退出參院詣彈正宮、藤相公、華山院、左府、少將俄有所惱、即差

使問退出、赴少將許、華山院御行此宅、少將今朝甚不覺、今間頗宜、湯治驗也云

云、臨夜歸宅、

十日、庚花山法皇、蓮華御園ノコトニ依リ、檢非違使廳ヲシテ、藤原爲元

ヲ召問セシメ給フ、

〔小右記〕 七月十日、庚寅、中華山院以延源被仰、蓮華御園事可傳示右衛門

督、件事有可定廷尉廳之宣旨、

〔權記〕 七月廿六日、晚景依召參華山院、仰云、先日依蓮華園事、乞奏案内、内膳

司以無實愁、檢非違使廳召爲元等之趣也、重示左大臣亦可奏、伴園是先年被

禁斷殺生、給官符四至之内也、別當令奏爲元雖承召由不參入、是對捍詔使者

也云々、即詣左府申雜事、亦參三條宮、奉謁（正殿）僧房、此夜參內、

廿八日、○中次參華山院、申御返事、次詣右府、歸宅參內、宿侍、

十一日、卯、辛陣定ヲ行ヒ、造内裏等ノコトヲ議ス、

〔日本紀略〕院一條 七月十一日、辛卯、定造宮國々行事等、

〔小右記〕七月十日、庚寅、召使云、明日可有陣定、可參入由、有左府命者、答可參入、

十一日、辛卯、參內、（道長、顯光、公季）左右内三府、大納言道綱懷忠、中納言時光、參議懷平、公任、忠

輔、俊賢參入、申刻依召諸卿參御前、其座如除目、左大臣召見年々造宮定文、大

臣執筆、書行事上卿以下、大納言、道綱、參議、齊信、俊賢、權左、中相次定國宛事、左

大辨忠輔、乍本座執筆、依定書之、書訖奉左府、又定申賞有無、僉議云、度々已有

勸賞、就中今般造宮國々計之無利物歟、何無褒賞乎、○中亥刻許退出、○下

〔權記〕七月十一日、參左府、次參內、今日有造宮定、御前裝束、如除目議之儀、左

大臣、依召參上、次右大臣以下有召參上、暫之召紙筆、（左大臣、所）大臣書、別當國平

大臣、持來計廊間數文、（合百九十四間、宜陽門以北、廿八間、西、而陰、明門以南、廿六間、南、

北、廿八間、半、與、木工、修理、職、大小、工、等、令、勘、申、依、仰、召、進、大臣、後、被、支配、諸、國、左、大

道長造宮
定文ヲ覽ル

御賞ノ事

御前ノ裝束

廊ノ間數

御目ヲ惱
ミ給フ

辨書之、相座也、○中之謂、宰大臣以下退於殿上、左大臣以定文等給權左中辨說

孝朝臣、別當大納言藤原朝道、綱參議藤原朝臣齊信、源朝臣俊賢、（以上）行事權

左中辨藤原朝臣說孝、右中辨源朝臣道方、右大史文守永美、麻那延政、（以上）

○内裏燒亡ノコト、六月十四日ノ條ニ見ユ、

太皇太后、御神樂ヲ行ヒ給フ、

〔小右記〕七月十一日、辛卯、○中宮有御神樂云々、去月被行例御神樂、有其祟、

惱給御目、仍重所被行、召御前云々、

大宰府、白蓮ノ一莖、二花開ク由ヲ奏ス、

〔日本紀略〕院一條 七月十一日、辛卯、○中今日大宰府申一莖二花白蓮、

〔百練抄〕一條院 七月十一日、大宰府言上一莖二花蓮花開之由、

十二日、辰、壬花山法皇、中納言藤原實資ヲシテ、院ノ事ヲ行ハシメ給フ、

〔小右記〕七月十二日、壬辰、參宮少選祇候、參花山院、良久候御前院事一向可

行之由有仰、黃昏罷出、

廿九日、己酉、參華山院、良久候御前、相續參內、即退出、參宮、

十三日、巳、癸施米ノコトヲ定ム、

長保元年七月十五日

四七四

有供ノ寺
ニハ施サ
ズ

施米文ヲ
奏ス

〔權記〕七月十三日、參内、中略左大臣於陣被定申施米事、左大辨雖參退出了、行成仍余著床子、見施米目錄并山々文、有供寺不入陣官告召由、即參候膝突、被問施米文具否由、申具候之由、依有氣色就座而領、史守永捧筥進之、大臣座前大臣一見之後、前差令右中辨奏之、奏覽了返給、大臣目、仍令官人召史罷筥、大臣仰云、先々使有不如法之事云々、此度殊差副史、慥令給進座、仰國平朝臣仰國平朝臣、十五日、未乙檢非違使別當宣ヲ下シ、看督長及ビ前大和掾正忠姓關ヲシテ、犯人藤原行時ヲ捕進セシム、

〔北山抄裏文書〕

公輝三條所藏

案

被別當宣傳、犯人藤原行時、籠置前大和掾、正忠許者、仍令召進其身之處、正忠今月十四日、申文傳、伴犯人藤原行時、居住紀伊國伊都、彼國追捕使坂上重方宅垣内丑寅角、令住從者内藏正木屋之由、今月九日内、惟光申送、差副督長於正忠、令捕進件行時、若猶無進事、處同意者、以正忠重方等、令申其辨者、

長保元年七月十五日

左衛門權少尉安倍信行

行時使紀伊
追捕使坂上
重方ノ家
從者ノ家
ニ隱ル

御齒痛

御祭日時
勤申

十六日、申丙御惱ニ依リテ、土御門第競馬ヲ停ム、

〔權記〕

七月十六日、土御門殿有競馬事云々、所惱頗平愈、仍詣向、然而依有主上御惱之聞、御齒停止、丞相參給、候御共、即遣晴明朝臣問御齒事、御占之趣無咎、令勘申御祭之日時、申左府付右中辨、白地罷出、亦參、

十八日、戊淡路百姓ノ愁訴ニ依リテ、守讚岐扶範ヲ訊問セシム、尋テ、扶範ヲ罷メ、平久佐ヲ淡路守ト爲ス、

〔小右記〕

七月十八日、戊戌、因國民愁、可問淡路守扶範之由、一昨被下宣旨云々、

九月廿五日、甲辰、中略、京官除目、淡路守平久佐、愁、扶範、依州民

〔日本紀略〕

九月廿四日、癸卯、中略今日依淡路國百姓愁申、守讚岐扶範解任、前司平朝臣久佐任其替、

〔御堂關白記〕

九月廿四日、癸卯、除目了、此間依淡路國百生愁、守扶範於官問日記、令諸卿定申替人、可被任者、此定了間、夜深丑二刻事了、

〔權記〕

十一月九日、戊子、候内、淡路國司申、位祿代可令前司辨申也、未交替之間、新吏以何物濟進乎、前司申、新司被計取之物所封、當年官物也、何濟去年租穀代乎云々、仍奏此由、申旨依有理裁免、即被仰賴貞、

長保元年七月十六日 十八日

四七五

久佐扶範
位祿代
ノト濟進
就キ争フ

十九日、己藏人頭藤原行成、攝津味原御牧司及ビ宋商客會令文、朱仁聰等ノコトヲ、左大臣道長ニ披陳ス、

〔權記〕七月十九日、自内詣左府、此夜半渡坐道（道長）貞朝臣宅、○中申一日宣旨下

牧司ノ申
文
會令文ノ
申文

典藥寮申味原御牧司等申牛事文之案内、又小舍人調爲善所傳獻大宋國商客命文申文、并送爲善許書狀事、是就大宰府可令傳申也、越奏之事乖恆例也、仍申案内畢、可令返遣、退出、詣東院歸宅、雨、

石清水八幡宮ノ申文

廿日、參内、○中八幡宮申、仁聰貢獻於彼宮物使、修行僧捕擲之由文奉左府依有腰痛退出、

〔小右記〕十二月十六日、乙丑、○中宮亮明順依唐人愁、可被召問云々、

中宮亮高階明順ヲ召問セシム

○朱仁聰、若狹守兼隆ヲ凌轢スルコト、長德三年十月二十八日ノ條ニ、曾令文ニ給フ返金ノコト、長德四年是歲ノ條ニ、朱仁聰愁訴ヲ爲スコト、長保二年八月二十四日ノ條ニ見ユ、

二十日、庚民部卿藤原懷忠ヲ大神宮遷宮上卿ニ、右中辨源道方ヲ同遷宮辨下爲ス、

〔權記〕七月廿日、參内、雨、以左丞相令申之旨、奏伊勢大神宮々遷事、可行上卿

并辨等早可被仰下之由仰云、可令民部卿藤原朝臣、右中辨道方行事、即申大臣、

○大神宮遷宮ノコト、二年九月十六日ノ條ニ見ユ、

二十一日、辛出羽貢進ノ臨時交易絹ヲ女房ニ賜フ、

〔權記〕七月七日、○中源典侍傳勅云、故良三位法事可修之由、右近有令申、可給物者、

故良典侍ノ法事料ヲ女藏人右近ニ賜フ
紀伊當年租白米代絹ヲ賜フ

廿日、參内、○中以穀倉院納紀伊國當年租白米代絹十疋、依宣旨付民部典侍、令給右近藏人、故良典侍法事料也

廿日、參内、○中又以出羽所進臨時交易絹、可給女房之由、奉勅命、

廿一日、早朝參内、以交易絹、支配女房、三位六疋、民部大輔、衛門、宮内各五疋、上以

御乳母、進兵衛、右近、源掌侍、靱負掌侍、前掌侍、少將掌侍、馬左京、侍從、右京、駿河、武藏、左衛門、左近、少納言、少輔、内膳、今十九人各四疋、中務、右近、各三疋、女史、命

婦二疋、得選二人各二疋、上刀自一人一疋、

廿二日、參内、以交易絹、支配給女房、

○故良典侍ノ法事料ヲ女藏人右近ニ賜フコト、便宜合致ス、

御乳母

左大臣道長、興福寺喜多院内ニ、新ニ池ヲ穿テ、丘ヲ作ルコトヲ禁ズ、

〔權記〕七月廿一日、略中、依召詣左府、略中、丞相被仰山階寺喜多院内、新穿池

長者宣

眞喜ノ返

作丘事、早可令制止之由、即書長者宣送僧正房、明日付明
八月五日、乙卯、詣左府、申山階僧正返事、去廿一日遣仰事、喜多院穿池作丘、更

非不忠之事、舊池也、然而依恐仰旨、令滿平云々、退出、
二十二日、寅、壬臨時仁王會、是日、陣定ヲ行ヒ、造内裏及ビ前下野守平維衡、

散位同致頼ノ罪科ノコトヲ議ス、

大祓

〔日本紀略〕一條 七月廿日、庚子、依可行仁王會、大祓、

廿二日、壬寅、仁王會、

承光堂

〔小右記〕七月廿三日、二、乙壬寅、今日仁王會、莊嚴承光堂、參内院中莊嚴五ヶ處、殿

天災ニ依
リテ維衡
致テ罪免
科ノ優キ
事ヲ定ヤ
スベキヤ

御在所、東西對中 余源相公候南殿、左右内三相府、大納言時中、道綱、懷忠、參議
懷平、誠信、公任、齊信、俊賢等、候御前、中納言時光、參議忠輔、自八省參入、忠輔候
南殿、日沒講了、於仗頭有定、造内裏所々申請人々事、種々起請事、紙、在別維衡、致
頼等事、維衡等事有天災間、若可優免、歟、可定申者、令儀云、依内裏燒亡事、被優
免犯人者、内裏燒亡可有事、怖、不可被免、由定申了、子刻許種々定了、

會新米

〔權記〕七月十三日、參内、昨日左大臣被奏、略中、又仁王會事、可被催仰之由、仍

今日有仰、召遣民部卿、實皇太后大夫、藤中納言、略中、太宮大夫、藤納言、參

入、奉仰之後、奏仁王會日時、廿二日、廿四日、又堀川院飾殿分事文、又被奏云、會料米

土佐國米五十石、先日雖召申、不堪由、重令催仰之處、國司申云、依召進上半百

八十石内、有召者可進之由者、又美濃所召五十石之内、卅石許者、以明年々料

内可進者、仍令仰察、々申、焚食之國、不充他用、下文者、隨仰可行、仰云、可用廿

二日、紫宸殿分用南殿、仁壽殿分用西對、綾綺殿分用東對、清涼殿分用御中殿、

承明門分用西中門、建禮門分可用西門、并織部司、南門等間、米事左右相計可

行、又下内藏寮申請内匠寮用御燈爐料十三石、余文、即下守永、左府宿侍、

廿二日、略中、此日臨時仁王會也、檢、按、藤中納言、行事

○臨時仁王會ヲ定ムルコト、五月二十三日ノ條ニ、維衡、致頼ノ罪名定

ノコト、五月五日及ビ十二月十五日ノ條ニ、見ユ、内匠寮御燈爐料ノコ

ト、便宜合斂ス、

二十三日、卯、癸内裏燒亡ニ依リテ、山陵使ヲ柏原陵及ビ後村上陵ニ發遣

ス、

大江匡衡
ノ呪願文

〔小右記〕七月十三日癸巳、中內豎來云、頭辨仰備、可參入者、令申有所勞之由、追取案内、告送云、依可被立山陵使、所召遣也者、

十七日丁酉、大外記善言朝臣來云、昨、民部卿定申告內裏燒亡之山陵使云々、廿三日使立、

廿四日癸卯、山陵使立云々、柏原使中納言時光藤原後村上懷平使參議懷平、

〔權記〕七月十三日、參內、昨日左大臣被奏山陵使事、略下

右大辨藤原行成、馬ヲ左大臣道長ニ贈ル、

〔權記〕七月廿一日、中今夕見出羽守義理朝臣所送馬二疋、仰惟弘整遣飼信行宅、

廿三日、日出參內、與權中將相共詣左府、義理所送馬二疋、令覽、一鹿毛即奉獻、略中、昨於馬場、被競鹿毛與揚梅、鹿毛勝三許丈、與權中將參內、候宿、

○八月以後諸人、道長ニ贈物ヲ爲スコト、便宜左ニ合致ス、

〔御堂關白記〕一 八月廿二日、壬申、越後守道經獻馬三疋、自陸奥軍監任料馬二疋、引一疋給爲義、

廿八日、戊寅、自越後介、任料馬二疋牽、

柏原時光
使同懷平

出羽守藤原義成
馬

越後守藤原道經
馬

越後介馬

上野守源賴信
馬

齊家馬

大牛
贈

親牛
贈

源爲憲馬

藤原寧親馬

藤原尙賢馬

藤原安隆牛

源滿正馬

行成柿
贈ル
藤原有國
九穴ノ
贈ル
蛇

九月二日、辛巳、上野守賴信奉馬五疋、一疋田鶴料駒也、

五日、甲申、前駿河守齊家、奉馬二疋、

七日、丙戌、中美作守輔親、獻牛一頭、

十月十一日、庚申、美濃守爲憲、馬二疋獻、

十九日、戊辰、武藏守寧親朝臣獻馬六疋、此間太皇太后宮大夫來、仍一匹志、

十一月九日、戊子、越後守尙賢、馬二疋進、又武藏守寧親一疋進、安波守安隆牛

一頭進、

十二月廿六日、乙亥、滿正朝臣馬十疋進、

〔小右記〕十月十九日、戊辰、中日暮詣左府、略中、退歸之間、武藏守寧親獻馬

六疋於左府、々々招余令見、々了廼出之比、志馬一疋、華手、余執綱末小拜、主人

下立地下、

〔權記〕十月十三日、壬戌、今朝例進柿奉左府了、

廿六日、略中、與藤中將相共參左府、奉謁、大貳奉、上九穴蛇、松浦海夫所取出也

云々、

二十五日、陣定ヲ行ヒ、諸寺別當、諸國司等申請ノ雜事ヲ議ス、

長保元年七月二十五日

四八二

〔小右記〕七月廿四日癸卯（道長）○中召使云、明後日可有定、是左府御消息者、

廿五日乙巳、詣左府（兼任）右衛門督、宰相（兼信）中將同參、主人清談之後、余（實者）右衛門督同車

參內、左府（顯光）右府（公季）內府（道綱）右大將（懷忠）民部卿（時光）藤中納言（兼平）藤宰相（誠信）左衛門督、右衛門督、宰相

中將（後賢）源宰相同參、令議諸寺別當諸國司申請雜事、及子夜各々退出、

〔權記〕七月廿五日、早朝參內、左大臣於陣被定申雜事、

新制十一箇條ヲ下ス、

〔小右記〕七月十一日、辛卯參內（道長）○中次定申佛神事、違禮制美服、行約儉事等、

子細不記、

〔權記〕七月十一日（道長）○中次參內（道長）○中次被定儉約事（道長）○下

廿一日、早朝參內（道長）○中依召詣左府（道長）、依勅可下宣旨禁制事、奉左府子細見目錄、

廿三日（道長）○中昨有十一箇條制亦被改充、

〔新抄格勅符抄〕

太政官符 神祇官

雜事拾壹箇條

一應慎神事違例事、

神事ノ違
例ヲ慎ム

參會ノ諸
卿

神社ノ破
損ヲ禁ズ

一應重禁制神社破損事、

右神社破損其制已重、犯過之輩罪科不輕、弘仁三年五月三日格、有封之社、應令神戶百姓修造之狀、下知已訖、至于無封之神者、宜令禰宜祝部等、永

長保元年七月二十五日

四八三

右檢案內、散齋之內、諸司理事不可違失之狀、載在令條、又太政官延長四年

五月廿七日符、備國大事莫先祭祀、因茲供奉神事、諸司判官一人、專當其事、

可加督察之狀、既在式條、然則供神之物、宜先慎行、而今諸司所行多有違越、

或迫期日（準之）准充代物、或臨當日僅行其料、雖有充行之名、猶少供神之實、如此

違濫積習爲例、左大臣宣奉勅、自今以後、諸祭料物、惣計年中可用之數、諸國

調庸雜物、貢進之日、割納別藏、擇本司並出納諸司官人各一人、差充勾當、令

勤其事、供奉諸司專當官人之事、依式行之、仍須量社遠近、祭日以前、每色充

行、若不勤預事、一物有關、任法科責、不會寬宥者、祭禮之禮務（行力）在潔、闕怠之輩

明立章條、而時世漸久、憲法已緩、或供奉諸司任意懈怠、或禰宜祝部、忌跡疎

略、遂使當日之祭（準之）近及明朝、早旦之□、果臨昏黑、事涉非禮、勤異如在、因之妖

祥荐臻、咎徵不息、尋此所由、崇在神事、左大臣宣奉勅、自今以後、年中神事、分

配上卿及辨官等、慥誠（誠力）仰供奉諸司、必致禮信、依法勤行、

長保元年七月二十五日

四八四

加修造每有小破隨即修之不得延怠令致大破國司每年屢加巡檢若禰宜祝部等不勤修理令致破損者並從解却其有位者即追位記白丁決杖一百國司不存檢校有致破損者遷替之日拘其解由格ヲ以テ類聚三代又延長四年五月廿七日符傳修理神社具在格條爰諸社禰宜祝等不修小破遂致大損是則只待公家之修理不加私功之織芥之所致也自今以後差公使令修理之時禰宜祝部並社預等相共檢知請覆勘文同加署名仍須十年爲限其間小破禰宜祝並社預等即加修理立爲恒例者ヲ以テ政事要略而國掌不守憲章社司無有勤節彌倍頽壞常爲墟蕪或指枯木之下稱祠社カ或排荒野中稱祠空違潔慎之勤動招侮蔑之祟同宣奉勅自今以後國司屢以巡檢令勤修理兼致守護符到之後猶有怠慢之輩加其科責一如先格

佛事ノ違例ヲ禁ズ

一應重禁制佛事違例事

右年中所修諸寺齋會詳存章條不可疎略而每臨會日如忘舊風威儀違於法式莊嚴疎於佛庭是則本寺不事勤修綱所不加督察之所致也就中國忌者分配上卿位ノ慥所可行也爰僅仙位ノ一身之參無勘諸司之怠積習之懈懈緩爲例論之政途豈可然乎同宣奉勅自今以後綱所及諸司若致懈怠處之重科

定額諸寺ノ堂舍破損ヲ修理スベシ

一應慥加修理定額諸寺堂舍破損事

右定額諸寺國司檀越可檢知之由具在格條而猥濫之僧徒或不觸民人暗稱別當爲恐官府強不禁遏或亦囑國司管領寺務爲憚宰吏無加制止因茲只費用田周地利國カ動商捲資財寶物伽藍爲墟莫不因斯同宣奉勅國司檀越慥加檢察可令修理若寺司不致其勤即位ノ解却見任永不預公請

僧侶ノ京中在住及宿ヲ禁ズ

一應重禁制僧侶無故住京及號車宿景舍宅事

右僧侶出入里舍既立嚴科而頃年遠離塔寺多交京師或高門戶以號車宿或構堂舍以安佛像名爲禪念之處實是宴安之淵是以淨域之珠難瑩忍辱之衣易垢私門漸希誦習之聲蘭若空爲放牧之地既少驗於佛法亦不嚴於王法非加禁遏何得歸真同宣奉勅自今以後無故住京僧侶及車宿等一切禁制不得更然若不憚制旨致違犯處之重科曾不寬宥但依公私請觸本寺司出仕之輩不在此限

穢輩ニ觸ルハ禁ズ

一應重禁制無故意觸穢輩事

右忌穢之事自古而存定期限之遠近立甲乙之輕重須守此旨全隨制法而狼藉之者或竊交通烏合之處或恣相觸因茲有限之神事無止之佛事カ當日俄

長保元年七月二十五日

四八五

道俗男女
用美服著
ヲ禁ズ

長保元年七月二十五日

四八六

止、迫期延引、敬神之自過(腕アラン)或日、攘災之勤、還恣崇微、同宣奉勅、公私之間、不觸事由、致之穢之輩、告之有司、重以科處、

一應重禁制男女道俗著美服事、

右衣服之制、明在神護景雲四年格、天曆元年符、○天曆元年十一月三日ノ條參看、而年紀推移、人心驕逸、不辨上下、以綾羅爲身裝、不論公私、以紅紫爲褻服、繇是十家之產、盡於一襟之浮華、數年之貯、糜於半日之眩耀、富者雖品賤僭上、蜉蝣之羽易飭、貧者雖位貴偪下、狐貉之裘難兼、加之城中好袖廣、四方殆疋帛、城中好袴大、四方自准繩、就中諸衛舍人、諸司并院宮家雜色以下人等、不可著細美之布者也、下民之朱愚、好著白越、如此之漸、爲俗之弊、同宣奉勅、美服過差一切禁斷、但袖闊一尺八寸已下、袴廣不及三幅、不可必制止、

一應重禁制以金銀薄泥畫扇火桶及六位用螺鈿鞍事、

右金銀薄泥、不得爲服用、並雜器飾之由、嚴立科條、而比來、多費薄泥、繪扇火桶、質朴之道漸衰、虛華之風、(二カ)扇纔是爲二時之玩、不可爲累世之珍、又資用之物、既有制度、如聞六位以下、恣用螺鈿鞍、鑲金銀而爲飭、錯珠玉而生輝、只任心之所欲、不知身之踰矩、若無制法、何止奢侈、同宣奉勅、如此扇火桶等

袖及袴
ノ制ビ
泥銀ノ
金以薄
泥火桶
扇ヲコ
畫クテ
及ビト
及螺鈿
ノ鞍ヲ
用ルヲ
禁ズ

六位以下
ノ乘車
ヲ禁ズ

之類、所用之人及畫工、隨其違犯、將以論火、

一應重禁制六位以下乘車事、

右太政官寬平六年五月十二日符、偲男女有別、禮敬殊著、而頃年上下惣好乘車、非施新制、何改弊風、(原應)左大臣宣奉勅、不論貴賤、一切禁斷、又同七年八月十七日宣旨、偲奉勅、男聽乘車者、其後雖車聽乘者、非無等差、而卑位凡庶之人、不量涯分、恣以乘用、或加黃金之飭、轉濫朱轡之體、風流嘲奇、眩妙巧驚衆目、又是凋訛之基也、夫乘車者、皆君子、不可丈夫徒行、若無隄防、何誠後車、同宣奉勅、自今以後、六位已下、乘車一切停止、但外記官吏、諸司三分已上、并公卿子孫及昇殿者、藏人所衆、文章得業生、不可必制、○以上、政事要略ヲ以テ補正ス、

一應重禁制諸司諸衛官人饗宴碁手輩事、

右饗宴之制、明在太平實字二年勅書、貞觀八年、昌泰三年格、○昌泰三年四月二十五日ノ條參看、延喜六年、天曆元年、○天曆元年十一月十三日ノ條參看、延長三年、永觀二年符、綸旨頻降、炯誠重疊、而年來典法設而不張、時俗習而不謹、有力者盡善盡美、自得衆望、無賴者若存亡、(若脱カ)獨苦一身、世之蠹害、尤在此事、同宣奉勅、自今以後、全以停止、若乖違有犯、見聞不糾之人、非可寬恕、罪同先格、

長保元年七月二十五日

四八七

諸司諸衛
ノ官人ノ
饗宴等ヲ
禁ズ

主計主稅
二寮ノ官
人諸國ノ
公文ヲ抑
留スルヲ
禁ズ

長保元年七月二十五日

四八八

一應重禁制主計主稅二寮官人稱前分勘料多求賂遺抑留諸國公文事、

右如聞諸國之吏勘濟公文之時、二寮官人稱前分勘料所求賂遺逐年無厭、好生毛羽惡求疵瑕有不計損益即時究濟無貯者不論賢愚數年稽滯勾勘之處雖似存公平抑留之情猶非無私曲明於勘勾者主計之最也、明於出納者主稅之最也、何更可以妨人事爲己任以致人愁爲身謀矣哉、事乖皇猷、理不可然、同宣奉勅自今以後如此之輩不從制止猶致拘絆者且超勘其帳、且解却見任國司和同爲他被告雖有成功不預勸賞、

以前條事下知如件方今號令之道內外雖分遵行之旨遠近何異同宣奉勅若乖新制無改舊弊隨其狀迹將加科斷者官宜承知依宣行之事出綸旨不得違失符到奉行、

正五位下守右中辨源朝臣道方

正五位下行左大史多米朝臣國平

長保元年七月廿五日

〔日本紀略〕

院一條

十二月十三日壬戌略

○中今日新制十一箇條官符、他○此事

見、無

藏人所使ヲ長門ニ遣シテ、雜丹ヲ催サシム、

〔權記〕

七月廿五日、○中以瀧口源景光爲藏人所使遣長門國令催雜丹也、先

奏案内令成御牒、

二十七日、未東三條院御修法ヲ行ヒ給ハントス、權僧正觀修ノ童子、大僧都明豪ノ童子ト鬪亂スルニ依リテ、果シ給ハズ、

〔小右記〕

七月廿八日戊申、昨伊祐朝臣繼母周忌法事修之、權僧正觀修、大僧

觀修ノ侍
童傷ク
明豪房ニ
磔ヲ投ズ

都明豪等童子鬪亂、僧正童子臂二三分許切、雜人執石投入大僧都房、打破酒海、入汁數度飛磔云々、大僧都忿怒、不會法事出去、僧正向後房懇切相屬、然而敢以不聞云々、左衛門尉信行依別當仰、馳向彼處、問注其由、信行即所談說、伊祐朝臣來同語此由、或云權僧正自昨可行女院御修法、塗壇欲修、依僧都愁、被止御修法、權僧正壇壞退出云々、甚希有事也、

〔權記〕

七月廿八日、今朝右藤中將仰陣令出衛、則孝來示、昨日僧正與明豪僧

都童子等鬪亂事甚非常也、僧正房童部以瓦磔打破僧都房云々、仍詣僧正房謁聞之、次參院、奉謁左府、

卅日、朝參內退出、詣權僧正房、

長保元年七月二十七日

四八九

明豪ノ愁
依リ御
修法ヲ
停